

## 第2章 中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

### 1 調査の経過

調査地区は吉田地区キャンパスのほぼ中央部にあたり、本部管理棟新営に伴い昭和54年度に発掘調査を行った本部構内L-14区とは最短距離にして約90m南東に位置する（Fig. 1）。

吉田遺跡調査団旧調査区でいう第1地区の南端部に該当し、昭和41年度に本調査区北側に近接して東西に平走する構内循環道路拡幅および排水溝掘削に伴い調査が実施されている。それによると、調査された地域は北から南へ向って緩やかに延びる低丘陵の南縁辺部付近にあたりとされ、弥生時代から古墳時代後期の遺物包含層をはじめとして弥生時代中期後半の竪穴住居跡1基が検出されている<sup>2)</sup>。

本地区に中央図書館が増築されることになり、昭和57年5月31日から試掘調査を実施した。その結果、予定地内全域にわたって弥生時代から鎌倉時代の遺物包含層が検出されたため、同年9月11日まで増築予定地約600㎡について発掘調査を実施した。

調査区北部および南部西半分は幅3～4m、長さそれぞれ44m、19mにわたる後世の削平が遺構面にまで及んでいたが、その他の地域について弥生時代から鎌倉時代の3層の遺物包含層、土壙5基、溝7条、旧河川跡、柱穴を検出した。3枚の遺物包含層は相互に整合状態で堆積しているが、各時期の遺物が混在しており、弥生時代以降の二次堆積に起因するものと思われる。

なお、調査進行の過程で調査区東部において水田跡の検出が予想されたため、自然科学分野の調査としてプラント・オパール分析を宮崎大学農学部藤原宏志氏に依頼した。

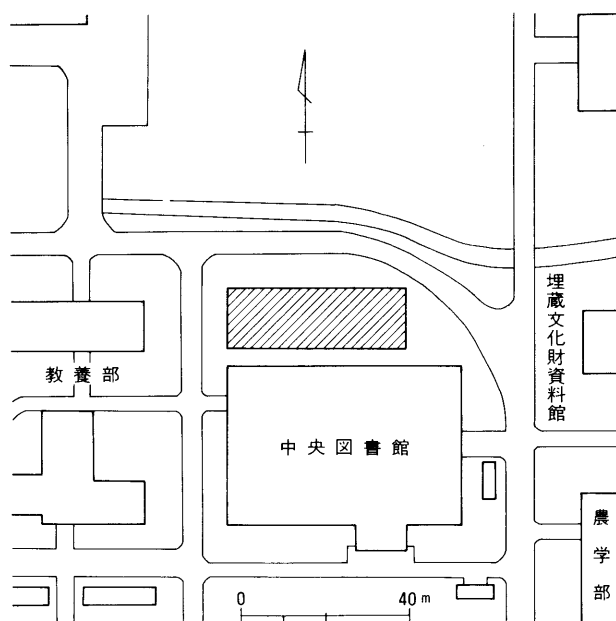


Fig. 1 調査区位置図（1800分の1）

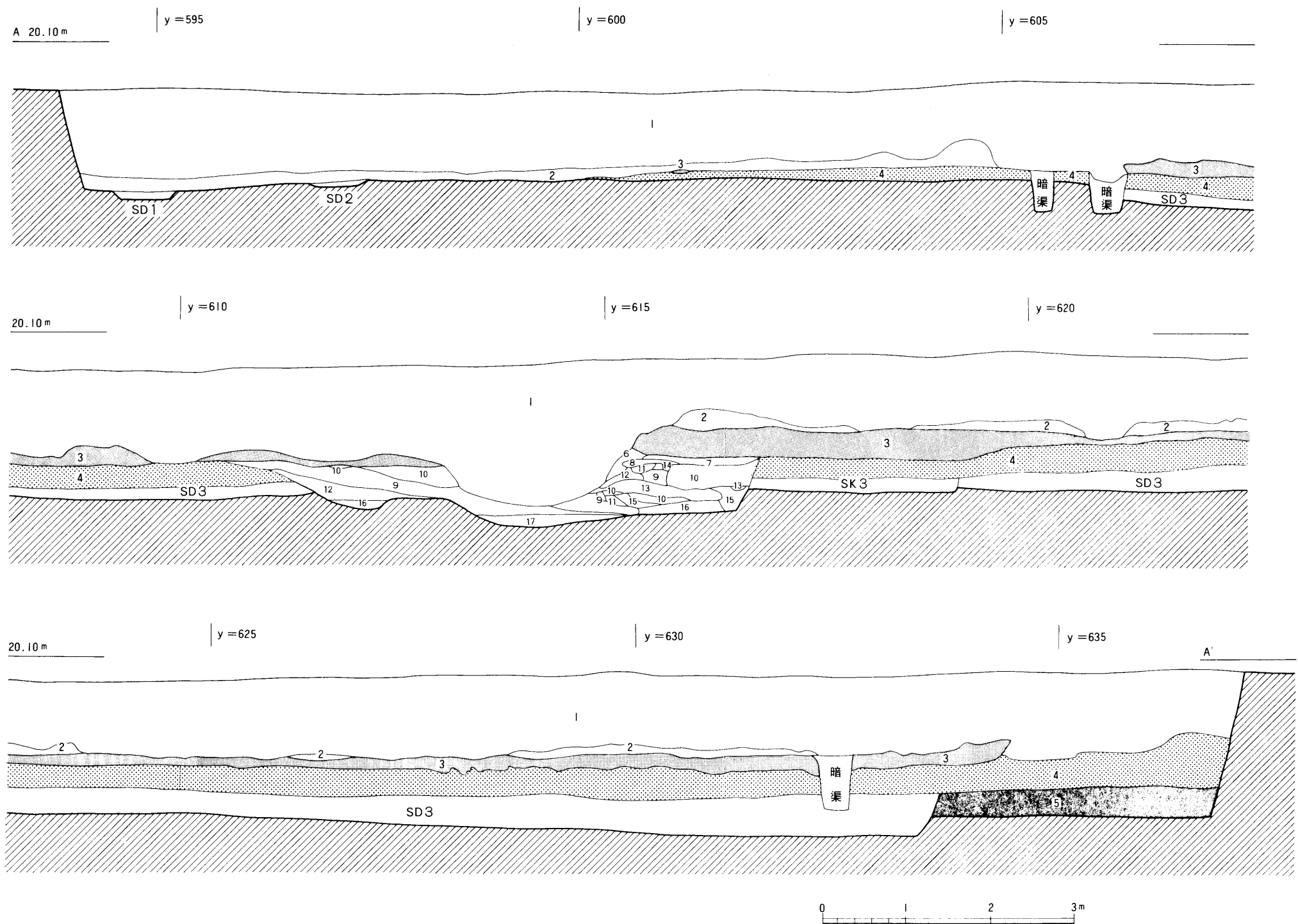


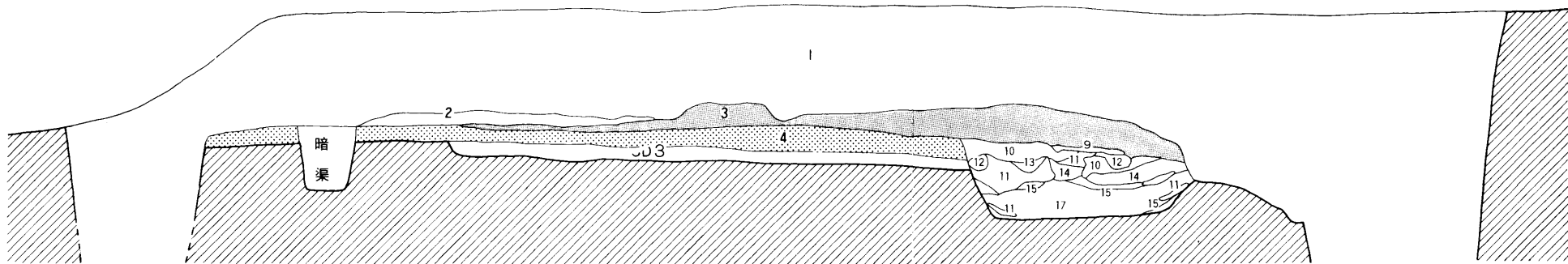
Fig. 2 A-A'土層断面図 (60分の1)

B 20.10 m

x=437

x=442

B'

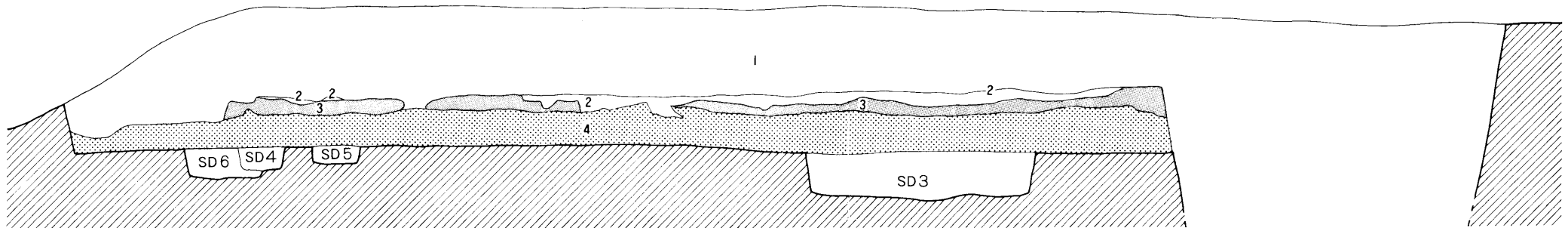


C 20.10 m

x=335

x=440

C'



凡例

- |                      |                              |                   |
|----------------------|------------------------------|-------------------|
| 1 表土 (腐蝕土、校内造成時等の置位) | 7 黄灰褐色土                      | 13 礫 (径 1 cm 以上)  |
| 2 暗灰色色土 (旧水田耕作土) 褐   | 8 暗灰褐色土                      | 14 礫 (径 1 ~ 2 cm) |
| 3 灰褐色粘質土             | 9 暗灰色砂質土                     | 15 砂              |
| 4 黒褐色粘質土             | 10 黒灰色粘質土                    | 16 暗灰色粘質土         |
| 5 明灰色砂質土             | 11 暗灰色砂質土 (径 2 ~ 3 cm の小礫含む) | 17 礫 (径 2 cm 以上)  |
| 6 明黄灰色砂質土            | 12 明灰色微砂土                    |                   |

Fig.3 B-B' C-C'土層断面図 (60分の1)

## 2 層位

調査区内は北から南へ延びる低丘陵が北側に近接して東西に貫通する構内循環道路拡幅および排水溝掘削等の諸工事によって階段状に削平され、現地表面は調査区北方の牧草地に比べ2 m弱低くなっている。調査区内の現地表面は東から西に緩やかに下降しており、東端部で標高19.90 m、西端部で19.50 mである。

遺構が検出される地山面までの基本層序は4層に区分され、上位より第1層：表土、第2層：暗灰褐色砂質土、第3層：灰褐色粘質土、第4層：黒褐色粘質土の堆積がみられる（Fig. 2・3）。第1層は腐蝕土および構内造成時の置土を包括するもので厚さ平均80～100 cm、調査区北端部では東西方向に走る共同溝埋設に伴う掘削によって200cm以上の厚さをもつ。第2層は旧水田耕作土で構内造成に伴う削平によって部分的に消失している。調査区西端部では直下が地山となっている。旧耕作土基底面の標高は東半部で約19.00 m、西半部 $y=605$ 以西は18.40～18.60 mで40～60cmの比高差が認められる。第3・4層は弥生時代前期から鎌倉時代にわたる各時期の遺物を包含し、特に第4層の出土量は多い。また、調査区東端部では第4層の下位に弥生時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する第5層：明灰色砂質土が堆積する。地山は $y=605$ 付近以西は黄褐色粘質土、以東は暗青灰色砂質土で調査区西端部は上述した低丘陵の西縁辺部にあたり、多量の遺物を包含する第3～5層はこの低丘陵上から調査区東半部に広がる小規模な谷への流れ込みによる二次堆積層と思われる。

また、調査区中央部では、第4層堆積後に丘陵縁辺部に沿って小河川が形成されている。

## 3 遺構

検出した遺構には土壙、溝、旧河川跡、柱穴がある（Fig. 4 P L 3-(2)～6）

### (1) 土壙

5基検出した。不整形で浅いものが多い。

#### 土壙SK 1（Fig. 5 P L 4-(1)）

調査区東部 $x=438$ 、 $y=601$ 付近で検出された平面形態不整形円形の土壙である。長軸106 cm、短軸71 cmの規模をもち、深さは検出面より16～18 cmと浅い。壙底標高は18.90 mである。南半部は2段に掘削されており、壙底より11 cm上位に馬蹄形状の平坦面を有する。

内部よりの出土遺物は皆無であった。

**土壌SK 2** (Fig. 6 PL 4-(2))

1号土壌の約30m北東 $x = 442$ 、 $y = 603$ 付近で検出された不定形の土壌である。北部を共同溝埋設に伴う掘削により削平されており長軸161cm以上、短軸123cmの規模をもち、深さは検出面より9cmである。壙底は北西から南西にわずかに下降しており壙底標高は約19.80m。

出土遺物には弥生土器、土師器碗、須恵器碗 (Fig.11 PL 7-(1)) がある。

**土壌SK 3** (Fig. 7 PL 4-(3))

調査区中央部 $x = 440$ 、 $y = 618$ 付近で検出された不整形の土壌である。西部は旧河川により切られ、北部は共同溝埋設に伴う掘削により消失している。長軸270cm以上、短軸107cm以上の規模をもち、東から西にわずかに下降する壙底は最深部で検出面より深さ14cmである。壙底標高約18.45m。

出土遺物には弥生土器壺、瓦質土器火鉢、土錘 (Fig. 12 PL 7-(1)) があるがいずれも流れ込みによるものである。

**土壌SK 4** (Fig. 8 PL 5-(1))

3号土壌の東に近接して営まれた土壌で $x = 445$ 、 $y = 620$ 付近に位置する。西部を柱穴に切られ、東部を共同溝埋設に伴う掘削によって消失する。平面

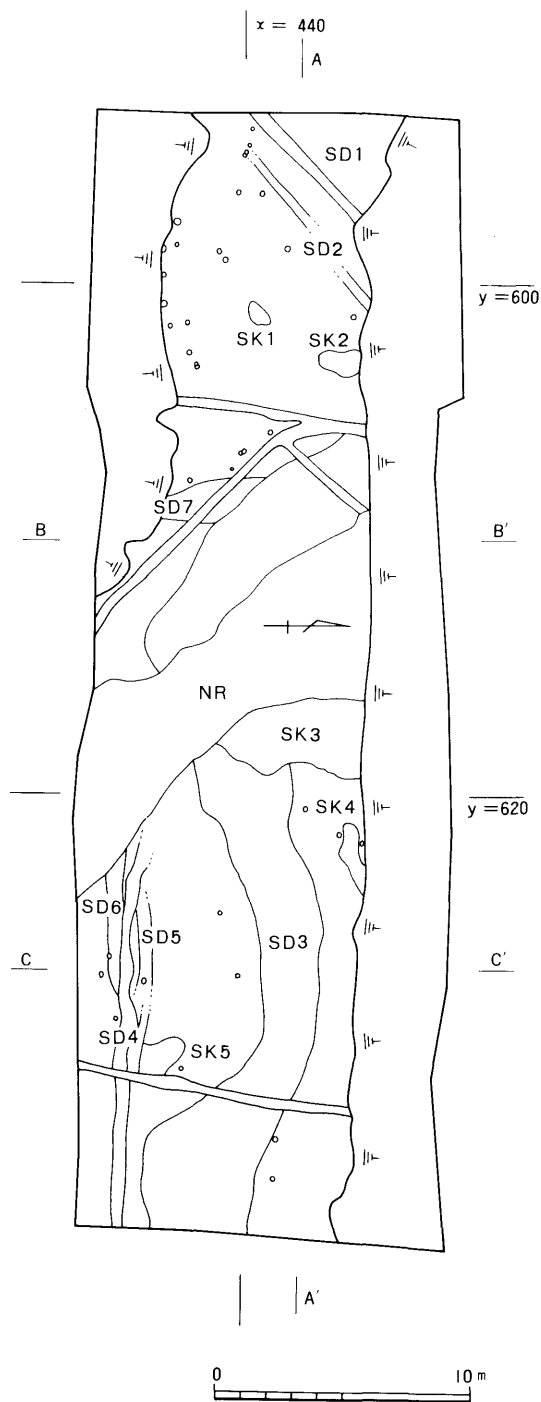


Fig.4 遺構配置図 (300分の1)

形態は不整長方形で東西に主軸をもち長軸 205 cm 以上、短軸 94 cm 規模をもつ。西隅は二段掘りになっており、壙底より 5 cm 上位に三角形の平坦面を有する。壙底はほぼ平坦で最深部の深さは検出面より 19 cm である。壙底標高 18.95 m。

内部からの出土遺物はみられなかった。

## (2) 溝

調査区東半部を中心に 7 条検出した。溝 SD 1・2 を除いて東西方向に流路をもつが、いずれも浅い。

### 溝 SD 1・2

溝 SD 1 は幅 50~70 cm、深さ 8~10 cm、溝 SD 2 は幅 60~70 cm、深さ 5~8 cm の規模をもつ。いずれも近~現代の所産。

### 溝 SD 3 (Fig. 9 PL 5 - (2))

調査区中央部を「S」字状に東西に貫流する溝で調査区外に連続する。断面形は逆台形状をなす。溝幅は一定しておらず最狭部  $y=629$  付近で 2.6 m、最広部  $y=635$  付近で 4.4 m である。溝底は西から東へ緩やかに下降し、 $y=620$  付近で検出面より深さ 22 cm、 $y=632$  付近で深さ 50 cm である。

旧河川に切られた状態で検出されたが河川の機能していた期間に時期幅があり、また、旧河川堆積土中に溝 SD 3 覆土と同一層が認められることなどから旧河川および溝 SD 3 は一時期併存して機能していた可

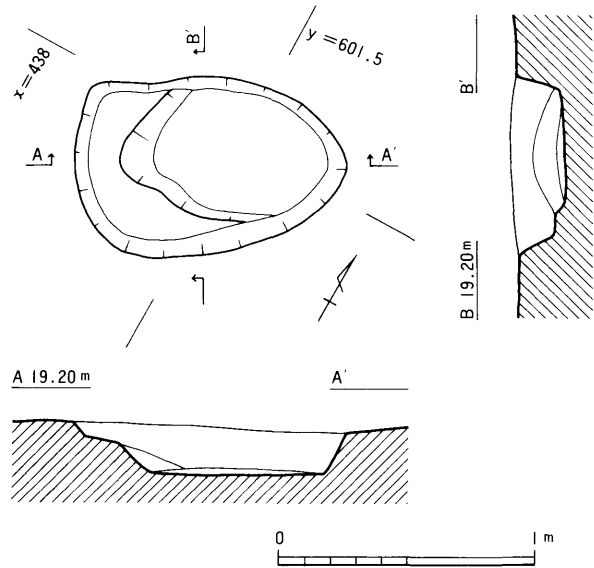


Fig. 5 土壙SK1実測図 (1/30)

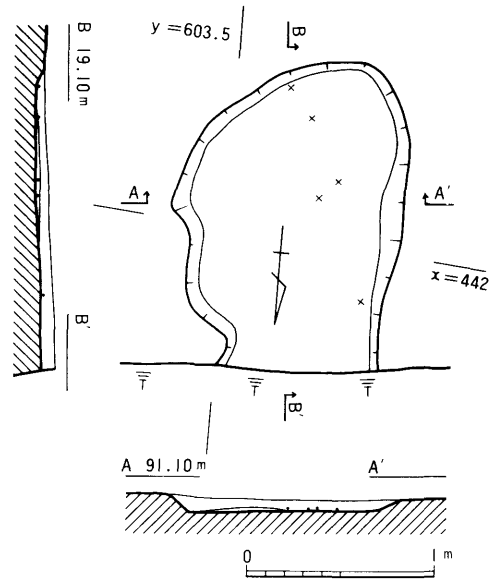


Fig. 6 土壙SK2実測図 (1/40)

中央図書館増築予定地H-16区の発掘調査

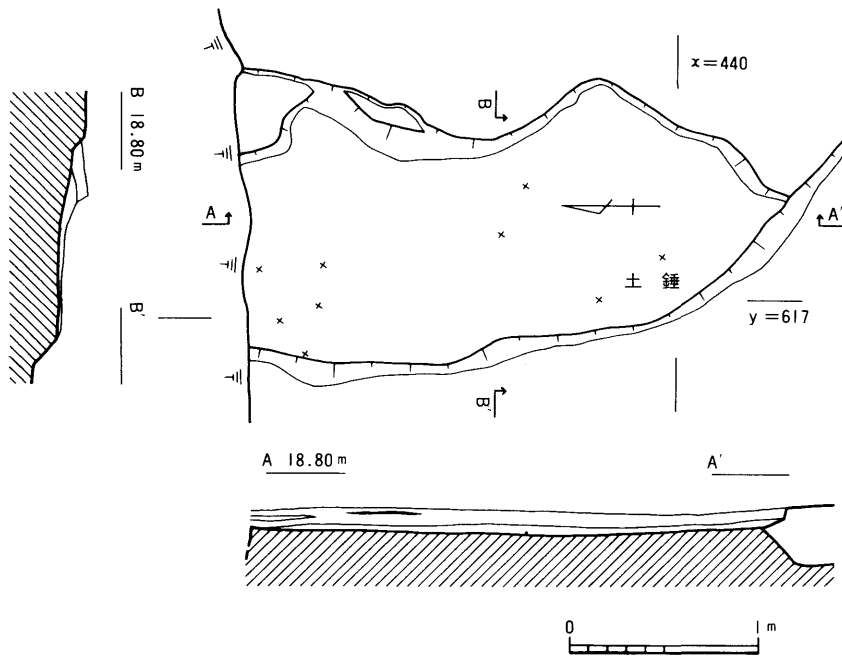


Fig. 7 土壙SK3 実測図 (1/40)

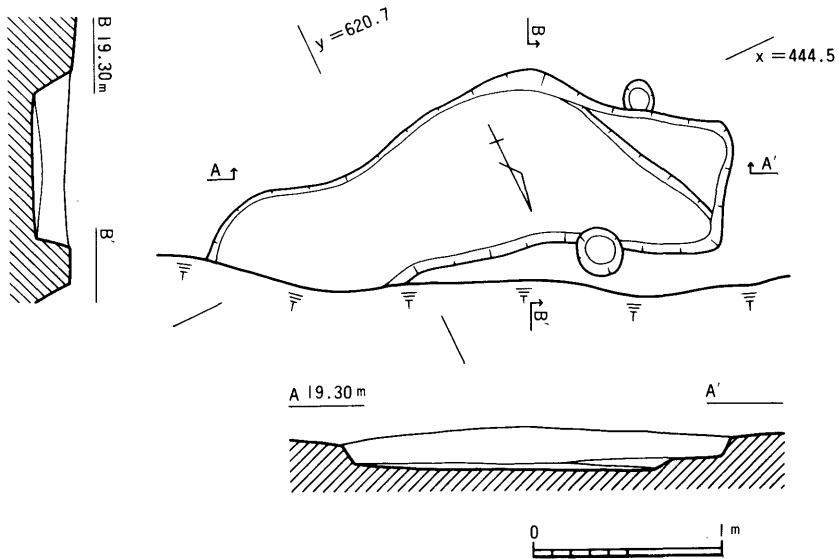


Fig. 8 土壙SK4 実測図 (1/40)

能性が指摘できる。しかし、溝SD3水口付近にしがらみ状あるいは堰状の構造物は検出されなかった。

遺 構

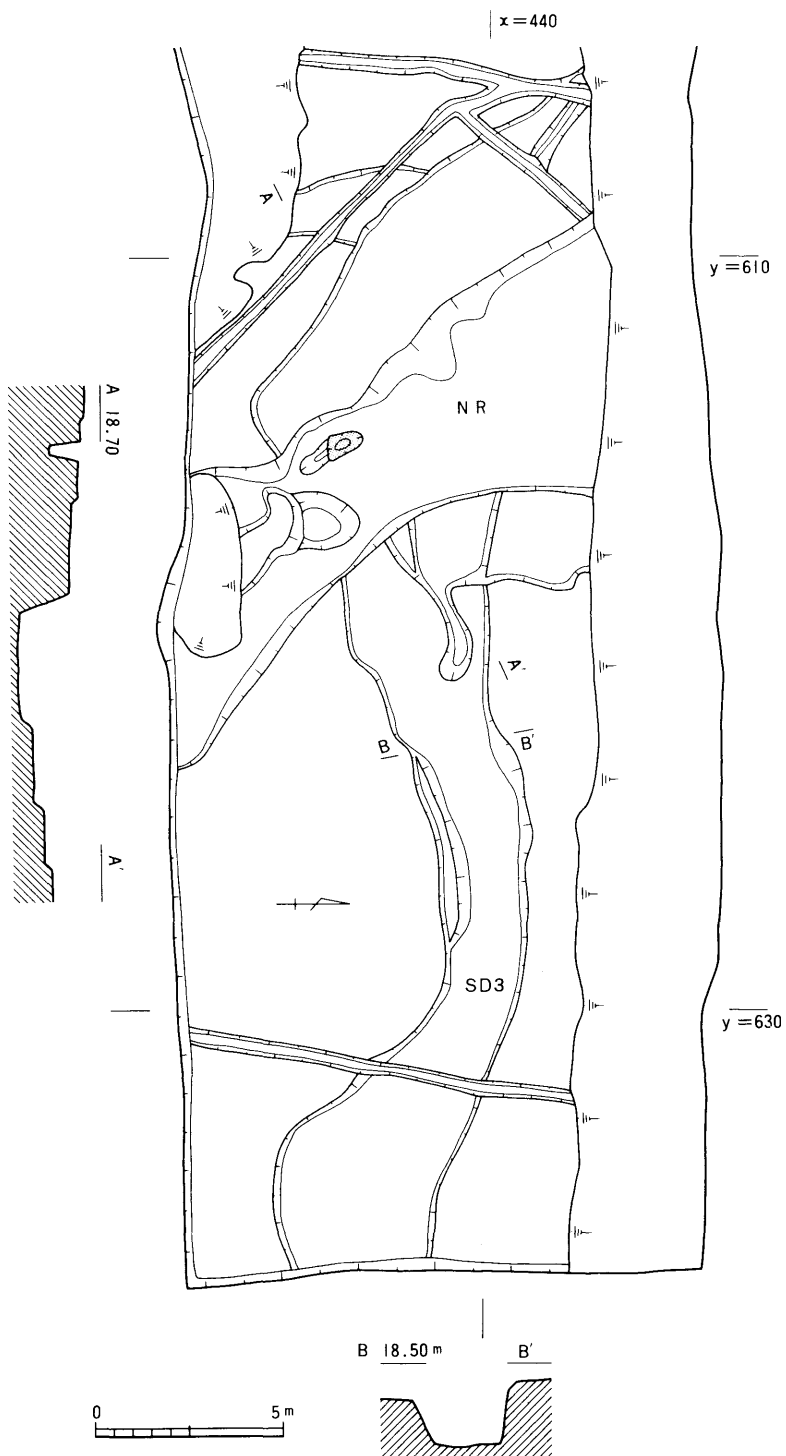


Fig.9 溝SD3. 旧河川跡NR実測図 (1/200)



覆土中より弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器が出土した (Fig.13 PL7-(2), 8-(1))。

**溝SD4 (Fig.10 PL6-(1))**

調査区南東隅において検出された小規模な溝で調査区外東方へ連続する。溝SD5・6を切っている。溝幅は約20cm、溝底は西から東へわずかに下降しており、溝深はA-A'付近で12cm、B-B'付近で18cmと浅く、溝底標高はそれぞれ18.40 m、18.50 mである。

出土遺物には須恵器坏がある (Fig.13 PL8-(2))。

**溝SD5 (Fig.10 PL6-(1))**

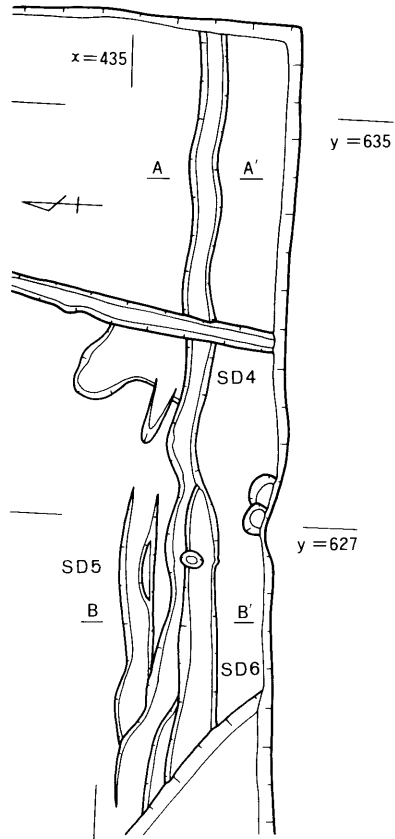
溝SD4に平行して走る小規模な溝でy=626付近で溝SD4に切られている。溝幅約30cm、溝底は平坦で溝深14cm、溝底標高18.55 m前後である。

内部より弥生土器が出土した (Fig.13 PL8-(2))。

**溝SD6 (Fig.10 PL6-(1))**

溝SD4に切られながら溝SD4と東西に平行して営まれた小規模な溝である。検出時には旧河川に切られた状況が観察された。溝幅は22~26cmで西に向うにつれて規模を増す。溝深は14cmで溝底標高は約18.30 m。なお、南壁に沿った溝底に径2~3cmの杭列が認められた。

出土遺物は皆無であった。



**(3) 旧河川跡**

調査区中央部を南東から北西に向って貫流する (Fig.9 PL5-(2))。北部は共同溝埋設に伴う掘削によって大きく削平されている。幅はx=437付近が約3.5mで最も狭く、この付近を境にして南北に規模を増し北端部で約6.5m、南端部で約5mとなる。深さは北部で80~85cm、南部で50~65cmと川床は南から北へ下降するが中央部が幾分

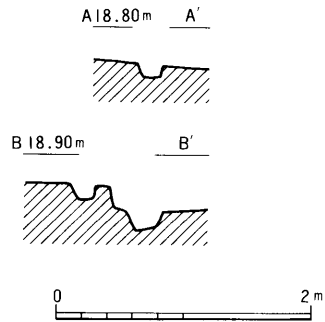


Fig.10 溝SD4・5・6実測図(1/60)

## 遺 物

深くなる。なお川床には砂礫層が厚く堆積し、第3層の堆積をもって河川の機能は停止する。

流路内には少くとも2時期の杭列が検出された。すなわち、 $x=443$ 、 $y=611$ 付近と $x=432$ 、 $y=622$ 付近とを結ぶライン上に70～80cmの距離をおいて北西－南東方向に平行して打ち込まれた時期不明の一群（A杭列）と $x=441$ 、 $y=612$ 付近および $x=438$ 、 $y=613$ 付近と $x=434$ 、 $y=616$ 付近とを結ぶライン上に110～130cmの距離をおいて北西－南東方向に平行して打ち込まれた一群（B杭列）である。

A杭列は径4～8cmの丸太材が10～13cm間隔で2列に規則的に打ち込まれており、南半部の杭列が河川東縁辺に沿うことから $x=432$ 、 $y=612$ 付近と $x=432$ 、 $y=624$ 付近とを結ぶラインがこの杭列に伴う河川の東河畔にあたっていたと推察される。

また、B杭列は径3～5cmの小ぶりの丸太材を使用しており、同様に少くとも $x=438$ 、 $y=612$ 付近と $x=434$ 、 $y=616$ 付近間の河畔ラインが杭列に伴う河川の西河畔であったことを示唆する。なお、河畔に近い西側の杭列付近にはその他の構造物はなく、河岸補強に依拠すると思われる杭の打ち替え、増強が認められる。

旧河川跡からは弥生時代前期から鎌倉時代前期にかけての各時期の遺物が混在しているが、B杭列は $x=436$ 、 $y=615$ 付近に位置する不整楕円形の落ち込みからの出土遺物から古墳時代前期前葉にその上限をおくことができる。

### 3 遺 物

#### (1) 遺構出土の遺物

##### 土壙SK2出土遺物 (Fig.11 P L 7-(1))

##### 弥生土器 (1・2)

1は平底の甕の底部で外面は縦刷毛目仕上げ。外面橙褐色、内面黄褐色を呈する。2は安定感のある平底の壺の底部。器面荒れのため調整不明。1・2とも胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好。

##### 土師器 (3)

底部と体部の境に貧弱な低い高台を貼付する糸切り底の碗。外面横ナデ、内面不明。濁黄褐色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。復原底径6.2cm、高台高0.3cm。

##### 須恵器 (4・5)

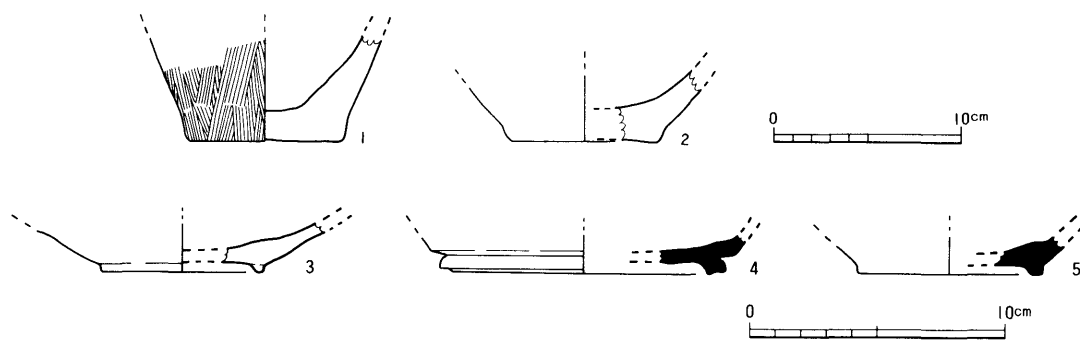


Fig.11 土壌 S K 2 出土遺物実測図

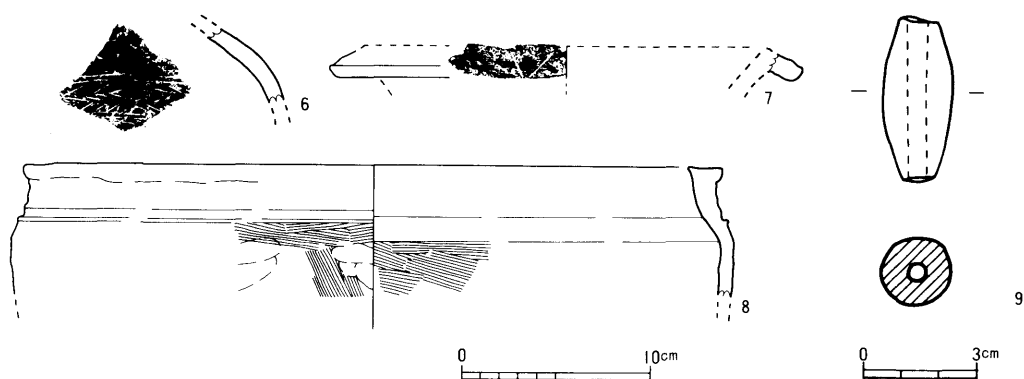


Fig.12 土壌 S K 3 出土遺物実測図

坏の底部。4は明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開くやや幅広の高台を貼付する。高台端部は窪み、接地面は高台内側端。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。复原底径10.0cm、高台高0.7cm。5は断面長方形の小さな高台を有するもの。底部内外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。复原底径7.1cm、高台高0.4cm。4は青灰色、5は暗青灰色を呈し、胎土、焼成は良好。

土壌SK3 出土遺物 (Fig.12 PL 7-(1))

弥生土器 (6・7)

6は壺の胴上半部で沈線間に篲による羽状文を少くとも2段施文する。外面へラ磨き、内面調整不明。7は下垂する口縁部外面に鋸歯文を刻む壺。内外面とも横ナデ仕上げ。6は橙褐色で胎土、焼成とも良好。7は灰褐色で胎土やや不良、焼成良好。

瓦質土器 (8)

遺物

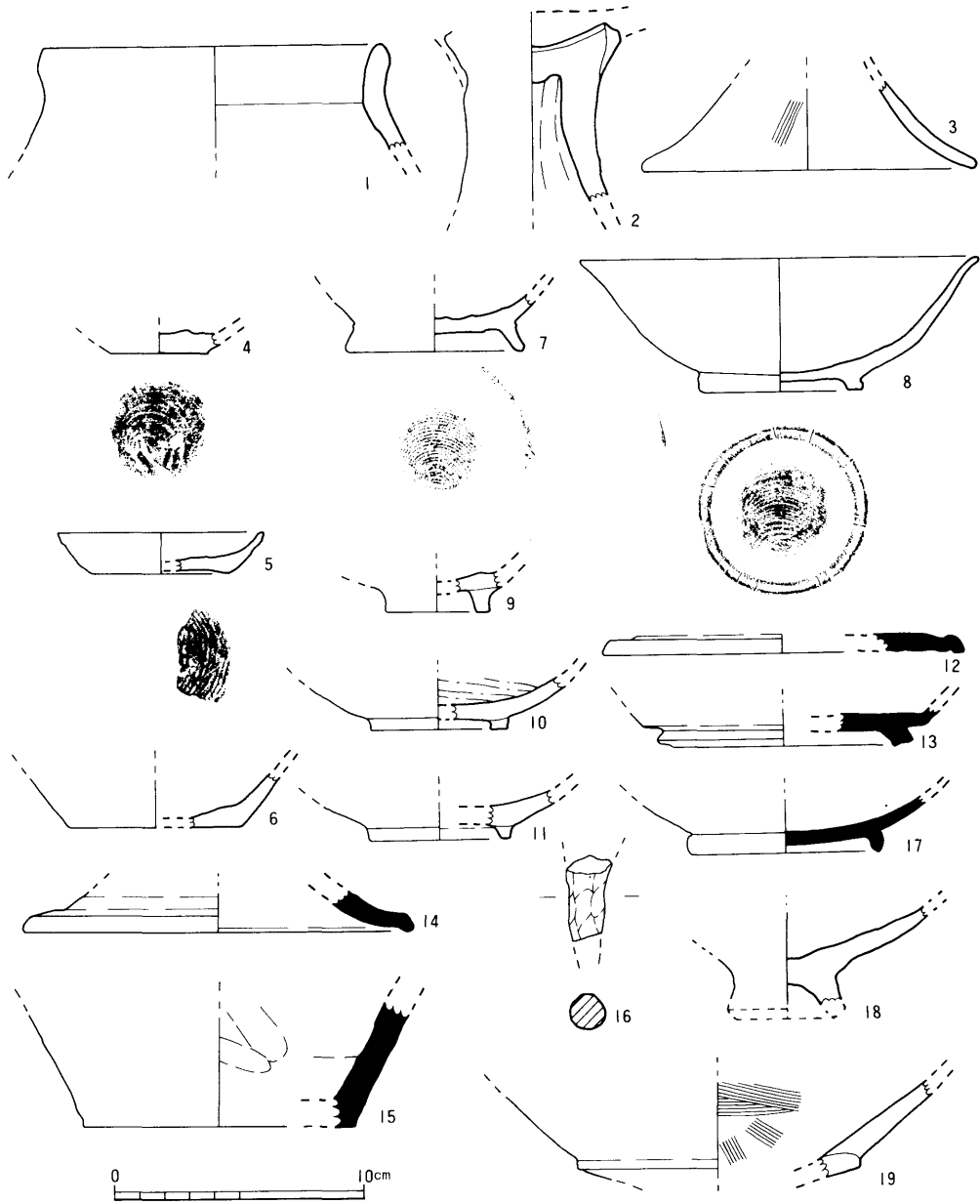


Fig. 13 溝SD3 (1~16)・SD 4 (17)・SD5 (18・19) 出土遺物実測図

火鉢の口縁部。口縁端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部横ナデ、体部刷毛目調整。黒灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

土錘 (9)

紡錘形をなす。乳白色を呈し、焼成は良好であるが、胎土に粗砂を多く含む。全長4.3 cm、最大幅1.9 cm、孔径0.6 cm。

**溝3 出土遺物** (Fig.13 1~16 P L 7-(2), 8-(1))

弥生土器 (1~3)

1は短く直立する口縁部をもつ壺で調整不明。2は高杯の脚上半部で器面の荒れが著しい。3は蓋で端部は丸くおさめる。体部外面刷毛目、端部内外面横ナデ仕上げ。1は赤褐色で胎土良好、焼成やや不良。2・3は濁黄褐色を呈し、胎土不良、焼成良好。

土師器 (4~11)

4・5は小皿で糸切り底。4は体部が内彎ぎみに開き口縁端部は尖る。復原口径8.2 cm、底径5.4 cm、器高1.7 cm。鎌倉時代前期の所産。4・5とも底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げ。4は淡黄褐色、5は赤橙色で、胎土、焼成とも良好。6は糸切り底の坏で体部内外面横ナデ調整。淡黄褐色で、胎土、焼成不良。7~11は碗の底~体部片、7は底部と体部の境に外方へ開くやや高めの高台を貼付する。糸切り底で横ナデ仕上げ。濁黄褐色。底径7.0 cm、高台高1.2 cm。8はほぼ完形で体部は内彎して立ち上がり口縁端部は外反する。底部内面ナデ、他は横ナデ仕上げで糸切り底。口径15.9 cm、底径6.1 cm、器高5.3 cm。平安時代後期の所産。9は灰褐色、10は橙褐色、11は乳白色を呈する。10は内面へう磨き。胎土は9がやや不良、他は良好。8・9は金雲母を含む。焼成は7・11がやや不良、他は良好。

須恵器 (12~15)

12は坏蓋。扁平で鳥嘴状口縁は丸く屈曲する。天井部はナデつける。復原口径14.4 cm。13は坏身。明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開く幅広の高台を貼付する。接地面は高台内側端。底部内面ナデ、他は横ナデ。底径8.8 cm、高台高0.6 cm。14は高杯の脚部。端部は屈曲し丸くおさめる。内面ナデ仕上げ。15は壺の底部。底部側面横ナデ、他はナデ仕上げ。12・15は暗青灰色、13・14は青灰色、胎土は15がやや不良、焼成はいずれも良好。

瓦質土器 (16)

鼎の脚部で指圧による整形を施す。灰黒色で胎土に、粗砂を含み、焼成は良好。

**溝4 出土遺物** (Fig.13 17 P L 8-(2))

17は須恵器坏身で外方へ開く高台を折り曲げ直立させる。内面には自然釉が厚くかかる。内外面とも横ナデ仕上げ。青灰色を呈し、胎土良好、焼成堅緻。

**溝5 出土遺物** (Fig.13 18・19 P L 8-(2))

いずれも土師器。18は低脚付の坏。外方へ開く脚部内面は指圧による整形を施す。内面ナデ、外面横ナデ仕上げ。19は坏部に段を有する高坏。外面横ナデ、内面刷毛目仕上げ。18は乳白色、19は濁黄褐色を呈する。18は胎土やや不良で焼成はいずれも良好。

旧河川跡出土遺物 (Fig. 14~20 P L 8-(3)~13-(2))

弥生土器、土師器、須恵器、磁器、瓦質土器、石器が出土した。

弥生土器 (Fig. 14 P L 8-(3) 9-(1))

前期から後期の遺物がある。

1~4は壺。1は胴部上半をめぐる沈線間に有軸羽状文を施文する。2は口縁端部を上方にわずかにつまみ上げて肥厚させ、外面に3条の凹線風の沈線を刻み、2条単位のヘラ描き鋸歯文を施文する。3は下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を刻む。4は短く外反する口縁部で端部は尖る。1は器面荒れのため調整不明。2~4は内外面とも横ナデ。1は黄褐色、2・4は茶褐色、3は黒褐色を呈し、胎土、焼成はいずれも良好。2は特に焼成堅緻。5・6は「く」の字に外反する甕の口縁部。5は黒褐色で胎土、焼成良好。6は黄褐色で胎土精良、焼成堅緻。7・8は壺、9~17は甕の底部であるがいずれも器面の荒れが著しく調整不明。18・19は高坏の脚部。19は裾部の開きが小さく内外面横ナデ仕上げ。18は黄褐色、19は乳白色でいずれも胎土、焼成良好。

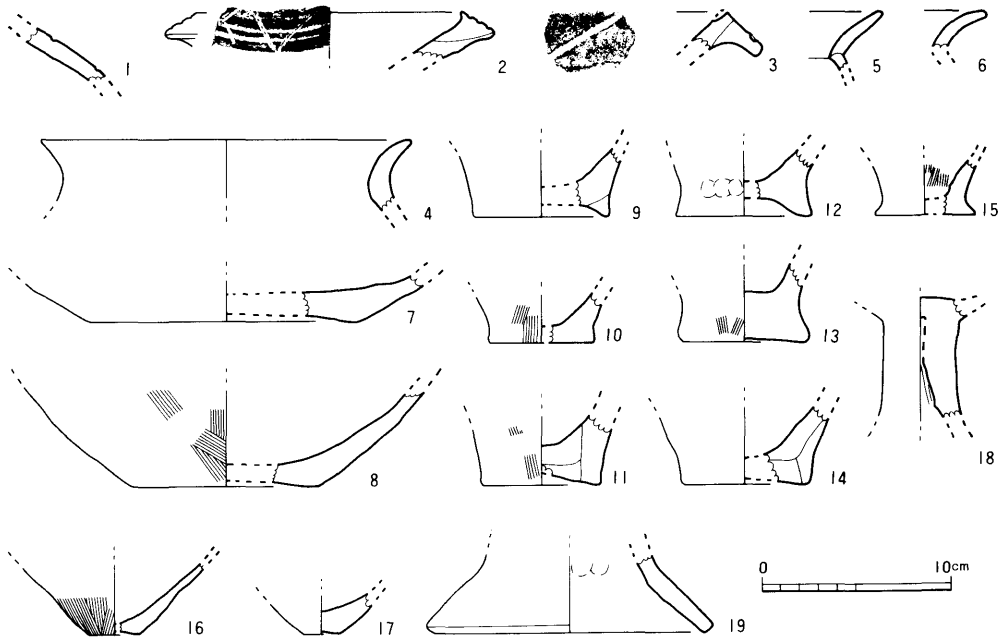


Fig. 14 旧河川跡NR出土遺物実測図 (弥生土器)

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

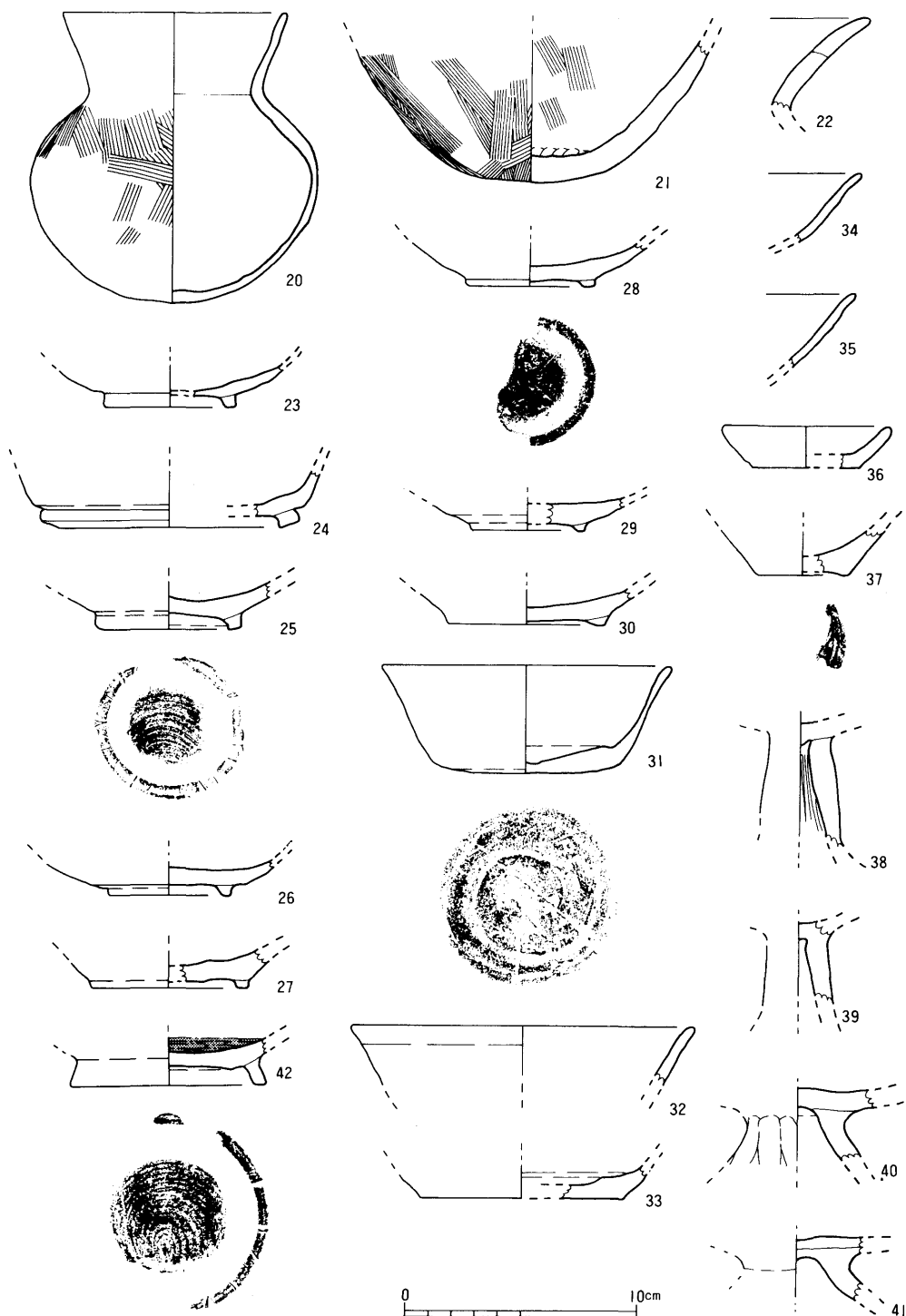


Fig. 15 旧河川跡NR出土遺物実測図（土師器・黒色土器）

遺 物

土師器 (Fig.15 1~41 PL9-(2) 10)

20~22、39・40は古墳時代の土師器、20は布留式併行の小型丸底壺。歴史時代の土師器には坏、甕、小皿、高坏があり、主体は平安時代後半~鎌倉時代前半。

黒色土器 (Fig.15 42 PL10-(2))

外方へ開く断面長方形の高台を貼付する黒色土器A類。内面へう磨き、外面横ナデ仕上げ。糸切り底で底径8.2cm、高台高1.2cm。胎土良好、焼成堅緻。

須恵器 (Fig.16~18 PL9-(2) 11 12)

坏、甕、壺、高坏、盤があり、6世紀後半~9世紀代のものが混在する。

青磁 (Fig.19 104・105 PL13-(1))

104は同安窯系の青磁碗の口縁部。外面に櫛目、内面にへらによる草花文の一部が認められる。胎土は灰白色、釉は青緑色。105も同安窯系の碗の底部で削り出しのやや高い高台を有する。施釉は内面のみで青緑色、胎土は淡灰白色。

瓦質土器 (Fig.19 106 PL13-(1))

内彎ぎみに内傾する鉢の口縁部。端部は肥厚し平坦。内外面とも横ナデ調整。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

石器 (Fig.20 PL13-(2))

107は頭部の一部および刃部を欠損する太型蛤刃石斧で周縁の研磨は丁寧。108は扁平な円

Tab.2 旧河川跡NR出土遺物観察表(土師器) 1

法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.15 20	壺	9.6		12.3		小型丸底壺。球形の胴部に直線的に開く口縁部をもつ。	外面頸部以下刷毛目、底部内面ナデ、他は横ナデ。外面煤付着。	濁黄褐色	精 良	良 好
21	甕					厚手の丸底の底部。	底部内面ナデ、他は刷毛目仕上げ。	茶褐色	良 好	良 好
22	甕					口縁部は「く」の字に外彎ぎみに外反。端部は尖る。	内外面とも横ナデ調整。	茶褐色	や や 不 良	や や 不 良
23	碗		(5.6)		0.6	やや外方へ開く断面方形の低い高台を貼付する。	外面横ナデ。内面器面荒れのため不明。糸切り底。	乳白色	精 良	堅 緻
24	碗		(9.4)		0.8	明瞭な底部と体部の境より内側に外方へ開く高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良 好	良 好



中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab. 3 旧河川跡NR出土遺物観察表（土師器）2 法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig.15 25	碗		5.2		0.4	明瞭な底部と体部の境より内側に断面長方形の高台を付す。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	良好	良好
26	碗		(6.5)		0.4	外側端で接地する高台を底部と体部の境に貼付する。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	黄灰色	やや不良	良好
27	碗		5.4		0.3	底部と体部の境に扁平な低い高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ヘラ磨き、底部外面にヘラ記号。	乳白色	良好	良好
28	碗		6.0		0.6	底部と体部の境に直立する高台を貼付する。	外面横ナデ。他は不明。糸切り底。	黄灰色	良好	堅緻
29	碗		4.8		0.3	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	黄灰色	良好	良好
30	碗		6.7		0.4	底部と体部の境に断面台形の扁平な低い高台を貼付する。	器面荒れのため調整不明。	黄白色	良好	良好
31	杯	12.3	8.0	4.7		体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反ぎみに肥厚。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。底部外面ヘラ切り後ナデツケ。	黄灰色	良好	良好
32	杯	(14.6)				口縁端部はやや外反し、丸く終る。	内外面とも横ナデ。	灰白色	やや不良	やや不良
33	杯 (皿)		(8.7)			底部と体部の境は明瞭。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
34	杯 (碗)					体部は内彎ぎみに開き、口縁端部はわずかに外反する。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	良好	良好
35	杯 (碗)					体部は内彎ぎみに開き、口縁端部は外反する。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	良好	堅緻
36	小皿	(7.0)	(4.6)	1.8		厚手の体部は内彎ぎみに開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
37	小皿		(4.0)			厚手の底部はやや上げ底。小型の杯に近い。	器面荒れのため調整不明。糸切り底。	橙褐色	やや不良	不良
38	高杯					短脚の脚部を杯部外面に貼りつける。	内面ナデ、外面器面荒れのため調整不明。内面シボリ痕。	赤褐色	良好	堅緻
39	高杯					脚部はやや外方へ開く。	内面ナデ、外面器面荒れのため調整不明。	赤橙色	良好	良好
40	高杯					脚部は大きく「ハ」の字状に開く。	脚部外面指圧による整形。他は横ナデ。	黄灰色	良好	堅緻
41	高杯					脚部は大きく「ハ」の字状に開く。	脚部内外面横ナデ。杯部内面ナデ。接合部はヘラによる押圧。	黄灰色	やや不良	堅緻

遺 物

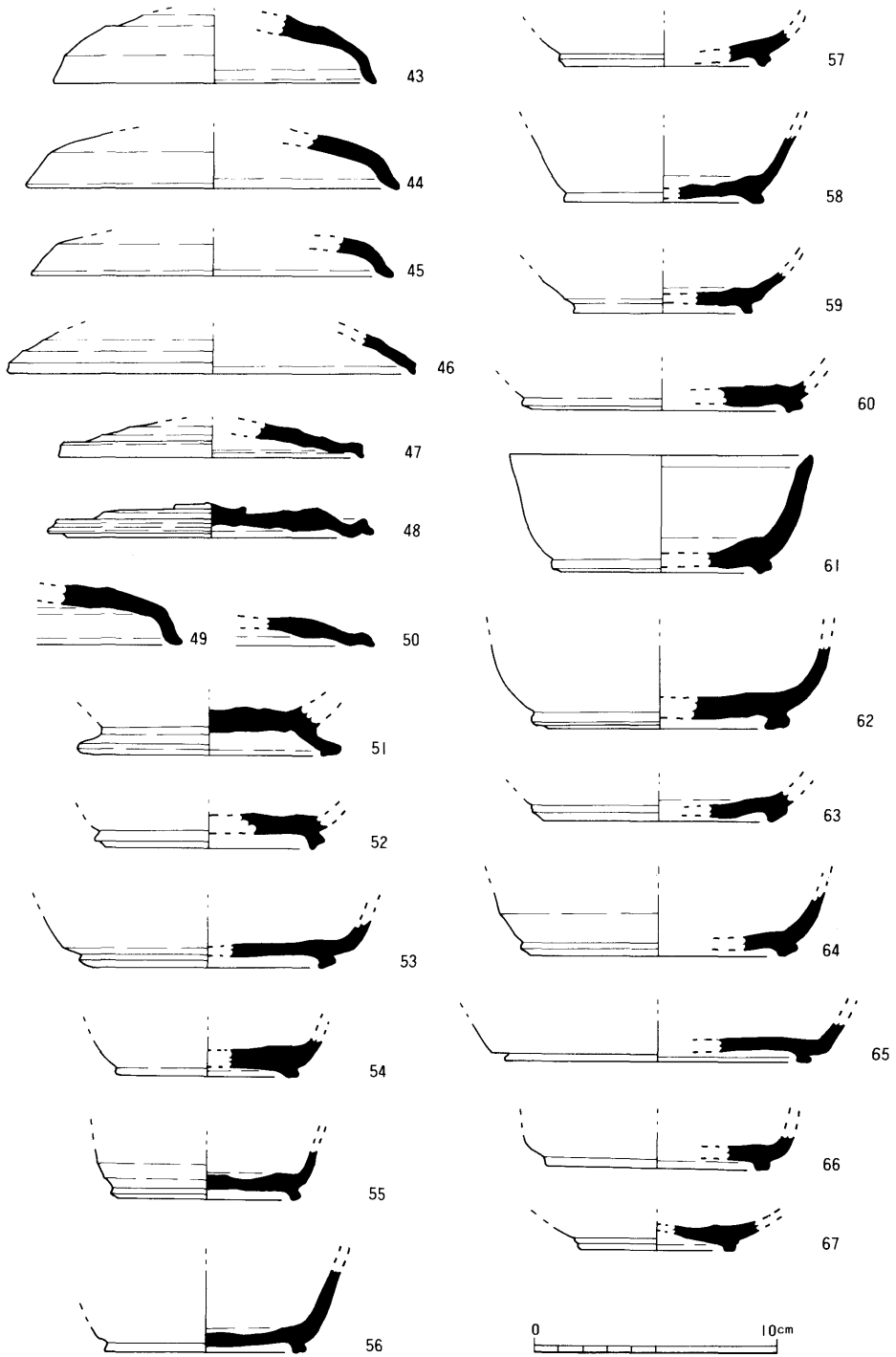


Fig. 16 旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）1

中央図書館建築予定地M-16区の発掘調査

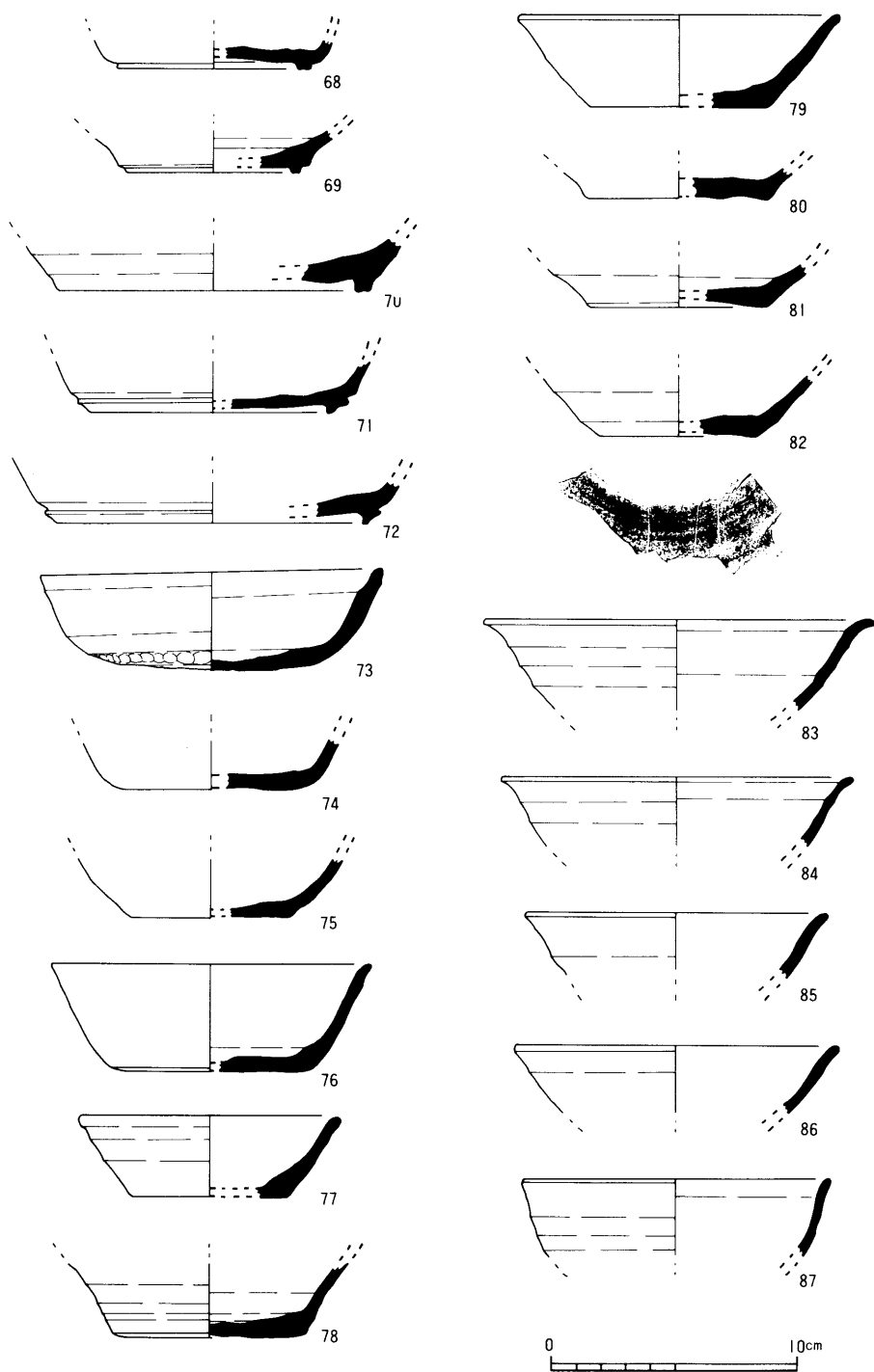


Fig. 17 旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）2

遺 物

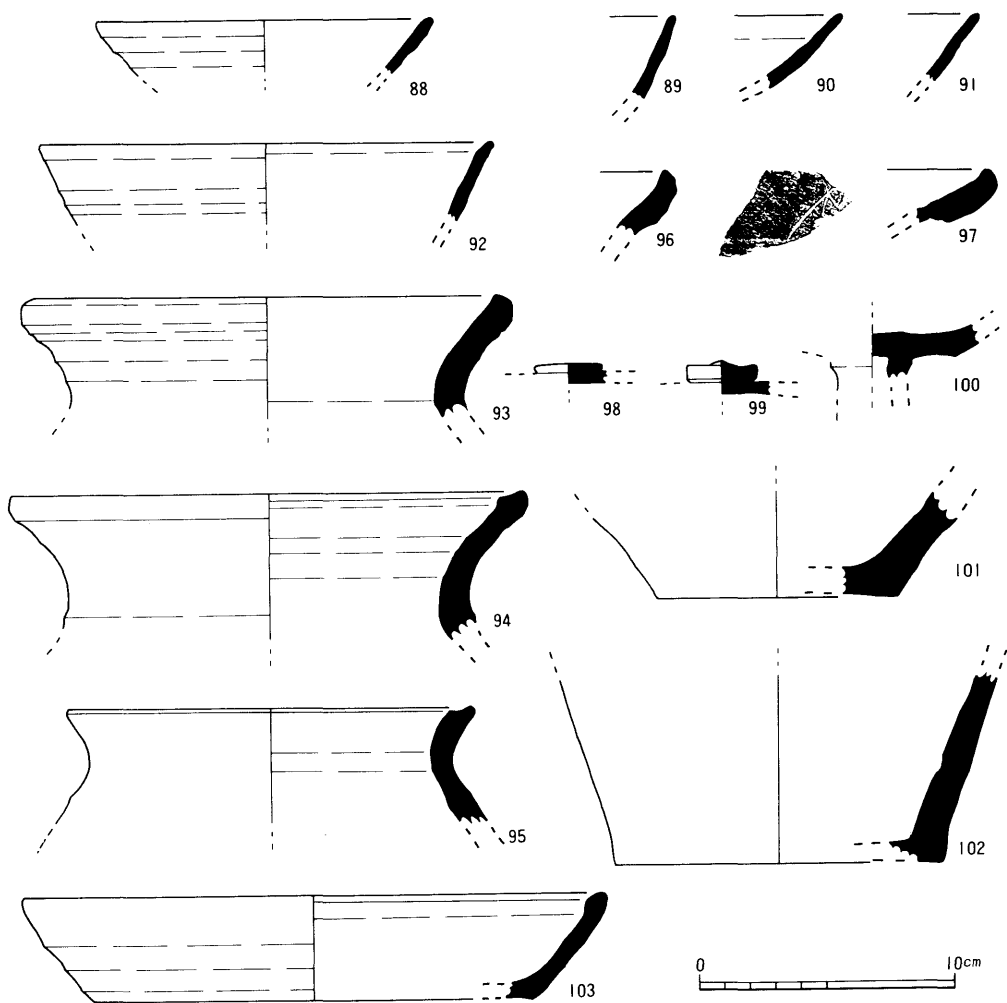


Fig. 18 旧河川跡NR出土遺物実測図（須恵器）3

Tab. 4 旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）1

法量（ ）は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高台高					
Fig. 16 43	坏蓋	(13.0)				天井部から体部へはゆるやかに移行。口縁部は外彎ぎみ。	天井部内面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	良 好	不 良
44	坏蓋	(15.0)				口縁部は外彎ぎみに下降。端部内面に不明瞭な段。	内外面とも横ナデ。	灰白色	良 好	不 良
45	坏蓋	(14.7)				やや扁平で、口縁端部内面に不明瞭な段をもつ。	内外面とも横ナデ。	乳白色	や や 不 良	不 良

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.5 旧河川跡NR出土遺物観察表(須恵器) 2

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig. 16 46	坏蓋	(16.4)				体部から口縁部へ直線的に移行。 鳥嘴状口縁部外面窪む。	内外面とも横ナデ、体部外面の一部はナデ。	青灰色	良好	堅緻
47	坏蓋	(12.4)				鳥嘴状の口縁部は下方へ突出して尖る。端部外面は窪む。	体部は粗いナデ、口縁部は横ナデ。調整は粗い。	暗青灰色	良好	良好
48	坏蓋	13.3		1.5		完形。扁平な攪を有し、体部は屈曲して鳥嘴状口縁に至る。	天井部・体部内外面は粗いナデ、口縁部は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
49	坏蓋					口縁部内面に不明瞭な段を有し、端部は尖りぎみに終る。	口縁部内外面横ナデ 他は器面荒れのため調整不明。	濁黄褐色	良好	不良
50	坏蓋					体部から屈曲して鳥嘴状の口縁部に至り、口縁部は尖る。	体部の一部・口縁部内外面は横ナデ、他はナデ。	青灰色	良好	良好
51	坏身		9.1			外方へ踏んばる特異な高台を有し、内側端を接地面とする。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
52	坏身		(8.4)			外方へ開く断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
53	坏身		(9.1)			底部と体部の境より内側に外方へ開く高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
54	坏身		(6.8)			外方へ開く断面長方形の扁平な高台の内側端が接地面。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	やや不良	良好
55	坏身		7.0			外方へ開く断面方形の高台を付す。端部は窪む。	底部内外面ナデで外面は粗雑。他の部分は横ナデ。	灰青色	良好	良好
56	坏身		6.2			外方へ開く断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
57	坏身		(8.1)			外方へ開く断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	内面は体部の一部を除いてナデ、外面は横ナデ。	青灰色	良好	良好
58	坏身		(8.1)			底部と体部の境に外方へ開く断面台形の高台を貼付する。	底部内外面ナデで内面のナデは粗い。他の部分は横ナデ。	暗青灰色	良好	やや不良
59	坏身		(7.2)			底部と体部の境より内側に断面台形の高台を貼付する。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
60	坏身		(10.6)			外方へ開く断面長方形の扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面粗いナデ、他は横ナデ。	暗灰色	良好	やや不良
61	坏身	(12.4)	(8.0)	(4.5)	0.5	一様な厚さで移行する底部から体部の境にわずかに外方へ開く断面長方形の扁平な高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。口縁部内面鑿削りの後横ナデ。	暗青灰色	良好	良好
62	坏身		(9.2)		0.7	底部と体部の境に下ぶくらみの高台を付す。端部は窪む。	底部内外面・体部内面の一部はナデ。他は横ナデ。	灰白色	不良	やや不良
63	坏身		(9.4)		0.6	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	不良	良好

## 遺物

Tab.6 旧河川跡NR出土遺物観察表(須恵器) 3

法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.16 64	坏身		(10.4)		0.5	外方へ開く高台を貼付し、高台内側端を接地面とする。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
65	坏身		(12.4)		0.3	大型の坏。底部と体部の境より内側に外方へ開く高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	良好	堅緻
66	坏身		(8.9)		0.4	直線的に下降する断面長方形の高台の接地面は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
67	坏身		(10.3)		0.5	底部と体部の境に直線的に下降する断面長方形の高台付す。	底部外面粗いナデ、体部・高台外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
Fig.17 68	坏身		(7.8)		0.2	わずかに外方へ開く断面長方形の扁平な高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
69	坏身		(7.0)		0.2	底部と体部の境より内側に直線的に下降する低い高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	精良	良好
70	坏身		(12.6)		0.5	厚手大型の坏。やや内傾する断面台形状の高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	暗青灰色	良好	堅緻
71	坏身		(9.7)		0.6	底部と体部の境より内側に内側端を接地面とする高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
72	坏身		(12.6)		0.6	大型の坏。接地面は高台内側端で端部は尖る。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。高台両端部をツマミ出す。	灰白色	精良	不良
73	坏身	15.8	7.8	4.0		完形。体部は内彎ぎみに立ち上がり、端部付近で屈曲する。	底部・体部内外面下半はナデ、他は横ナデ。底部外面指圧痕。	淡灰色	良好	やや不良
74	坏身		(7.1)			底部と体部の境はやや不明瞭。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	精良	やや不良
75	坏身		(6.0)			薄手の底部から体部は内彎ぎみに立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	やや不良
76	坏身	(12.8)	(6.2)	(4.4)		体部は直線的に立ち上がり、端部は外反ぎみに尖る。	底部内外面ナデ、他は丁寧な横ナデ。	青灰色	良好	やや不良
77	坏身	(10.3)	(6.2)	(3.3)		皿ないしは小型の坏。口縁端部付近は外反し肥厚する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
78	坏身		9.8			平底に近く、体部は直線的に外方へ立ち上がる。	底部外面やや粗いナデ、他は粗い横ナデ。	乳白色	良好	不良
79	坏身	(12.8)	(7.1)	(3.8)		直線的に立ち上がる体部は口縁端部付近で外反する。	底部内面ナデ、外面器面荒れのため不明。他は横ナデ。	乳白色	精良	不良
80	坏身		(7.2)			体部は下半部で外彎ぎみに立ち上がる。	底部外面および内面の一部ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
81	坏身		(7.0)			体部は底部からやや屈曲ぎみに直線的に立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	やや不良	堅緻

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.7 旧河川跡NR出土遺物観察表(須恵器) 4

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig.16 82	坏身		(6.2)			体部は厚手の底部から直線的に立ち上がる。体部器壁薄い。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
83	坏身	(15.4)				体部は内彎ぎみに立ち上がり、端部は大きく外反する。	体部内面下半ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
84	坏身	(14.0)				口縁部の破片。端部は外反し丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
85	坏身	(11.9)				やや厚手の口縁部で、端部はわずかに外反する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
86	坏身	(12.8)				口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	暗青灰色	やや不良	良好
87	坏身	(12.2)				口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部はやや外反。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	やや不良
Fig.18 88	坏身	(12.8)				口縁部の破片。厚手に仕上げられ端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	淡灰色	良好	堅緻
89	坏身					口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部は丸く終る。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
90	坏身					口縁部の破片。体部は内彎ぎみに開き、端部は尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	淡灰色	やや不良	やや不良
91	坏身					口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	青灰色	精良	良好
92	坏身	(19.4)				口縁部の破片。体部は直線的に開き、端部はやや尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	良好
93	甕	(17.8)				口縁部は強く直線的に開き、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。頸部内面はヘラによる整形圧痕。	暗青灰色	良好	堅緻
94	甕	(19.8)				口縁部外面は平坦に近い面をなし、内面に段をもつ。	口縁部内外面横ナデ、頸部以下内面ナデ。	青灰色	精良	良好
95	甕	(15.6)				短く外反する口縁部は肥厚。端部外面は窪む。	口縁部内外面横ナデ、頸部以下内外面ナデ。	暗青灰色	不良	堅緻
96	甕					口縁部は内彎ぎみに開き、肥厚する。	内外面とも横ナデ。内面にヘラ記号。	淡青灰色	良好	良好
97	甕					外面への粘土帯貼付により口縁部は肥厚する。	須恵質。内外面とも横ナデ。	淡灰色	精良	良好
98	坏蓋					撮。ボタン状に近く、著しく扁平。	撮外面はナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
99	坏蓋					撮。扁平な擬宝珠状。	外面横ナデ、内面ナデ。	青灰色	不良	良好

遺 物

Tab.8 旧河川跡NR出土遺物観察表（須恵器）5 法量（ ）は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高台高					
Fig.18 100	高坏					坏部は強く屈曲し外方へ開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	堅 緻
101	壺		( 9.3)			安定した平底。窯床面の砂床付着。	底部外面ナデ、他は横ナデ。断面に二次焼成痕。	小豆色	良 好	堅 緻
102	壺		(12.8)			短く外反する口縁部をもつと思われる壺の底部。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
103	皿	(22.6)	(17.1)	(4.1)		体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は肥厚する。	底部外面ナデ。他は粗い横ナデ。	乳白色	や や 不 良	良 好

礫素材の敲石で片面のみが浅く窪む。

109は円礫素材の磨石で径 8.5 cm 前後のほぼ球形を呈する。重量 837.5 g。

110は打製石斧の頭部と思われるもので周縁からの調整剥離は粗い。111は紡錘車。研磨は丁寧に上下両面とも平坦。径 4.7 cm、厚さ 0.7 cm、孔径 0.7 cm。

(2) 包含層出土の遺物

第3～5層の各堆積層に遺物を包含する。各包含層とも低丘陵上からの流れ込みによる二次堆積層で、弥生時代前期から鎌倉時代前半の各時期の遺物が混在するが、第4層からの出土量が最も多い。

第3層灰褐色粘質土出土遺物 (Fig.21～25 P L 13-(3)～15-(2))

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、土製品が出土した。

弥生土器 (Fig.21 P L 13-(3))

甕、壺、高坏がある。

1～3は甕。1は口縁部がわずかに外反する如意形口縁で、端部は稜をもたず尖りぎみに終り刻目をもたない。外面頸部以下は刷毛目、他の部分は横ナデ仕上げ。2は逆「L」

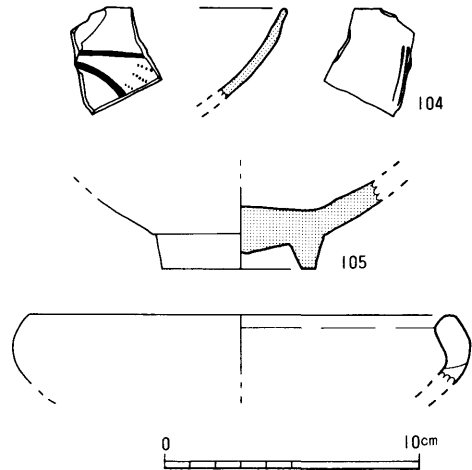


Fig.19 旧河川跡NR出土遺物実測図 (輸入陶磁器 104・105 瓦質土器 106)



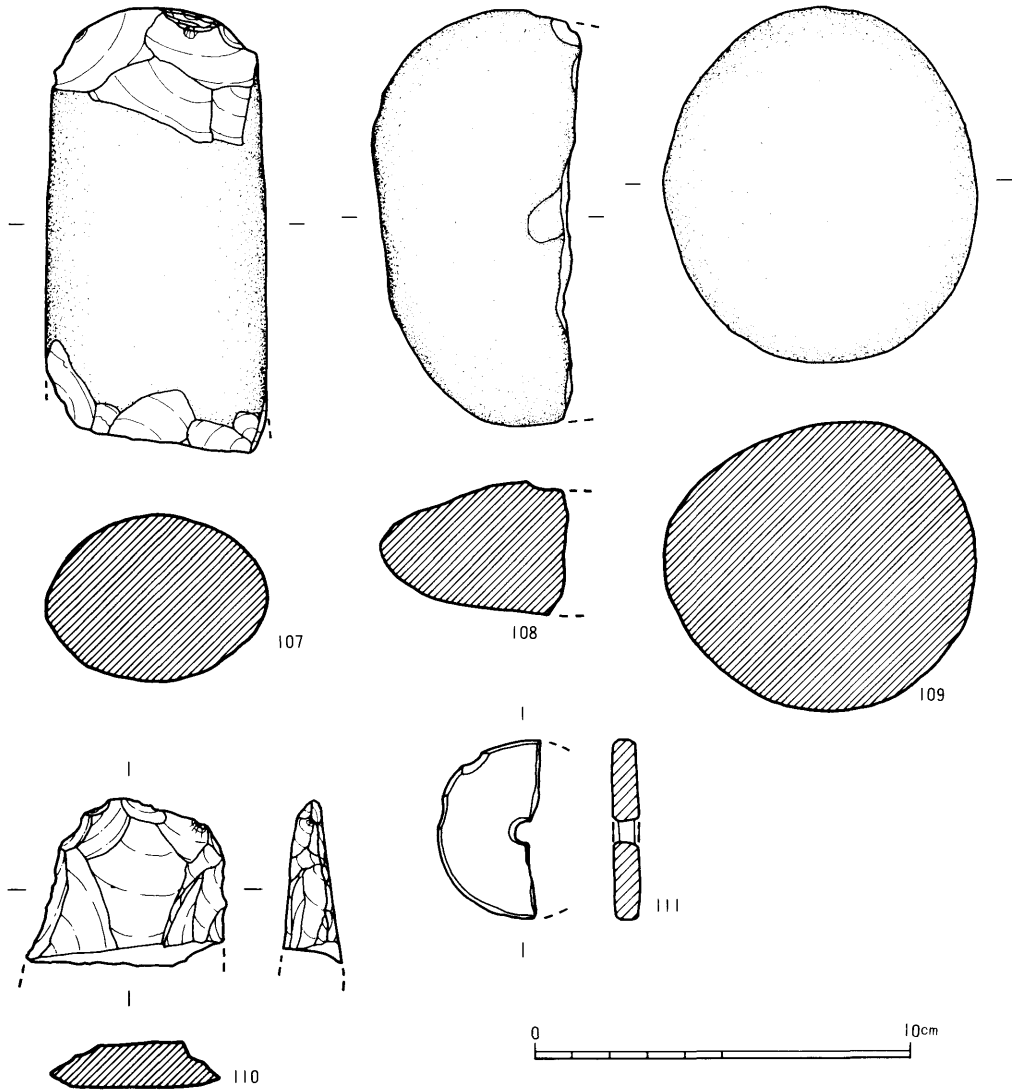


Fig.20 旧河川跡NR出土遺物実測図（石器）

字状に屈曲する口縁の端部を跳ね上げ、端部外面は凹線上に窪む。口縁部外面には煤が付着する。内外面とも丁寧な横ナデ調整。3は「く」の字に外彎しながら開く口縁部をもつ。1・2は赤褐色、3は濁黄褐色を呈し、1～3とも胎土、焼成良好。4は壺。小さく下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を刻む。乳白色を呈し、胎土精良、焼成堅緻。5は壺、6～9は甕の底部。5は円盤状の平底で外面ナデ、底部側面横ナデ仕上げ。赤褐色を呈し、

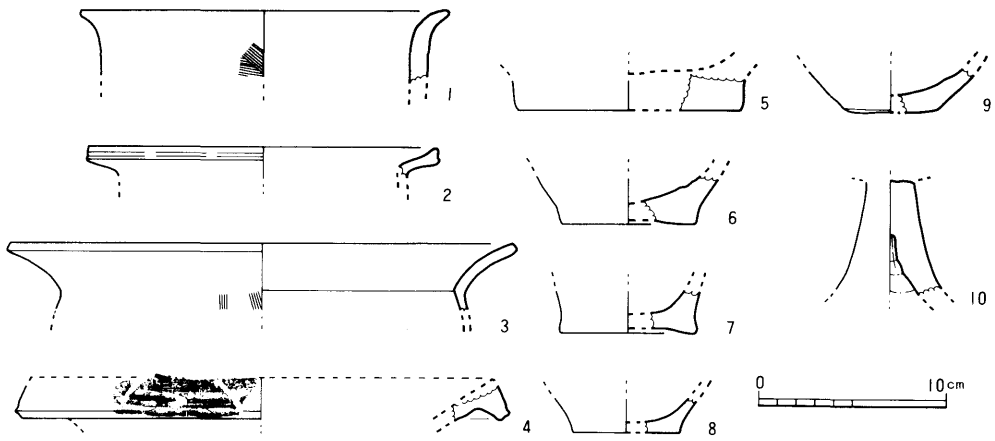


Fig.21 第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（弥生土器）

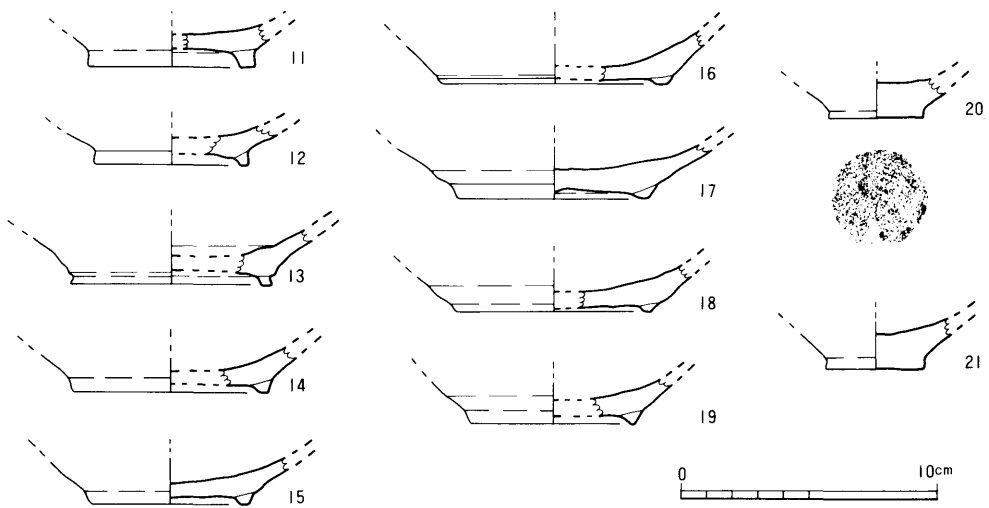


Fig.22 第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）

胎土、焼成とも良好。6・7はやや上げ底ぎみで内外面ナデ、側面横ナデ調整。6は暗灰色で胎土やや不良、焼成良好。7は赤褐色で胎土精良、焼成良好。8は薄手づくりの平底で内外面ナデ、側面荒れのため調整不明。赤褐色で胎土やや不良、焼成良好。9は不安定な平底で内外面ナデ、側面横ナデ仕上げ。灰褐色で胎土、焼成とも良好。10は高坏脚部。内面は指圧による整形を施し、シボリ痕が残る。外面荒れのため調整不明。赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

土師器 (Fig.22 P L14-(1))

壺と台付皿があるがいずれも底部の破片である。

須恵器 (Fig.23 P L14-(2))

坏、高坏、壺、甕、器台があり、坏は高台を有するものが多い。時期的には8世紀～9世紀前半頃におさまるものと考えられる。

白磁 (Fig.24 41・42 P L15-(1))

41・42とも口縁部外面に玉縁がめぐる壺。41は貫入がみられ釉の発色はよくない。胎土は淡灰白色、釉は暗灰白色。42はやや扁平な玉縁をもち、体部下外面は無施釉。胎土は

Tab.9 第3層灰褐色粘質土出土遺物観察表(土師器)

法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.22 11	壺		(6.5)		0.7	底部と体部の境に断面長方形の安定した高台を貼付する。	内面・底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	良好
12	壺		(6.0)		0.5	底部と体部の境に断面長方形の貧弱な高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	濁黄褐色	良好	良好
13	壺		(7.8)		0.4	底部と体部の境より内側に外方へ開く貧弱な高台を付す。	内外面とも横ナデ。	乳白色	良好	やや不良
14	壺		(7.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	乳白色	やや不良	やや不良
15	壺		(6.0)		0.5	底部と体部の境に断面台形の低い高台を貼付する。	内面丁寧なへら磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	乳白色	良好	やや不良
16	壺		(8.6)		0.3	底部と体部の境に断面台形状の極めて扁平な高台を付す。	内面、底部外面ナデ、他は横ナデ。	濁黄褐色	良好	良好
17	壺		(7.2)		0.6	底部と体部の境に断面台形の扁平な高台を貼付する。	内面丁寧なナデ、底部外面粗いナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	良好
18	壺		(7.4)		0.3	底部と体部の境に断面三角形の扁平な低い高台を付す。	内面ナデ、外面横ナデ。	黄褐色	やや不良	良好
19	壺		(6.4)		0.5	底部と体部の境に断面三角形の高台を貼付する。	内面ナデ、外面横ナデ。	乳白色	良好	堅緻
20	台付皿		3.7			円盤状の厚手の底部を有する。	底部側面・体部外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	不良	不良
21	台付皿		3.8			円盤状の厚手の底部を有する。	底部側面・体部外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	乳白色	やや不良	不良

遺 物

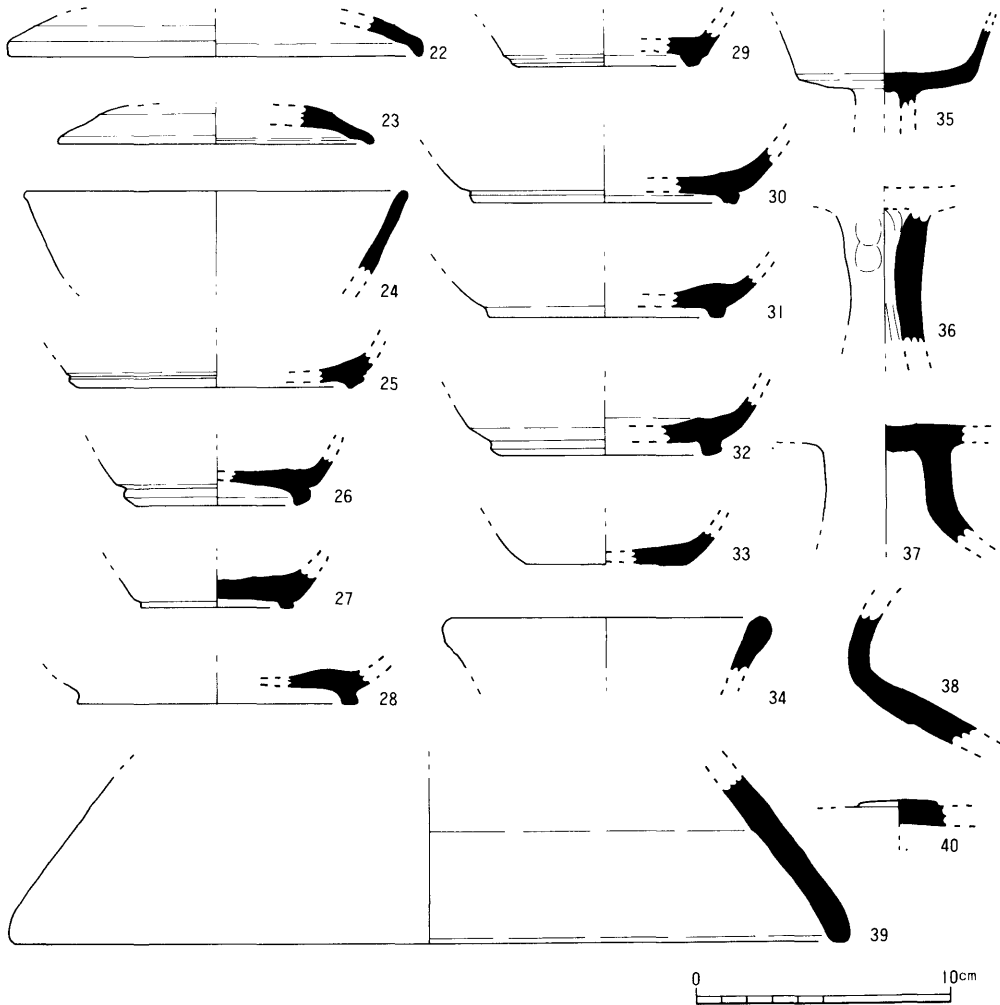


Fig. 23 第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）

Tab. 10 第3層灰褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）1 法量（ ）は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig. 23 22	坏蓋	(16.2)				鳥嘴状の口縁端部はやや尖りぎみにおさめる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良 好	良 好
23	坏蓋	(12.4)				体部は口縁部付近で屈曲し、端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	濁 黄 色	良 好	不 良
24	坏身	(14.9)				体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	や や 不 良	良 好
25	坏身		(11.4)		0.5	外方へ開く断面長方形の扁平な高台の接地面は内側端。	内外面とも横ナデ。	暗 青 色	良 好	良 好

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.11 第3層灰褐色粘質土出土遺物観察表(須恵器)2 法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.23 26	坏身		(7.3)		0.5	底部と体部の境より内側に内彎ぎみに開く高台を貼付する。	体部外面カキ目、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
27	坏身		(6.0)		0.3	小型。底部と体部の境より内側に断面長方形の扁平な高台付す。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良 好	や や 不 良
28	坏身		(11.0)		0.5	大型の坏。底部と体部の境に断面方形の外開きの高台付す。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
29	坏身		(7.4)		0.3	底部と体部の境より内側に断面台形、接地面内側端の高台付す。	内外面とも横ナデ。	灰青色	精 良	良 好
30	坏身		(10.2)		0.5	底部と体部の境にいびつな高台を付す。接地面は高台内側端。	内外面とも横ナデ、器面荒れが著しい。	青灰色	良 好	良 好
31	坏身		(9.2)		0.4	底部と体部の境に断面台形の直立する高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	や や 不 良
32	坏身		(9.0)		0.5	底部と体部の境に断面方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	や や 不 良	良 好
33	坏身		(6.2)			小型の坏。体部は内彎しながら立ち上がる。	内面、底部外面ナデ、体部外面横ナデ。底部外面ナデ粗い。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
34	壺	(12.0)				口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
35	高坏					坏部は屈曲度が強く、比較的浅いものと思われる。	坏部内面ナデ、他は横ナデ。薄手づくり。	青灰色	良 好	良 好
36	高坏					長脚の脚部で現存資料には穿孔はみあたらない。	内外面ともナデ。内面にシボリ痕。外面に指圧痕。	灰青色	良 好	良 好
37	高坏					短脚の脚部をもつもので上半部で角度をかえて裾部に至る。	坏部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	や や 不 良	堅 緻
38	甕					頸部の破片。口縁部はゆるやかに立ち上がる。	内面ナデ、外面横ナデ。外面に自然釉がかかる。	青 灰 褐 色	や や 不 良	堅 緻
39	器台					裾部は直線的に外方へ開き、端部は丸みをおびて終る。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良 好	良 好
40	坏蓋					極めて扁平で貧弱なボタン状の蓋。	撮天井部・側面および内面ナデ。他は横ナデ。	灰青色	や や 不 良	良 好

淡灰色、釉は灰白色。41・42とも横田賢次郎・森田勉氏のいう白磁IV類<sup>3)</sup>にあたる。

瓦質土器 (Fig.24 43・44 PL 15-(1))

43は甕ないしは鉢の底部で内外面ともナデ仕上げ。側面は指圧による整形が施される。暗灰色を呈し、胎土、焼成良好、44は盤。体部は短く内彎して立ち上がり、端部は断面

遺 物

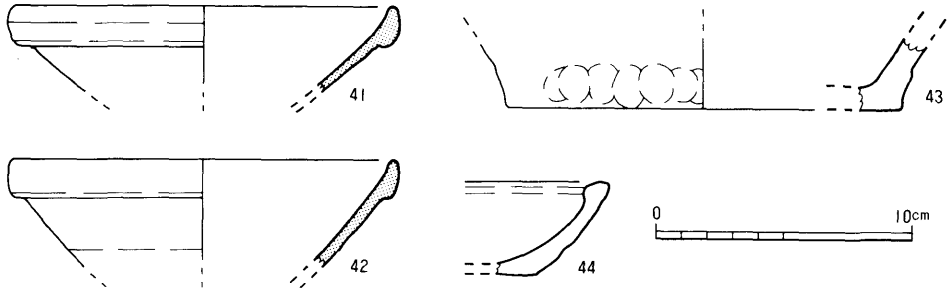


Fig.24 第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器、瓦質土器）

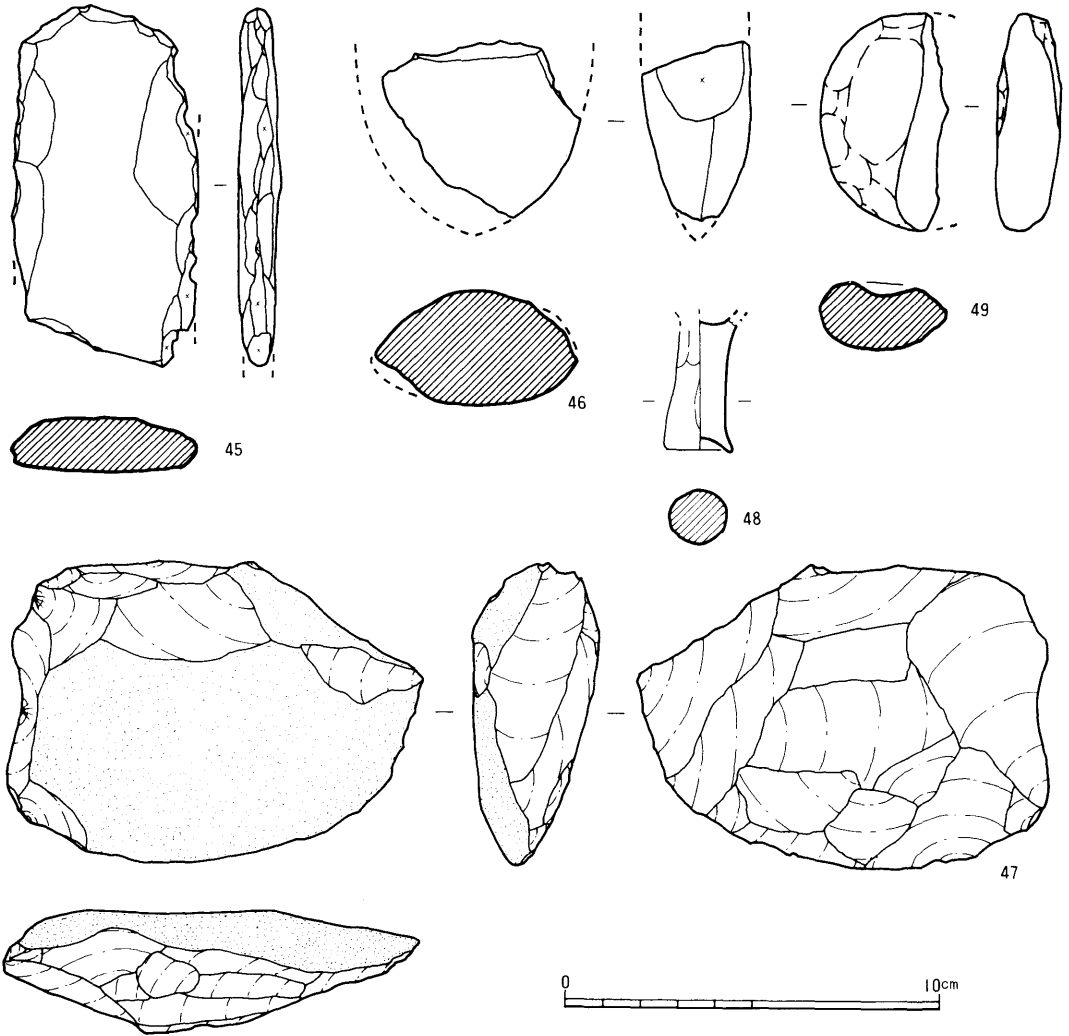


Fig.25 第3層灰褐色粘質土出土遺物実測図（石器・土製品・製塩土器）

三角形状に内側に肥厚する。底部および体部下半はナデ、口縁部は横ナデ仕上げ。灰茶褐色を呈し、胎土、焼成良好。

石器 (Fig. 25 45~47 P L 15-(2))

45は打製石斧(掘鋏)で刃部を欠損する。扁平な緑色片岩を素材とし周縁の剥離作業は粗雑。重量85.5g。46は大型蛤刃石斧の刃部で研磨は粗い。47は目的剥片剥離の母岩(石核)。作業面は一面のみで周縁からの敲打による剥離作業を行う。

土製品 (Fig. 25 48 P L 15-(2))

手握ねの土製円板で片面中央部が指圧により窪む。

製塩土器 (Fig. 25 49 P L 15-(2))

短い台脚部をもつ美濃ヶ浜式土器で坏部を欠損する。粗い指圧による整形で脚部径1.6cm。近藤義郎氏のいう美濃ヶ浜<sup>4)</sup>に相当する。胎土は砂粒を若干含む程度で良好。

**第4層黒褐色粘質土出土遺物 (Fig. 26~35 P L 15-(3)~21-(3))**

弥生土器、土師器、須恵器、磁器、瓦質土器、石器、石製品、土製品、スラグが出土した。

弥生土器 (Fig. 26 P L 15-(3) 16-(1))

前期から後期の各時期のものがある。

甕 (1~6・19・20) 1~5は如意形口縁をもつもので、3・4は短く外反する。いずれも口縁端部が尖りぎみで刻目をもたない。6はヘラによる刺突列点文の下位に少なくとも4条のヘラ描き沈線がめぐる。1・2は頸部内面ナデ、他は横ナデ、3は頸部内外面、5は内面刷毛目、他は横ナデ。6は外面縦刷毛目、内面ナデ仕上げ。1・2・6は茶褐色、3・4は赤褐色、5は黒褐色を呈し、いずれも胎土、焼成良好。19・20は「く」の字に短く外反する口縁部。19は内外面とも横ナデ、20は口縁部外面下半縦刷毛目、他は横ナデ仕上げ。19・20とも黄褐色を呈し、胎土、焼成良好。

壺 (7~14・16~18) 8は貝殻腹縁、9はヘラによる羽状文を施文する。10はヘラによる重弧文と山形文が描出される。11はヘラによる押圧で肩部外面に段をもつ。7は内外面ヘラ磨き、端部のみ横ナデ、8は内外面ナデ、9は外面ヘラ磨き、内面横ナデ、11は内外面ヘラ磨き。10は器面荒れのため調整不明。7は赤褐色、8・11は灰褐色、9・10は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。11は胎土に金雲母を含む。12は鋤先状口縁をもつもので黄灰色を呈し、胎土、焼成とも不良。13・16は下垂する口縁部外面にヘラ描きの鋸歯文を施文。17・18は直立ぎみに短く外反する口縁部を有する。いずれも横ナデ仕上げ。13・14・17は黄褐色、16・18は赤褐色を呈する。13は焼成不良、17は胎土に金雲母を含む。

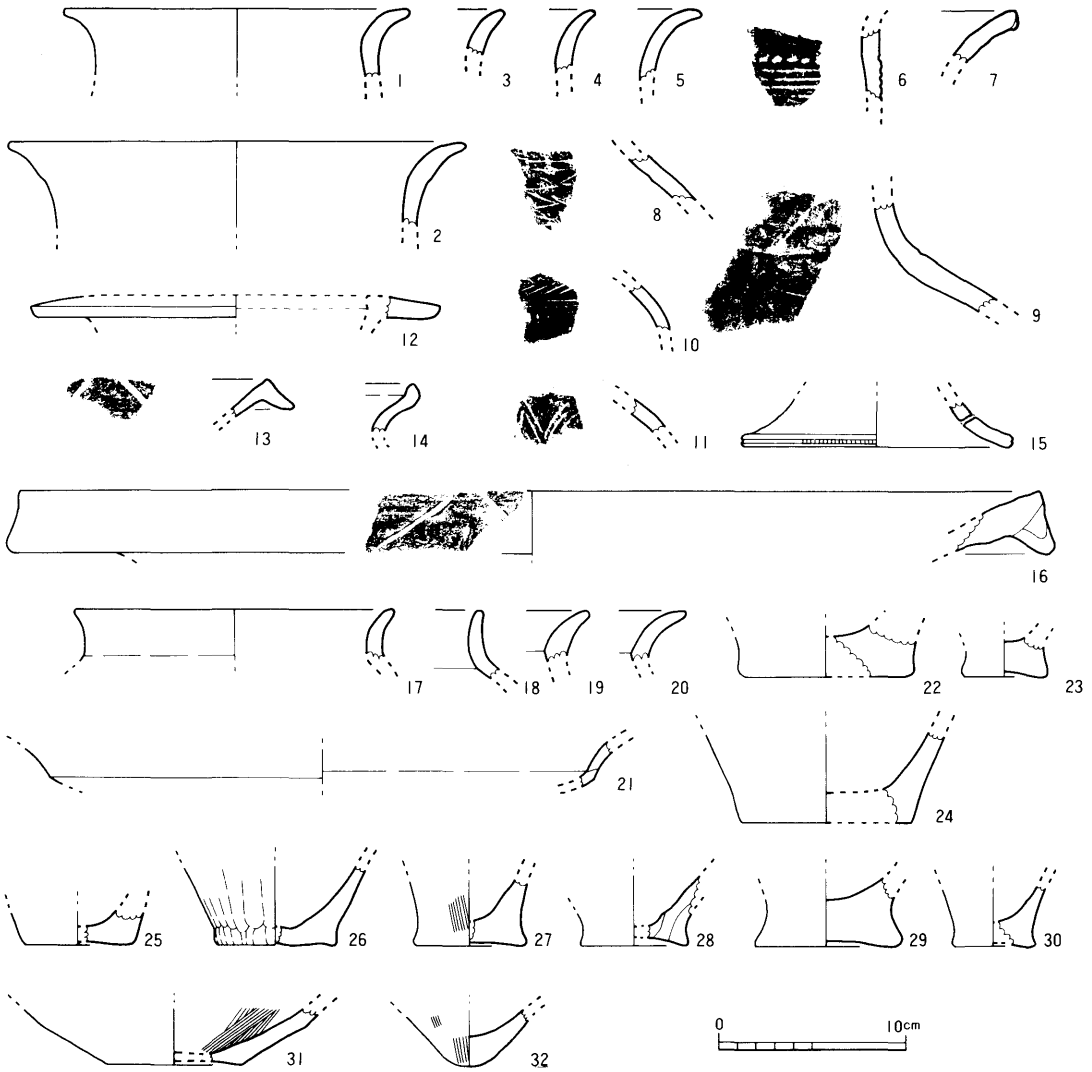


Fig. 26 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図(弥生土器)

蓋(15) ゆるやかな裾広がり の体部をもち、端部には刷毛状工具原体押圧による沈線がめぐる。現資料では1個の紐通し孔がみとめられる。内外面ともへら磨きで端部は横ナデ調整。黄褐色を呈し、胎土、焼成良好。

高坏(21) 反転して開く坏部の破片、内外面とも横ナデ仕上げ。黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含み、焼成良好。

底部(22~32) 平底のもの(22・24~26)、やや上げ底のもの(23・27~31)、丸



底のもの(32)がある。22~30は甕、31に壺。22は円盤状の底部をもつ。26は外面のナデが粗い。22・24・28は濁黄褐色、23・26・31は茶褐色、25・27・32は赤褐色、29は灰白色、30は褐色を呈する。胎土は25・26・28・30・31が良好で他は不良。23・30は胎土に金雲母を含む。焼成は23・24が不良で他は良好。27は外面、31は内面刷毛調整。

土師器 (Fig.27~29 P L 16-(2)~18-(1) 20-(2))

坏、碗、小皿、高坏、甕がある。時期的には11~12世紀代の資料が圧倒的である。

黒色土器 (Fig.29 106・107 P L 18-(1))

口縁部の資料が2点ある。いずれも炭素吸着が内外面におよぶ黒色土器B類で、体部が内彎しながら開き、口縁部がわずかに外反する。内外面とも横ナデ調整。106は復原口径13.3 cm、胎土精良、焼成堅緻。107は復原口径14.6 cm、胎土精良、焼成堅緻。

須恵器模倣土師器 (Fig.29 108 P L 18-(1))

扁平な器形に短い厚平のかえりをもつ須恵器坏蓋模倣土師器で天井部を欠損する。口縁端部は平坦に近い。内外面とも横ナデ仕上げ。橙褐色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。口径8.6 cm、身受け部径11.5 cm、かえり高0.5 cm。

須恵器 (Fig.30~32 P L 18-(2)~20-(2))

坏、壺、甕、高坏があり、坏は高台を有するものが多い。時期的には6世紀中葉頃からの遺物が出土しているが、8世紀後半のものが主体を占める。

輸入陶磁器 (Fig.33 179~183 P L 20-(3))

179~181は白磁碗の底部。179は低い高台をもち体部内面に沈線がめぐる。180は高い高台を有し釉が体部と高台の境付近までかかる。V類。181は内面見込みに段を有しその内側の釉を環状にかきとる。外面無施釉。Ⅷ-2類。182は青磁碗の底部。181同様内面見込み部分の釉を環状にかきとる。外面無施釉。183は小皿の底部。胎土は179・180・182が灰白色、181が黄灰色、183が乳白色。釉は179・180が淡灰白色、181が灰白色でいずれも半透明。182は淡青緑色。

瓦質土器 (Fig.33 184~196 P L 20-(3))

184は壺。逆「く」の字状に屈曲する薄手の体部をもち、口縁部は肥厚し端部を上方につまみ上げる。内外面とも横ナデ仕上げ。黒灰色を呈し、胎土、焼成良好。185は甕で口縁部は「く」の字状に短く外反する。内外面とも横ナデ仕上げ。灰褐色を呈し、胎土、焼成良好。186~189は鍋ないしは鼎。186は口縁部か内彎ぎみに短く立ち上がるもの。187~189は口縁端部外面に断面長方形の突帯がめぐる。187は内面刷毛目、外面横ナデ仕上げ。

遺 物

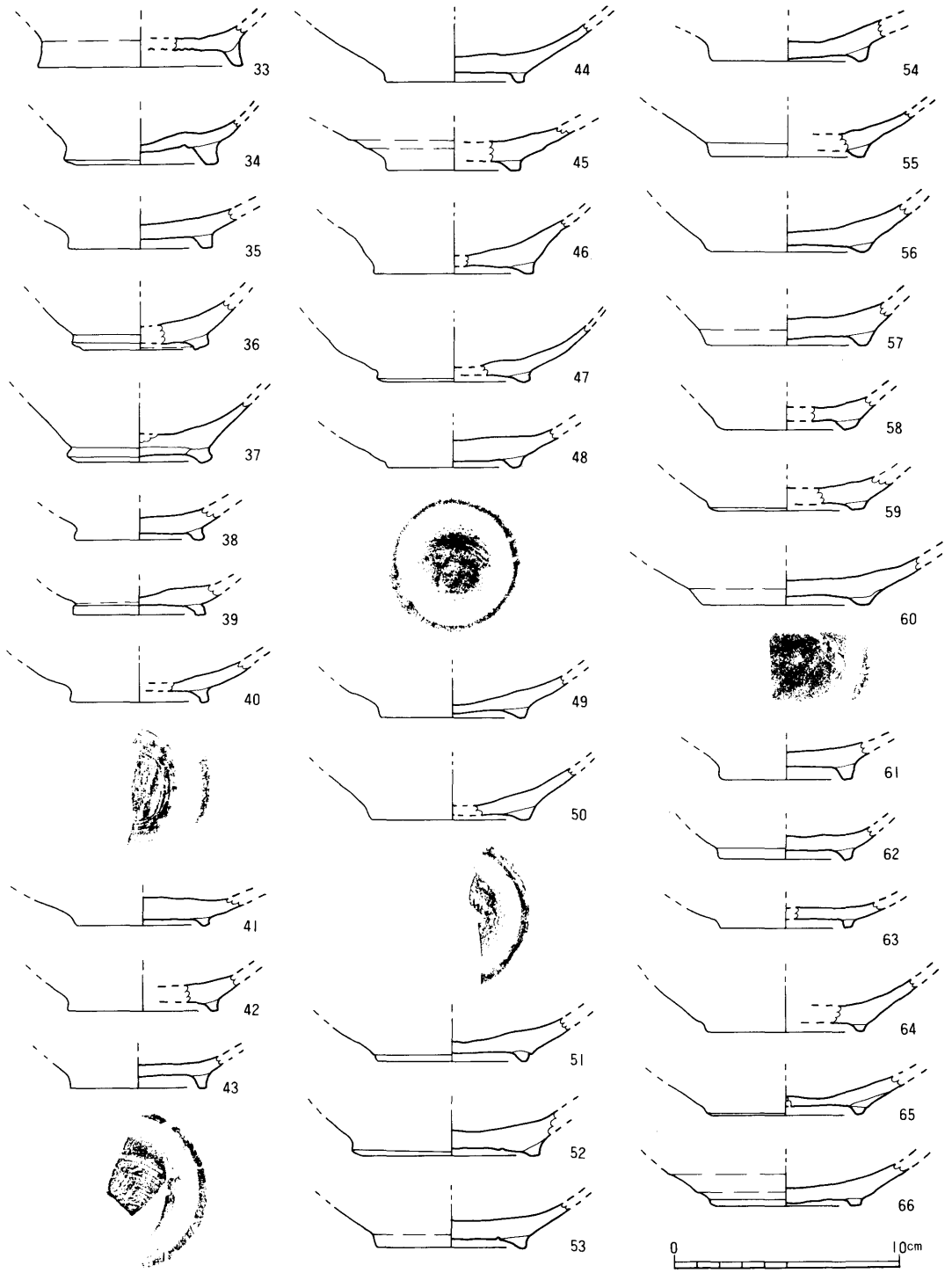


Fig.27 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）1

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

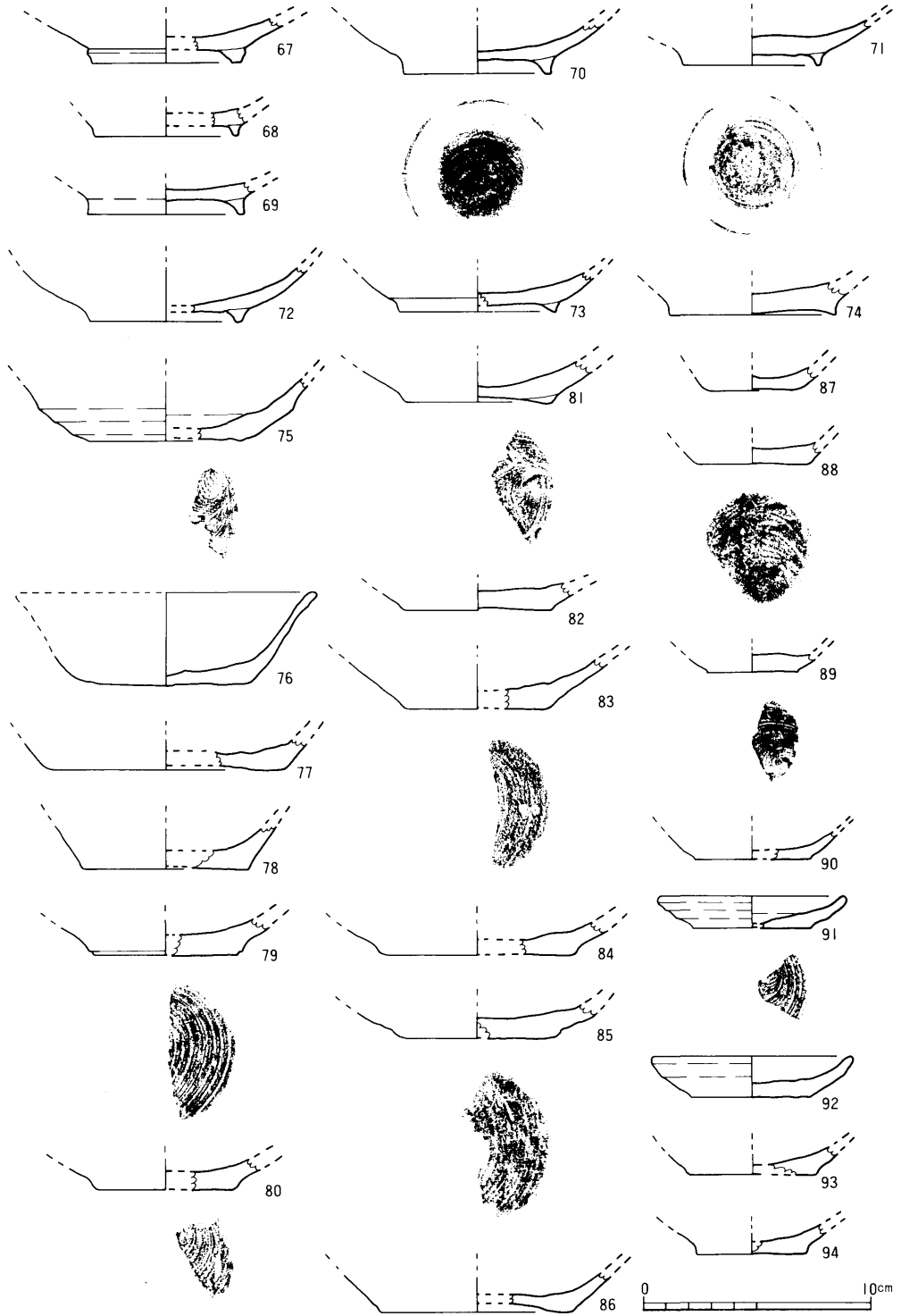


Fig. 28 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図(土師器) 2

遺 物

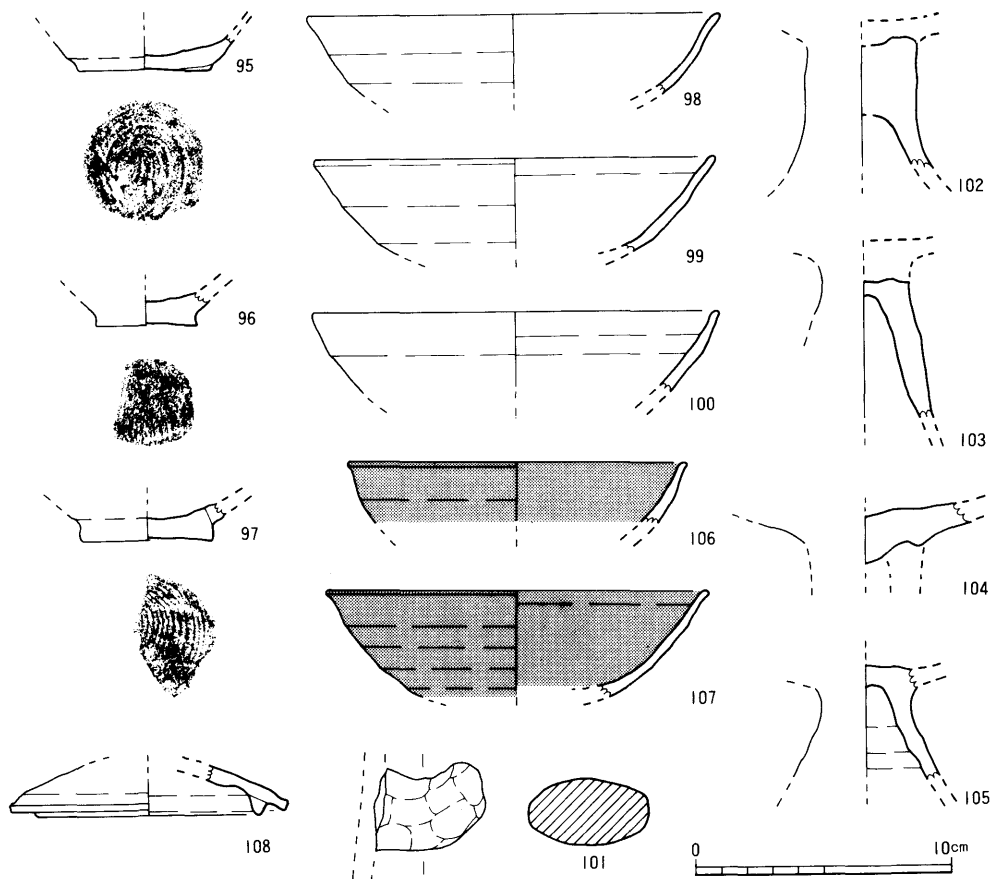


Fig. 29 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（土師器）3

Tab. 12 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（土師器）1

法量（ ）は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig. 27 33	碗		(9.0)		1.1	底部と体部の境に外方へ開く断面長方形の高台を付す。	底部内面ナデ、他は横ナデ。底部外面板目圧痕。糸切り底。	灰褐色	不 良	良 好
34	碗		6.4		1.0	底部と体部の境に厚手の外方へ開く断面台形状の高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡 黄 褐 色	精 良	良 好
35	碗		(6.0)		0.6	やや厚手で断面台形状の高台を有し、接地面は丸みをおびる。	高台・体部外面横ナデ。糸切り底。	乳白色	や や 不 良	不 良
36	碗		(5.0)		0.7	断面台形状の扁平な高台の端部外面は窪み、接地面は内側端。	外面横ナデ、内面器面荒れのため不明。	橙褐色	精 良	堅 緻

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.13 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(土師器) 2

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig. 27 37	壺		(6.5)		0.6	外方へ開く高台は低く、接地面は高台内側端。	内外面横ナデ。底部外面粘土帯貼付。糸切り底。	黄白色	精良	精良
38	壺		(5.6)		0.5	底部と体部の境にやや外方へ開く断面台形状の高台を付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	乳灰色	精良	良好
39	壺		5.8		0.5	やや外方へ踏んばりぎみに開く断面台形状の高台を付す。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡橙褐色	精良	良好
40	壺		(6.0)		0.7	底部と体部の境にやや外方へ開く細長の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	淡黄褐色	精良	やや不良
41	壺		(5.6)		0.4	底部と体部の境に貧弱な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	良好
42	壺		(6.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形状の薄手の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良好	良好
43	壺		(6.0)		0.6	底部と体部の境に断面長方形の高台を貼付する。	内面丁寧なへら磨き、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	精良	良好
44	壺		(6.0)		0.3	底部と体部の境に断面長方形の扁平な高台を貼付する。	底部内外面ナデ、体部内面へら磨き、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	堅緻
45	壺		(5.8)		0.4	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面丁寧なへら磨き。	赤橙色	良好	堅緻
46	壺		(7.0)		0.5	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面へら磨き。糸切り底。	淡黄褐色	やや不良	やや不良
47	壺		(6.1)		0.4	断面台形の極めて扁平な高台を有し高台内側端を接地面とする。	外面横ナデ、内面へら磨き。糸切り底。	黄灰色	良好	良好
48	壺		(5.8)		0.5	厚手の底部に断面台形状の扁平な高台付す。接地面は狭い。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	良好	良好
49	壺		(6.3)		0.5	底部と体部の境に断面台形状の扁平な高台を貼付する。	内面へら磨き、底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	橙褐色	やや不良	堅緻
50	壺		(7.0)		0.5	断面台形の扁平な高台を貼付する。接地面は狭い。	内面へら磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	やや不良	堅緻
51	壺		(6.5)		0.4	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の高台を付す。	底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	良好	堅緻
52	壺		(7.9)		0.7	厚手の底部に断面台形の低い高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	橙褐色	精良	良好
53	壺		(6.6)		0.5	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	乳白色	良好	やや不良
54	壺		(6.6)		0.7	均一の厚さをもつ底部と体部の境に断面台形の高台を付す。	内面不明。底部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	精良	堅緻

遺 物

Tab.14 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(土師器) 3  
 法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig. 27 55	壺		(6.7)		0.6	底部と体部の境に断面台形状の扁平な高台を貼付する。	外面横ナデ、内面ナデ。糸切り底。	濁黄褐色	精良	良好
56	壺		(8.7)		0.4	底部と体部の境に断面三角形の扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、高台・体部外面横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	精良	やや不良
57	壺		(6.9)		0.7	底部と体部の境に断面台形の高台を貼付する。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	黄褐色	精良	良好
58	壺		(7.2)		0.5	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の高台を付す。	外面横ナデ、内面不明。糸切り底。	灰褐色	精良	やや不良
59	壺		(5.8)		0.4	底部と体部の境に断面台形の扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	淡黄褐色	不良	やや不良
60	壺		(7.3)		0.7	底部と体部の境に断面台形の極めて扁平な高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。底部外面麦の圧痕。糸切り底。	黄褐色	良好	堅緻
61	壺		(5.8)		0.6	底部と体部の境に直立する断面長方形の高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	濁黄褐色	やや不良	良好
62	壺		(7.8)		0.5	底部と体部の境に直立する断面台形状の高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	精良	良好
63	壺		(5.8)		0.4	底部と体部の境に内傾ぎみの断面方形の高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、内面・底部外面ナデ。	濁黄褐色	精良	やや不良
64	壺		(6.8)		0.3	底部と体部の境に直立する断面台形の小さな低い高台付す。	底部内面ナデ、他は不明。	淡黄褐色	やや不良	やや不良
65	壺		(6.4)		0.3	底部と体部の境に断面台形の高台を付す。接地面は内側端。	体部外面・高台横ナデ、底部外面ナデ。内面不明。	淡黄褐色	やや不良	良好
66	壺		(6.8)		0.3	体部はゆるやかに立ち上がる。高台は断面長方形で扁平。	底部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	黄白色	精良	堅緻
Fig. 28 67	壺		(6.4)		0.7	底部と体部の境に変形した断面台形状の高台を貼付する。	底部外面ナデ、体部外面・高台横ナデ。内面不明。	濁黄褐色	良好	堅緻
68	壺		(6.2)		0.4	底部と体部の境に断面長台形状の先細りの高台を貼付する。	体部内外面・高台横ナデ。他は不明。	濁黄褐色	良好	不良
69	壺		(6.6)		0.7	底部と体部の境に断面長台形の高台を貼付する。	高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	黄白色	精良	良好
70	壺		(6.4)		0.8	底部と体部の境に断面台形状の先細りの高台を貼付する。	高台横ナデ、内面不明。糸切り底。	乳白色	精良	不良
71	壺		(6.0)		0.6	底部と体部の境に断面三角形の高台を付す。接地面は狭い。	外面・体部内面横ナデ、他は不明。糸切り底。	黄褐色	精良	良好
72	壺		(6.6)		0.5	体部は内彎しながら立ち上がる。高台は断面台形状。	体部外面・高台横ナデ、他は不明。	乳白色	精良	不良

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.15 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(土師器) 4 法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.28 73	壺		(6.8)		0.5	底部と体部の境に断面三角形の低い高台を貼付する。	体部外面・高台横ナデ、他は不明。	淡黄褐色	良好	やや不良
74	壺		(7.2)		0.5	やや特異な断面三角形の小さな高台を貼付する。	底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	淡黄褐色	やや不良	良好
75	坏		(6.6)			やや上げ底ぎみで体部は内彎しながら立ち上がる。	体部下厚手。内面・体部外面横ナデ。糸切り底。	橙褐色	やや不良	堅緻
76	坏	12.8	7.2	4.1		体部は直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。	底部外面・底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。ヘラ切り底。	濁黄褐色	やや不良	不良
77	坏		(8.0)			やや上げ底ぎみ。	内面・体部外面横ナデ、底部外面ナデツケ。ヘラ切り底。	黄褐色	不良	不良
78	坏		(7.2)			大型の皿かもしれない。	内外面とも器面荒れのため不明。	灰褐色	不良	不良
79	坏		(6.2)			底部と体部の境外面にヘラ押圧による段を有する。	体部外面横ナデ、内面ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	良好	良好
80	坏		(5.8)			体部は底部とはほぼ均一の厚さで立ち上がる。	体部外面横ナデ、内面ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	精良	良好
81	坏		6.2			底部と体部の境に粘土帯を貼付し接地面をつくりだす。	体部外面ナデ、体部・底部内面横ナデ。糸切り底。	明褐色	精良	良好
82	坏		(6.4)			厚手の底部はやや上げ底ぎみ。	内外面とも器面荒れのため不明。	淡黄褐色	不良	やや不良
83	坏		(6.2)			体部は厚手の底部から直線的に立ち上がる。	内面・体部外面横ナデ。内面は丁寧。糸切り底。	橙褐色	精良	やや不良
84	坏		(8.0)			底～体部の破片。	内面ナデ、体部外面横ナデ。糸切り底。	淡赤褐色	精良	良好
85	坏		(6.2)			底部は台状を呈し、体部との境は不明瞭。	内面ナデ、体部外面粗い横ナデ。糸切り底。	黄褐色	良好(金雲母)	良好
86	坏		(8.3)			全体的に薄手で体部の開きは大きい。上げ底。	内外面とも横ナデ。	灰褐色	良好	良好
87	小皿		(3.4)			やや上げ底ぎみで底部と体部の境は不明瞭。	内面ナデ、外面器面荒れのため不明。	淡黄褐色	不良	不良
88	小皿		5.0			厚手の底部の破片。	内外面とも調整不明。糸切り底。	乳白色	不良	不良
89	小皿		3.9			小型品で底部の厚さはほぼ均一。	内外面横ナデ。体部下端まで糸切り痕残る。糸切り底。	橙褐色	精良	堅緻
90	小皿		(5.0)			極めて薄手のつくりの小型品。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。糸切り底。	黄褐色	不良	やや不良

遺 物

Tab.16 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(土師器) 5 法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高台高					
Fig.28 91	小皿	7.8	(5.1)	1.9		体部は内彎ぎみに短く立ち上がる。口縁端部は平坦。	底部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	灰褐色	良 好	良 好
92	小皿	8.7	5.3	1.8		体部は内彎ぎみに短く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	内面・体部外面横ナデ。他は不明。糸切り底。	橙褐色	や や 不 良	良 好
93	小皿		(5.3)			体部は底部からゆるやかに立ち上がる。	体部外面横ナデ、底部外面ナデ。内面不明。	灰褐色	良 好	や や 不 良
94	小皿		(4.7)			薄手の体部は円盤状の底部からゆるやかに立ち上がる。	内外面とも器面荒れのため不明。糸切り底。	橙 色	不 良	不 良
Fig.29 95	小皿		(5.1)			底部と体部の境外面は粘土帯貼付によりやや厚手となる。	内外面とも横ナデ。糸切り底。	灰褐色	や や 不 良 (金雲母)	良 好
96	小皿		3.9			やや上げ底ぎみの底部	内面ナデ、体部外面・底部側面横ナデ。糸切り底。	乳白色	良 好	や や 不 良
97	小皿		5.0			やや上げ底ぎみの底部。	底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。糸切り底。	橙褐色	良 好	堅 緻
98	碗	(16.0)				体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反。	内外面ともやや粗い横ナデ。	黄褐色	不 良	良 好
99	碗	(15.6)				体部は内彎ぎみに屈曲しながら立ち上がり、端部は尖りぎみ。	内外面とも横ナデ。	橙褐色	精 良	堅 緻
100	碗	(15.6)				体部は直線的に立ち上がり、口縁端部付近で内彎する。	内外面とも横ナデ。	黄褐色	精 良	良 好
101	甌					甌の把手。断面長楕円形で端部は上方へもち上がる。	指圧による整形。	赤褐色	や や 不 良	良 好
102	高環					脚上半部の破片で下方へ大きく開く短脚のもの。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	黄褐色	精 良	良 好
103	高環					脚上半部の破片で坏部を欠く。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	橙褐色	や や 不 良	良 好
104	高環					坏部の破片で脚部を坏部に接合する。	器面荒れのため内外面とも調整不明。	黄褐色	良 好	や や 不 良
105	高環					薄手のつくりで脚裾部への開きは大きい。	坏部内面粗い横ナデ、他は器面荒れのため不明。	灰黒色	精 良	良 好



中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

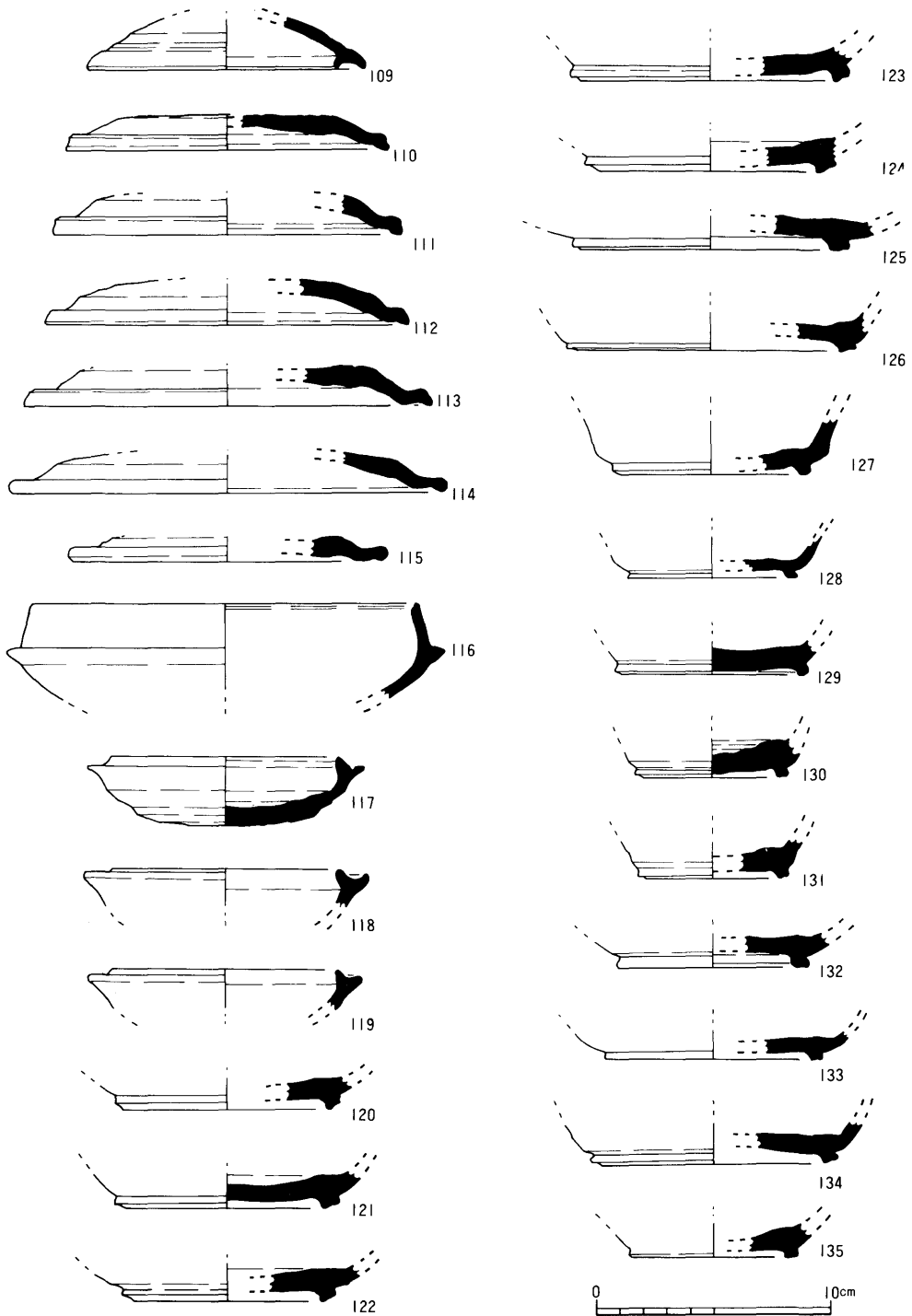


Fig. 30 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図(須恵器) 1

遺 物

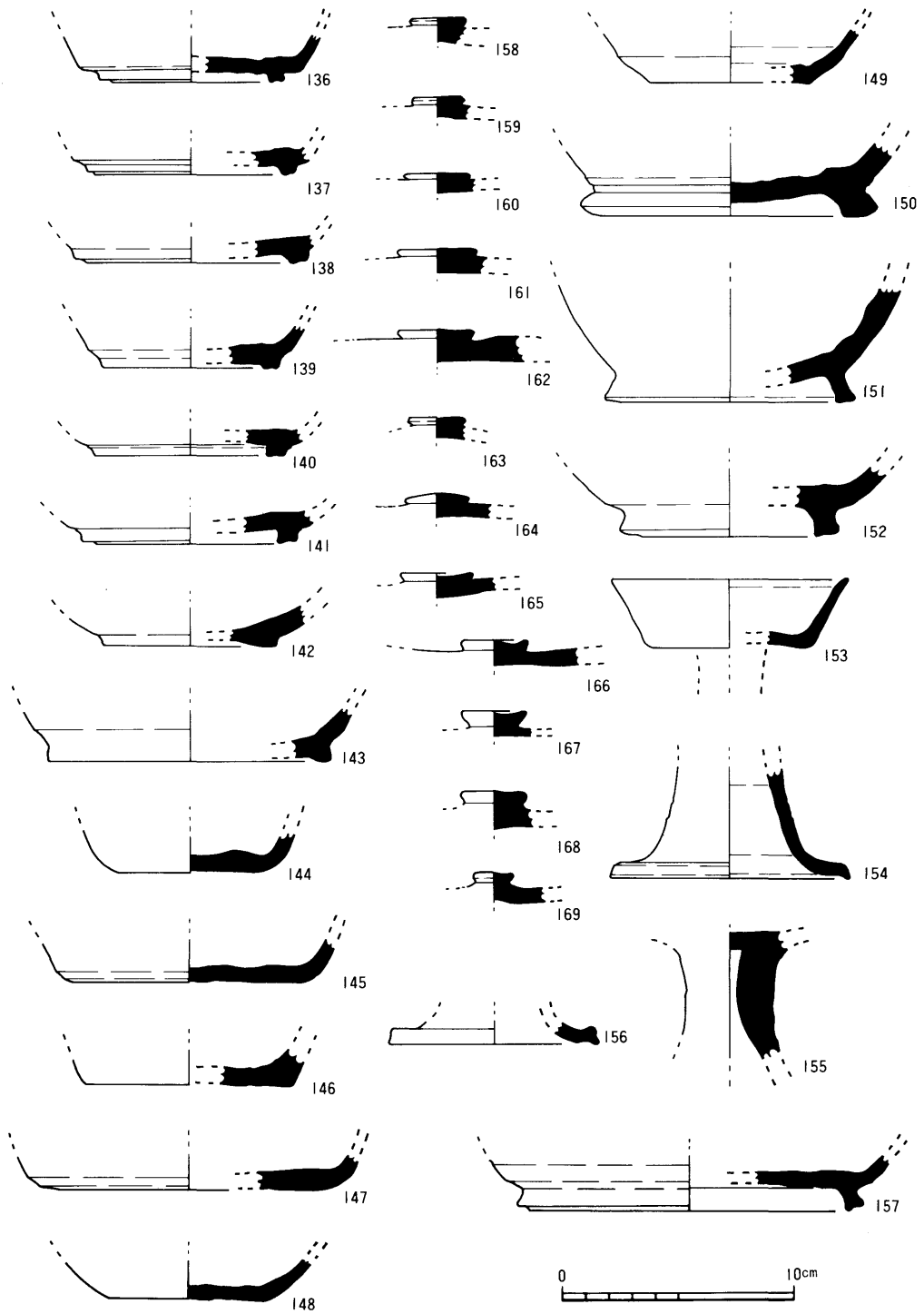


Fig. 31 第4層黑褐色粘質土出土遺物実測図（須恵器）2

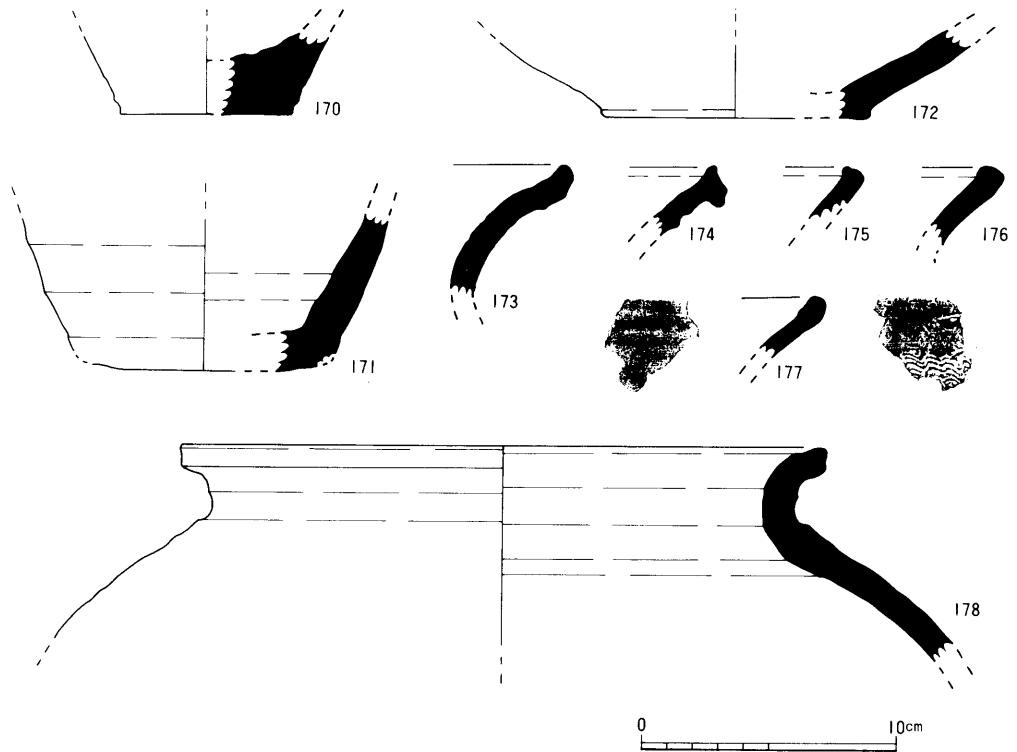


Fig. 32 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図(須恵器) 3

Tab. 17 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(須恵器) 1 法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig. 30 109	坏蓋	(11.7)				小型で扁平な蓋。かえりは短く小さいもので外彎ぎみに内傾する。	内外面とも横ナデ。	濃 青 灰 色	精 良	良 好
110	坏蓋	(13.6)		(1.5)		天井部平坦で轆をもたない。鳥嘴状の口縁部は外方へ開き端部外面窪む。	天井部ヘラ切り後ナデツケ。他は横ナデ。	濃 青 灰 色	不 良	良 好
111	坏蓋	(14.6)				鳥嘴状の口縁部は外方へ開き、端部はやや尖りぎみに終る。	内外面とも横ナデ。	青 灰 色	良 好	堅 緻
112	坏蓋	(15.3)				体部から口縁部の屈曲は小さい。鳥嘴状の口縁部は外方へ開き端部尖る。	口縁部横ナデ、体部外面手持ちヘラ削り。	青 灰 色	や や 不 良	良 好
113	坏蓋	(17.2)				扁平で天井部は平坦に近い。体部下端と鳥嘴状に尖る口縁端部で接地。	天井部ヘラ切り後ナデツケ。他は横ナデ。	灰 青 色	や や 不 良	や や 不 良
114	坏蓋	(18.0)				体部から屈曲しながらほぼ水平に開く口縁部をもつ。端部は丸く肥厚。	体部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	不 良	や や 不 良

遺 物

Tab.18 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(須恵器) 2

法量( )は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高 台 高					
Fig.30 115	坏蓋	(13.0)				極めて扁平で厚手。口縁端部は丸く肥厚し、体部下端とともに接地する。	体部内外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	や や 不 良	不 良
116	坏身	(16.2)				立ち上りは内傾し、端部は尖りぎみに終る。受部は水平に近く開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
117	坏身	9.5		2.9		立ち上り短く内傾し端部は尖る。受部水平に開き、立ち上りとの境窪む。	底部外面ヘラ切り後ナデ、内面ナデ。	濃 青 灰 色	不 良	堅 緻
118	坏身	(9.6)				立ち上りは短く外彎ぎみに内傾し、端部は尖る。受部は短く外方へ開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	不 良	良 好
119	坏身	(9.5)				立ち上り短く外彎ぎみに内傾し、端部は尖りぎみ。受部は水平に近く開く。	内外面とも横ナデ。	青灰色	精 良	良 好
120	坏身		(8.6)		0.6	底部と体部の境に断面長方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	灰青色	良 好	良 好
121	坏身		8.2		0.5	わずかに外方へ開く断面長方形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
122	坏身		(7.9)		0.6	底部と体部の境より内側に外方へ開く断面長方形の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	濃 青 灰 色	良 好	堅 緻
123	坏身		(10.8)		0.7	外方へ開く断面方形の高台を付す。高台端部は窪み接地面は高台内側端。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
124	坏身		(9.2)		0.6	底部と体部の境に外方へ開く幅広扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	灰青色	良 好	良 好
125	坏身		(11.0)		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面長方形の幅広の高台を貼付する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
126	坏身		(11.2)		0.3	やや大型の坏。外方へ開く極めて扁平な低い高台を付す。高台端部は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	濃 青 灰 色	や や 不 良	良 好
127	坏身		(7.6)		0.5	底部と体部の境より内側にやや外方へ開く断面台形状の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	濃 青 灰 色	不 良	良 好
128	坏身		(7.2)		0.3	小型の坏。底部と体部の境に外方へ開く貧弱な高台を貼付する。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
129	坏身		7.6		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面方形の低い高台を貼付する。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	濃 青 灰 色	精 良	良 好
130	坏身		(5.6)		0.4	小型の坏。底部と体部の境にやや外方へ開く小さな高台を貼付する。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	濃 青 灰 色	良 好	良 好
131	坏身		(5.6)		0.4	小型の坏。底部と体部の境に断面台形の高台を付す。高台端部は窪む。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃 青 灰 色	良 好	堅 緻
132	坏身		(8.2)		0.5	底部と体部の境に外方へ開く断面台形の高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良 好	良 好

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.19 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(須恵器) 3

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig.30 133	坏身		(9.1)		0.3	小型の坏。薄手で底部と体部の境に断面長方形の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	良好	良好
134	坏身		(9.4)		0.5	底部と体部の境に断面長方形の高台を貼付する。接地面は高台内側端。	底部内面・底部中央部外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	不良	良好
135	坏身		(7.0)		0.4	厚手の底部と体部の境に断面長方形の扁平な高台を貼付する。	底部外面ナデ、高台・体部外面横ナデ。	灰青色	良好	やや不良
Fig.31 136	坏身		(6.8)		0.4	底部と体部の境より内側に断面長方形の扁平な高台を付す。高台端部窪む。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	不良	良好
137	坏身		(8.4)		0.4	底部と体部の境よりわずかに内側に断面台形の扁平な高台を貼付する。	底部中央部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	精良	良好
138	坏身		(8.9)		0.6	底部と体部の境に断面台形の扁平な高台を付す。接地面は高台内側端。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
139	坏身		(7.5)		0.4	底部と体部の境に断面台形の極めて扁平な低い高台を貼付する。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	やや不良	堅緻
140	坏身		(8.1)		0.5	底部と体部の境に内傾する不整形な高台を貼付する。高台端部は窪む。	底部内面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
141	坏身		(7.8)		0.7	底部と体部の境よりやや内側に方形の高台を付す。高台端部は窪む。	内面ナデ、高台・体部外面横ナデ。	青灰色	良好	堅緻
142	坏身		7.4		0.4	底部と体部の境付近に粘土帯を貼付し高台状に仕上げる。	内面・底部外面ナデ、体部外面横ナデ。	濃青灰色	不良	やや不良
143	坏身		(12.0)		0.6	底部と体部の境に断面三角形の厚手の高台を貼付する。	底部内面ナデ、他は粗い横ナデ。	青黄色	不良	やや不良
144	坏身		(6.0)			底部と体部の境は不明瞭。体部は強く屈曲して立ち上がる。	底部中央部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡青灰色	精良	良好
145	坏身		(9.8)			体部は底部から均一の厚さで内彎しながらゆるやかに立ち上がる。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	青灰色	良好	良好
146	坏身		(8.8)			厚手の底部をもち、体部との境は不明瞭。	底部内外面・体部外面粗いナデ、他は横ナデ。	青黄色	精良	堅緻
147	坏身		(14.0)			大型の坏。底部と体部の境は不明瞭。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。	青灰色	良好	良好
148	坏身		6.6			薄手のつくりで体部は内彎ぎみに立ち上がる。	内外面横ナデ、底部内外面ナデツケ。	灰青色	良好	良好
149	坏身		(6.9)			体部は内彎ぎみにやや屈曲しながら立ち上がる。	底部内外面ナデ、体部内外面横ナデ。	青黄色	良好	やや不良
150	壺		(11.0)		1.3	外方へ開く厚手の高台は低く、高台端部は肥厚する。	底部内面粗いナデ、底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青灰色	やや不良	良好

遺 物

Tab. 20 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表（須恵器）4  
 法量（ ）は復原値

番号	器種	法 量 (cm)				形 態	技 法	色 調	胎 土	焼 成
		口 径	底 径	器 高	高台高					
Fig. 31 151	壺		(9.2)		0.7	丸底の底部に外方へ開く脚台をもつ小ぶりの壺の底部。	内外面とも横ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
152	壺		(7.4)		1.2	わずかに外方へ開く脚台は断面長方形状を呈する。	内外面とも横ナデ。	青灰色	や や 不 良	良 好
153	高坏	(10.1)				坏部の破片。体部は直線的に短く立ち上がり、端部は尖りぎみに終る。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	や や 不 良	良 好
154	高坏		10.2			ゆるやかに外方へ開く脚部は下半部で屈曲し鳥嘴状の端部にいたる。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良 好	良 好
155	高坏					厚手の脚上半部。	脚部内外面横ナデ、坏部内面ナデ。	濃 青 灰 色	や や 不 良	堅 緻
156	高坏		(9.0)			脚端部は鳥嘴状を呈し、外面はわずかに窪む。	内外面とも横ナデ。	暗灰色	精 良	良 好
157	盤		(13.7)		1.1	底部と体部の境よりやや内側に外方へ開く断面長方形形状の高い高台付す。	底部内外面ナデ、他は横ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	良 好
158	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮上面は平坦。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	灰白色	良 好	不 良
159	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面は平坦。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良 好	良 好
160	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面は平坦。	外面横ナデ、内面ナデ。	淡 青 灰 色	良 好	や や 不 良
161	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は大きく扁平で上面は平坦。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	精 良	良 好
162	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮上面はほぼ平坦。	外面横ナデ、内面ナデ。	淡 青 灰 色	や や 不 良	や や 不 良
163	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は扁平で上面はほぼ平坦。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	精 良	良 好
164	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は中央部に向うにつれてやや厚手となる。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	淡 青 灰 色	精 良	良 好
165	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良 好	堅 緻
166	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	良 好	良 好
167	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。やや高い撮の中央部は窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	乳白色	や や 不 良	不 良
168	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。高い撮の中央部はわずかに窪む。	外面横ナデ、撮中央部・内面ナデ。	青灰色	や や 不 良	や や 不 良

中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

Tab.21 第4層黒褐色粘質土出土遺物観察表(須恵器)5

法量( )は復原値

番号	器種	法量 (cm)				形態	技法	色調	胎土	焼成
		口径	底径	器高	高台高					
Fig.31 169	坏蓋					撮をもつ頂部の破片。撮は中央部に向うにつれて厚手となる。	外面横ナデ、内面ナデ。	濃青色	やや不良	良好
Fig.32 170	壺		(6.7)			極めて厚手の平底。	底部外面ナデ、他は横ナデ。	濃青色	良好	良好
171	壺		(10.0)			不安定な平底ぎみの底部。	内外面ともやや粗い横ナデ。	青灰色	やや不良	良好
172	壺		(10.0)			平底で胴部の開きは大きい。	内面・底部外面ナデ、他は横ナデ。	灰白色	精良	やや不良
173	甕					口縁部の破片。外彎しながら開き、端部は内彎ぎみに立ち土がる。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	やや不良
174	甕					口縁部の破片。直線的に開き、端部外面は粘土帯貼付により肥厚する。	内外面とも横ナデ。	灰青色	良好	極堅緻
175	甕					口縁部の破片。端部外面は平坦。	内外面とも横ナデ。	青灰色	やや不良	堅緻
176	甕					口縁部の破片。端部はやや肥厚し、端部外面は平坦面をもつ。	内外面とも横ナデ。	青灰色	良好	良好
177	甕					口縁部の破片。口縁端部は肥厚し丸くおさめる。	外面少くとも6条の波状文。内外面とも横ナデ。	濃青色	良好	堅緻
178	甕	(25.0)				口縁部は大きく屈曲し、短く外彎しながら開く。端部外面はやや窪む。	胴部外面平行叩き、内面ナデ、口縁部横ナデ。	青灰色	良好	良好

187・189は内面および外面突帯以下刷毛目、他は横ナデ、188は内面刷毛目、外面横ナデ仕上げ。187は黒灰色、188・189は黒褐色を呈し、胎土、焼成良好。いずれも外面に煤付着。190は鍋ないしは鉢。口縁端部内面は内側に突出する。体部内面粗い刷毛目、他は横ナデ調整。灰黒色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。191は厚手の皿。体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。黒灰色で胎土精良。焼成良好。192は挿鉢。口縁端部内面は粘土帯貼付により断面三角形状に肥厚する。体部内面に6条の櫛目描き上げを施す。体部外面刷毛目、他は横ナデ仕上げ。外面黒灰色、内面乳灰白色を呈し、胎土、焼成とも良好。193~196は鼎の脚部。いずれも指圧による整形が施される。196は底部との境に煤が付着する。193は黒灰色、194は黄褐色、195は黄灰褐色、196は茶褐色を呈し、いずれも胎土、焼成良好。

石器 (Fig.34・35 P L 21-(1))

遺 物

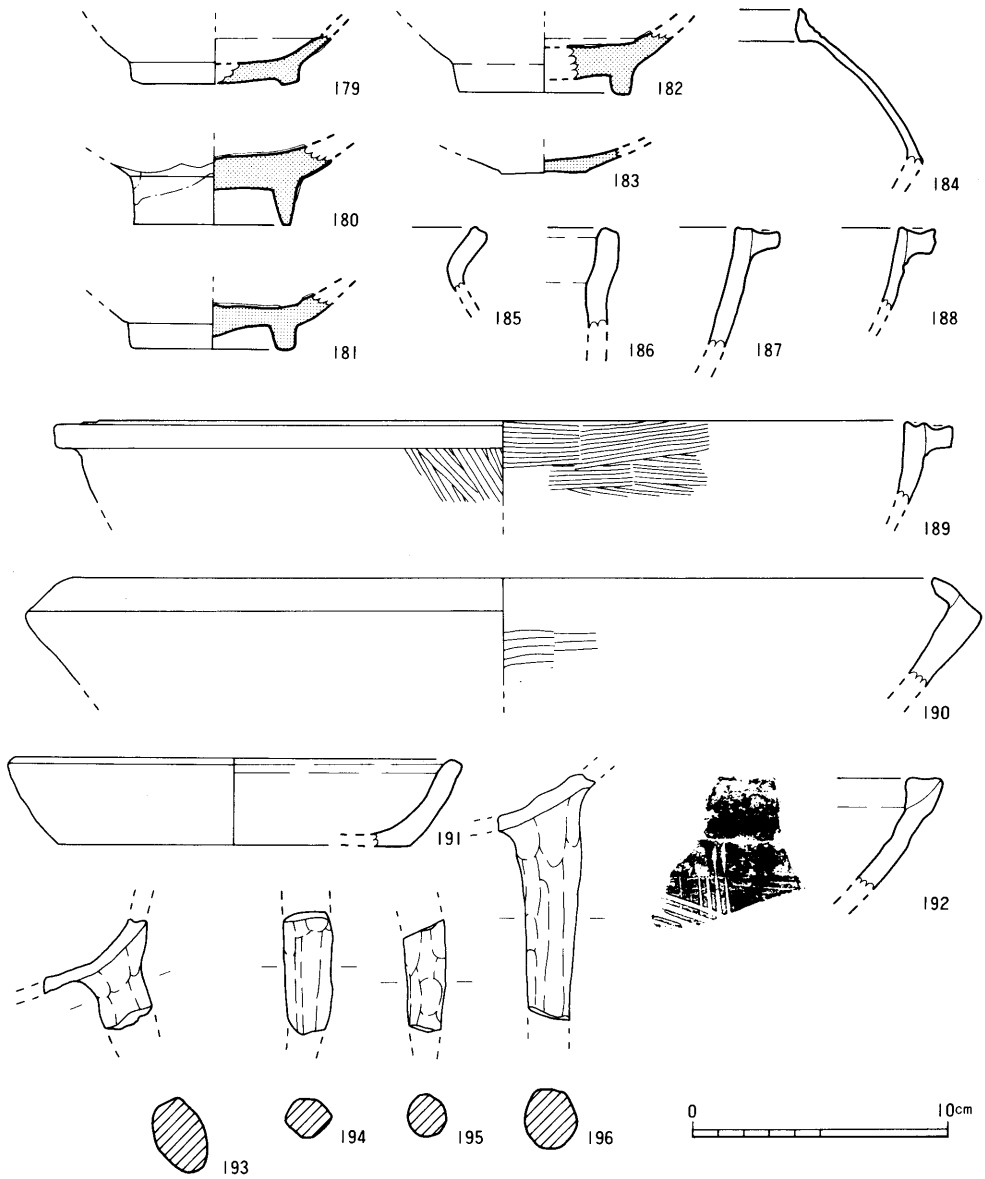


Fig. 33 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（輸入陶磁器・瓦質土器）

磨製石斧 (Fig. 34 197~199) 197は寸づまりの扁平磨製石斧。撥形を呈し頭部はゆるくカーブする。再研磨により両刃に造出するが、正背両面での刃部長の差が著しい。器長9.2 cm、器幅6.2 cm、器厚2.1 cm、重量228.0 g。198・199は蛤刃石斧。198は小型品で頭部を欠損する。内彎する刃部は短く刃部長1.7 cm。器長8.6 cm、器幅4.1 cm、器厚2.5 cm、



中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査

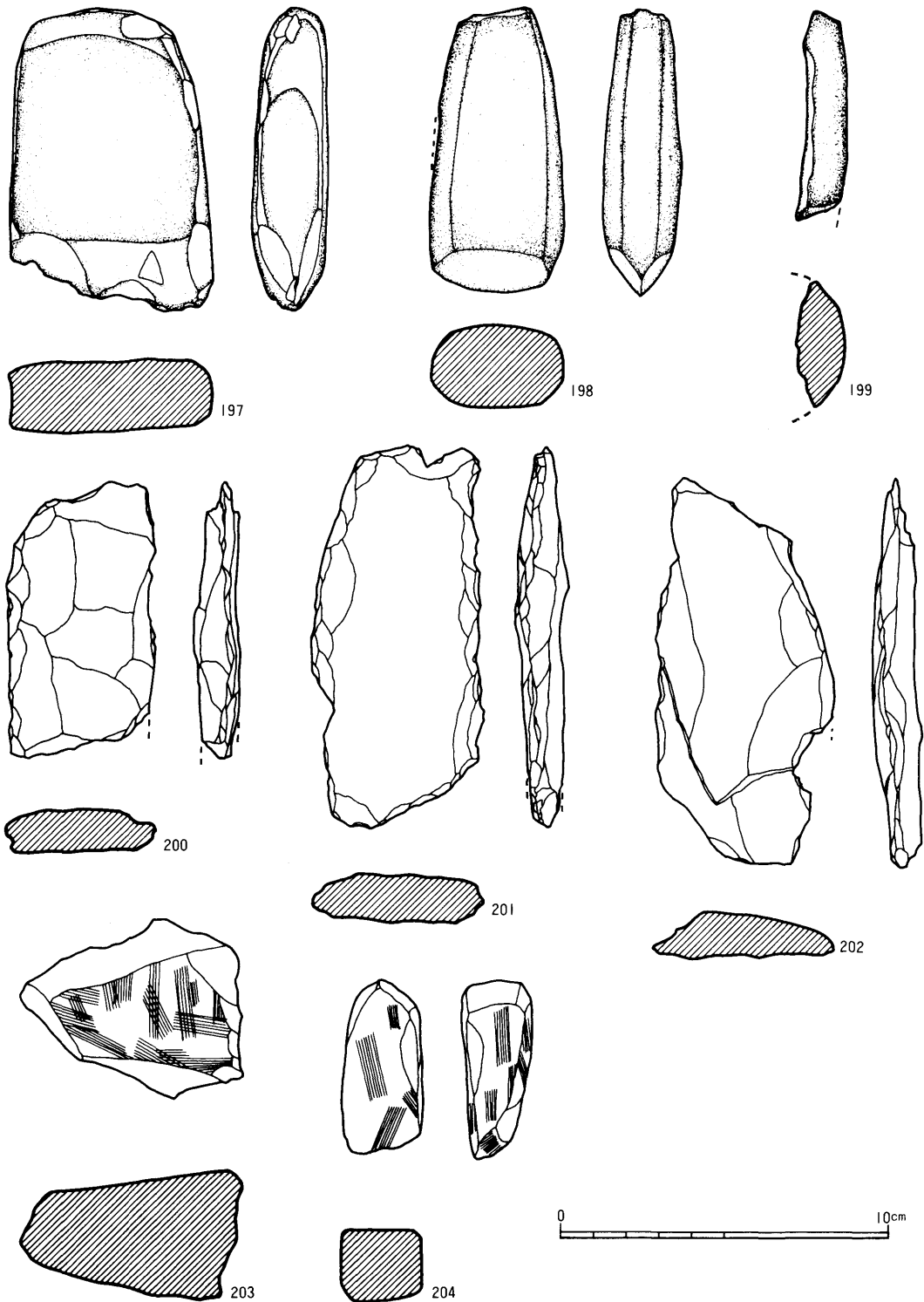


Fig. 34 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器）

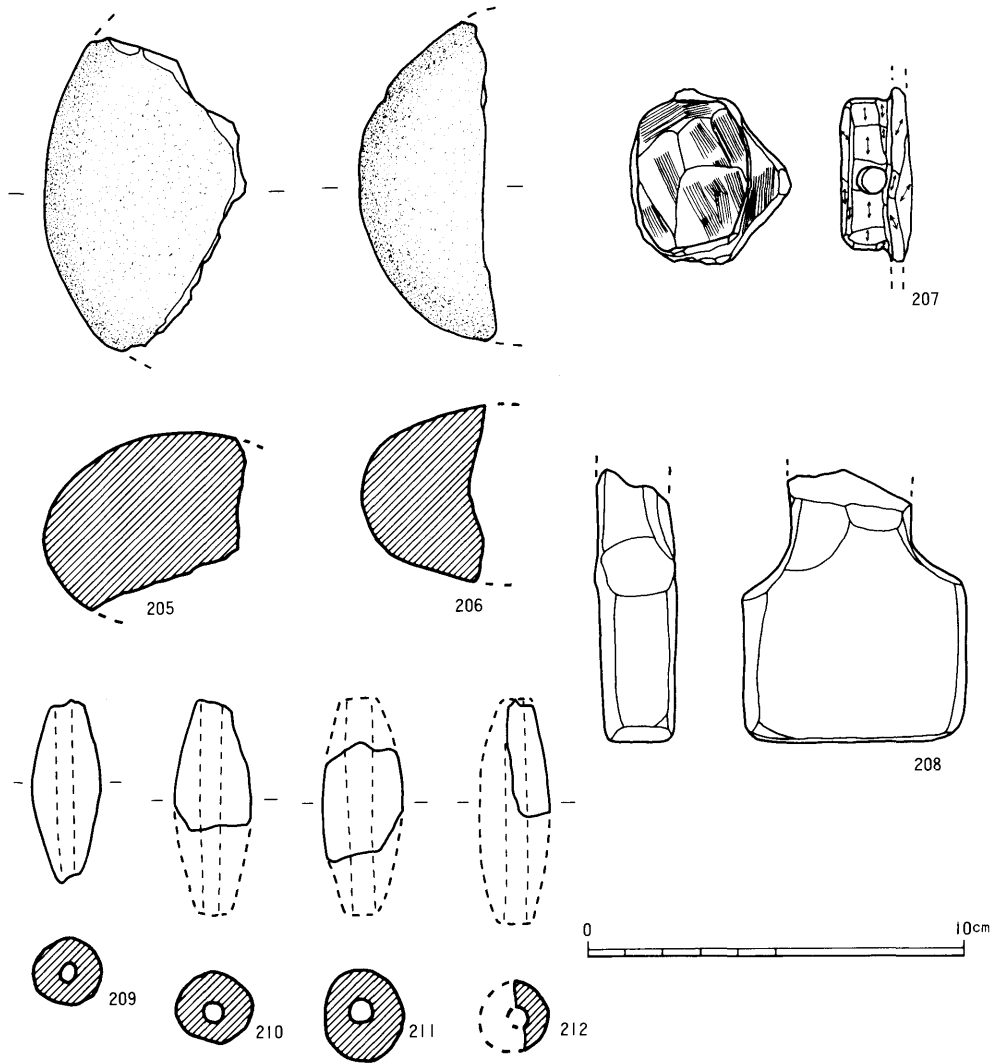


Fig. 35 第4層黒褐色粘質土出土遺物実測図（石器・土製品）

重量 126.5 g。199は太型蛤刃石斧の頭部。

打製石斧（Fig. 34 200～202） いずれも扁平な緑色片岩を素材とするもので、土掘り具（打製石鍬）の可能性も考えられる。200は敲打による剥離が全周におよび現存器長 8.4 cm、器幅 4.5 cm、器厚 1.3 cm、重量 67.1 g。201は縁辺部にのみ敲打による丁寧な剥離作業を行う。現存器長 11.7 cm、器幅 5.2 cm、器厚 1.5 cm、重量 123.1 g。202は頭部が傾斜する。正面下半部は節理面に沿って剥落している。敲打による剥離は粗雑。現存器長 11.8 cm、器

幅 5.5 cm、器厚 1.4 cm、重量 103.1 g。

砥石 (Fig. 34 203・204) 203は資料の上面にのみ砥面が認められる。砥面はわずかに凹面を呈するもののほぼ平坦で石質の粒子が細かく仕上げ砥と思われる。重量 146.3 g。204は楔形状を呈し、研砥は頭部を除いた全面におよんでいる。203 同様石質の粒子細かく仕上げ砥と考えられる。重量 38.8 g。

磨石 (Fig. 35 205・206) 欠損品のため凹石の可能性もある。いずれもやや扁平な河原石を素材とする。

石製品 (Fig. 35 P L 21-(1))

有孔鈕付石製品 (207) 鈕は平面楕円形を呈し、扁平な体部との境には袂りをもつ。中央部よりやや下位に長側縁を貫通する穿孔がみられる。上面は平坦で長軸に斜行、側縁部は各側縁に平行する削りによって整形する。鈕は長径 4.0 cm、短径 2.0 cm、高さ 1.3 cm。孔径 0.7 cm。重量 46.5 g。

土製品 (Fig. 35 P L 21-(1))

分銅形土製品 (208) 正背両面に顔等の造出作業が認められず、穿孔も施されないことから下半部と推察される。小型品で下縁部の平坦な方形状を呈し、両上端部は側面からの指圧により弧状に扶れる。断面は背面が凸面をなすが正面は平坦。丹彩は認められない。現存長 7.2 cm、幅 5.9 cm、くりこみ部幅 3.3 cm、厚さ 2.0 cm。ナデ仕上げ。淡黄褐色で粗砂粒を多く含み、焼成は良好。

土錘 (209～212) 紡錘形をなすものが 4 点出土した。209は小型品で胴部中位の屈曲部に最大径をもち、上下両端部径を大きく上まわる。長さ 4.8 cm、胴部最大径 1.8 cm、上端部径 0.9 cm、下端部径 0.6 cm、孔径 0.4 cm、重量 11.6 g。209・211は灰褐色、210・212は乳白色を呈する。焼成はいずれも良好で、209・210は胎土に粗砂を多く含む。

第 5 層明灰色砂質土出土遺物 (Fig. 36 P L 21-(4))

弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

弥生土器 (7)

短く直線的に外反する壺の口縁部。口縁端部は丸くおさめる。外面横ナデ仕上げ、内面荒れのため調整不明。黒褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

土師器 (1～6)

1は坏でゆるやかに大きく開き立ち上がる体部をもつものと思われる。体部外面横ナデ仕上げ、他は器面荒れのため調整不明。糸切り底。黄褐色を呈し、胎土、焼成ともやや不良。

## 小 結

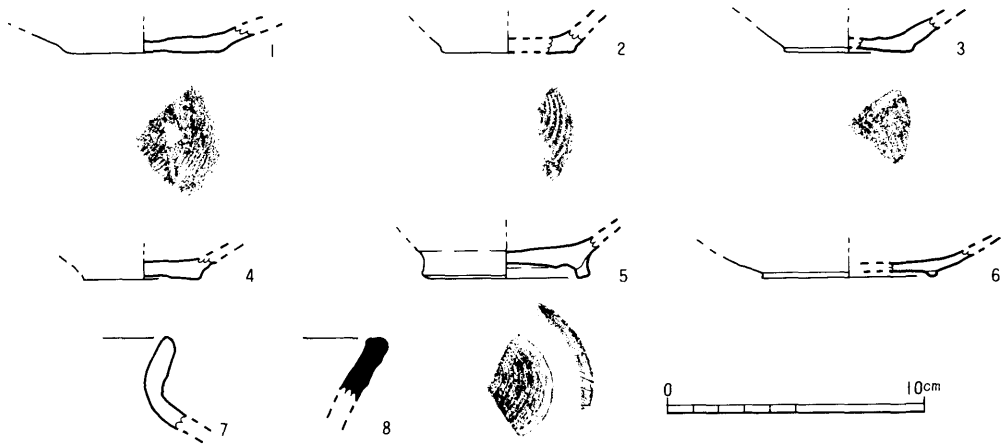


Fig. 36 第5層明灰色砂質土出土遺物実測図  
(弥生土器7 土師器1～6 須恵器8)

復原底径 6.0 cm、2～4 は小皿。2・4 は外面横ナデ、3 は内面横ナデ仕上げ、他は器面荒れのため不明。2・3 は糸切り底。いずれも濁黄褐色を呈し、2・4 は胎土、焼成とも良好、3 は不良。復原底径は 2 が 5.2 cm、3 が 2.4 cm、4 が 2.2 cm。5・6 は碗の底部。5 は底部と体部の境にわずかに外方へ開く断面長方形の高台を付す。接地面は高台内側端。内面へラ磨き、底部外面ナデ、他は横ナデ仕上げ。糸切り底。底部 6.0 cm、高台高 1.1 cm。6 は貧弱な低い高台をもつ。調整不明。復原底径 6.7 cm、高台高 0.2 cm。5 は内面黒色、外面赤褐色、6 は灰褐色を呈し、胎土、焼成はいずれも良好。

### 須恵器（8）

甕の口縁部でシャープさを欠く。暗青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。

## 5 小 結

今回の調査では土壙、溝、旧河川跡、柱穴および3層にわたる遺物包含層を検出した。土壙は5基検出したが不整形で浅いものが多い。また、各土壙からの出土遺物には各時期のものが混在し時期はにわかに決定し難い。

溝は弥生時代後期のものから近～現代のものまで7条を検出した。近～現代のものを除いていずれも東西方向に流路をもち、特に溝SD3は幅2.6～4.4mと他の溝と規模が異なり、後述する旧河川跡堆積土中に溝SD3覆土と同一層が認められることから旧河川跡と一時期併存し機能していた可能性が指摘できる。しかし、溝SD3水口付近にしがらみ

状ないしは堰状の構造物は検出されなかった。

旧河川跡は調査区中央部を南東から北西へ貫流し、川床には古墳時代前期前葉を上限とする杭列および時期不明の杭列の少くとも二時期にわたるものと思われる杭列が認められた。学内では旧河川跡は吉田遺跡調査団の呼称する第Ⅳ地区の南区で縄文時代晩期を上限とするものが、また、昭和56年度に実施した教育学部構内J-19・20区の調査で弥生時代<sup>5)</sup>前期を上限とし古墳時代前期前半まで機能していたものが検出されており、いずれも南ないしは南東から北ないしは北西へ流路をもつものである。なお、昭和54年度に実施した本部構内L-14区の調査では調査区南西隅において北東から南西へ地山が急激に下降しており、今回検出した旧河川跡の河道は集落内における日常生活および生産活動と不離密接な有機関係を保ちつつ、こうした丘陵縁辺下の小規模な谷あいを経由してキャンパス北方に所在する九田川ないしは樫野川方面へと貫流していたものと推察される。

遺物包含層はいずれも弥生時代から鎌倉時代の各時期の遺物が混在し、周辺地域にこの期の集落が存在することを示唆するが、堅穴住居跡は現在までにわずかに弥生時代中期および古墳時代のものが検出されているにすぎない。また、自然科学分野の調査として調査区二カ所で実施したプラント・オパール分析の結果、三層に及ぶ遺物包含層はいずれも乾燥した土壌条件における水田である可能性を示していることが判明し、畦畔は後世における水田上層の削平により消失しているものと推察された。構内遺跡においても生産の場は花粉分析等を含めた自然科学分野の調査との関連によって今後追求すべきであり、その前提として各時期の詳細な集落分布を早急に把握する必要がある。

包含層出土遺物には弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、輸入陶磁器、瓦質土器、石器、石製品、土製品等があり、注目すべき資料も少ない。

弥生土器は前期から後期まで各時期のものが出土している。

須恵器は第3・4層を中心に出土し杯、盤、皿、高杯、甕、壺、器台があるが、杯の出土量が多い。杯身は高台を貼付するものが大半を占め、断面台形ないしは長方形の高台を底部と体部の境より内側に付するものと底部と体部の境付近に付するものがある。いずれにも高台が外方へ開くものと垂直に下降するもののが存在し、わずかに前者において外方へ開く高台をもつものが多い。杯身にはこのほかに蓋受けのかえりをもつものも混在する。杯蓋は口縁部が屈曲して内傾するもの、扁平な天井部をもち口縁部が鳥嘴状になるものおよび肥厚して丸く終るものの他に内傾する身受けのかえりをもつものもある。撮は極めて扁平で頂部が平坦なもの、中窪みのもの、中央部が肥厚するものの三種があるが、

## 小 結

撮をもたない資料も出土している。高坏は脚裾部で急激に開いて端部を内側に折り曲げるものおよび脚端部を上下にわずかに拡張させる短脚のものがみられ、坏部は平坦な底部に屈曲して開く体部をもつものがある。

以上のように須恵器は6世紀中葉から9世紀代にかけての遺物が混在するが、8世紀代の資料が圧倒的に多い。なお、注目すべき資料として焼成時に窯内の熔化した側壁が付着した甕ないしは壺の胴部が第4層から出土している<sup>6)</sup>(P L 21-(2))。こうした資料は窯周辺、とりわけ灰原等から出土する事例が多く、本調査区北方を中心とした丘陵縁辺部に8世紀代の須恵器の窯跡が存在する可能性を示唆するものである<sup>7)</sup>。防長における須恵器生産の萌芽は小野田須恵窯跡の6世紀後半にみられ、様々な政治的、社会的、経済的要請をモメントに地方窯として展開するが、吉敷郡内における須恵器生産は本構内遺跡と標高300～400mの山口山地を隔てて約6km南西に位置する陶窯跡群<sup>8)</sup>が知られているにすぎない。陶窯跡群は谷を臨む丘陵斜面に立地し、谷筋を単位とする数支群によって構成されており、操業期間は8世紀代から9世紀後半、下っても10世紀初頭頃と考えられる<sup>9)</sup>。また、胎土分析の結果、周防鑄銭司、周防国府国庁に須恵器を供給していたことが判明しており<sup>10)</sup>、胎土分析等自然科学分野の検討を行うべきことはいままでもないが、本調査区周辺に包含層中において量的に大きなウエイトを占める8世紀代の窯跡が存在するとすれば、陶窯跡群同様、特定官衛等に須恵器を供給していた可能性は十分に予想され、政治機構による掌握力の差異によって五反地遺跡等<sup>11)</sup>周辺諸遺跡への供給の可能性も提起されるであろう。

歴史時代の土師器は第4層を中心に坏、碗、小皿、台付皿等が出土したが全形を知りうるものは少い。坏はヘラ切りのもので糸切りのものであり、前者は9世紀後半に位置づけられるものであるが量は少ない。碗は出土量が多くいずれも糸切り底である。高台は断面が長方形に近くやや高いものも存在するが、大半は断面台形ないしは三角形を呈し退化したものである。内面にヘラ磨きを施すものも数点ある。また、坏ないしは碗の体部～口縁部の資料には内彎して開く体部に口縁部がわずかに外反するものとそのまま開くものがあり、底部と共に11世紀～13世紀前半に比定される。皿はすべて糸切りで11世紀代のものが出土している。

輸入陶磁器は白磁Ⅳ、Ⅴ、Ⅷ類に加え青磁が出土したが量は少なく、時期的にはおおむね土師器の年代幅の中に収まるものと考えられる。

石器には扁平打製石斧、太型蛤刃石斧、磨石の他、縄文系磨製石斧の再研磨品がある。このほかに注目すべき遺物として美濃ヶ浜式土器、分銅形土製品があげられる。出土し

た美濃ヶ浜式土器は短い脚部をもつもので、近藤義郎氏のいう美濃ヶ浜<sup>12)</sup>に相当する。防長における内陸部での美濃ヶ浜式土器の出土例は本遺跡同様樺野川流域の下東遺跡<sup>13)</sup>、毛割遺跡<sup>14)</sup>にみられる。下東遺跡では7世紀代の堅穴住居跡から2類、6世紀後半～7世紀代の須恵器を伴出する包含層中より2・3類が出土している。前者は滑石製紡錘車4点、後者は手捏ね土器2点、滑石製紡錘車3点、管玉1点を共伴する。毛割遺跡では13・14号堅穴住居跡より2類ないしは3類と思われるものが出土し、13号堅穴住居跡からは滑石製紡錘車1点、碧玉製管玉1点を伴出している。

上記各遺跡は内陸部での製塩土器の出土例が知られる河内船橋遺跡<sup>15)</sup>、大和布留遺跡<sup>16)</sup>をはじめとする畿内諸遺跡および中国山地の松ヶ迫遺跡<sup>17)</sup>、備後西江遺跡<sup>18)</sup>等の各遺跡同様いずれもその地域の中核的集落を形成していたものと思われ、内陸部消費地での需要に対応して製塩遺跡において散状塩として生産されたものが製塩土器あるいは別の容器に入れられた状態で搬入され、集落内で焼き塩に再生産されたものと考えられる。<sup>19)</sup>すなわち、内陸部での出土例がピークに達すると思われる6世紀後半ないしは7世紀から畿内で確認されている9世紀にかけて内陸部（消費地）で出土する製塩土器は主として生産地からの運搬用、消費地での貯蔵用として機能していたものと推定される。<sup>20)</sup>このことは内陸部で出土例のなかにしばしば二次的な火熱を受けたものがみられ、灰や炭を伴う事例もあることが傍証としてあげられるが、その際、伴出する滑石製模造品あるいは土製品等を使用した再生産にかかる祭祀、もしくは再生産された塩を用いた祭祀が集落内で行なわれたものと推察され、消費地での需要を背景にした流通・消費過程の把握に貴重な資料を提供した。

分銅形土製品はその分布の中心地域である備前、備中<sup>21)</sup>のものとも異なり、島田川流域および井上山遺跡<sup>22)</sup>等でみられる方形状を呈する小形品で、その形状は調整等から推して弥生時代後期のものと考えられ、本例の西限を示す資料である。

以上述べてきたように、今回の調査では弥生時代前期から鎌倉時代前半の遺構、遺物が明らかとなり、その内容も多岐にわたっている。しかし、これらの遺物をもたらしたと考えられる同時期の遺構の分布は、上述したように断片的な発掘調査により本調査区至近地域、とりわけ北方丘陵地域で検出されている住居跡、溝、土壙等で散見しうるのみで、未だ十分に把握されていないのが現状である。したがって、県内において稀有な資料を内包しつつキャンパス北部に営まれた集落の生産、消費領域を規定する占地、時期、規模、住居単位等解明の一手段として周辺地域の徹底調査によるデータの収積が急務であろうと思われる。

## 小 結

注)

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館 「山口大学構内遺跡調査研究年報 Ⅰ」 山口大学 1982
- 2) a 小野忠憲 「山口大学構内遺跡」 『考古学ジャーナル』 第9号 1967  
b “ 「山口大学構内吉田遺跡の性格」 『学園だより』 山口大学 1970  
c 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」 山口大学 1976
- 3) 横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の中国輸入陶磁器について」 『九州歴史資料館研究論集』  
4 1978  
以下、輸入陶磁器は上記の分類に従う。
- 4) a 近藤義郎 「土器製塩の盛行と衰退」 『日本塩業大系 古代・中世』 日本専売公社 1980  
b “ 「土器製塩の研究」 青木書店 1984
- 5) 前掲書 1)
- 6) 器表、断面を観察すると二次焼成痕が認められず、焼き台とは考えにくい。
- 7) 本構内丘陵の基盤は花崗岩バイラン土で陶窯跡群と同様な立地条件下にある。  
山口県立博物館 「山口県の地質」 1975
- 8) a 小郡町史編集委員会 『小郡町史』 小郡町 1979  
b 山口県教育委員会 「生産遺跡分布調査報告書 窯業」 山口県埋蔵文化財調査報告第74集  
1983
- 9) 桑原邦彦、池田善文 「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」 『山口県の土師器・須恵器  
— 集成と編年 — 』 周陽考古学研究所 1981
- 10) 前掲書 8) b
- 11) 山口県教育委員会 「堂道・五反地遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第22集 1973
- 12) 前掲書 4)
- 13) 山口県教育委員会 「下東遺跡・荻峠遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第30集 1975
- 14) 毛割遺跡出土遺物については山口市歴史民俗資料館小田村宏氏より御教心を得た。  
山口市教育委員会 「毛割遺跡」 山口市埋蔵文化財調査報告第18集 1983
- 15) 原口正三他 「船橋」 Ⅰ 平安学園考古クラブ 1972
- 16) 布留遺跡範囲確認調査会 「布留遺跡範囲確認調査報告書」 1979
- 17) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター 「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告」 1983
- 18) 岡山県教育委員会 「西江遺跡」 岡山県埋蔵文化財調査報告第20集 1977
- 19) 前掲書 4) a, b
- 20) a 岩本正二 「製塩土器の分布と流通」 『考古学研究』 106号 1980  
b 岩本正二 「7～9世紀の土器製塩」 『文化財論叢』 1982
- 21) 山口大学島田川遺跡学術調査団 「島田川」 山口大学 1953
- 22) 井上山遺跡発掘調査団 「井上山」 1979



PL. 3

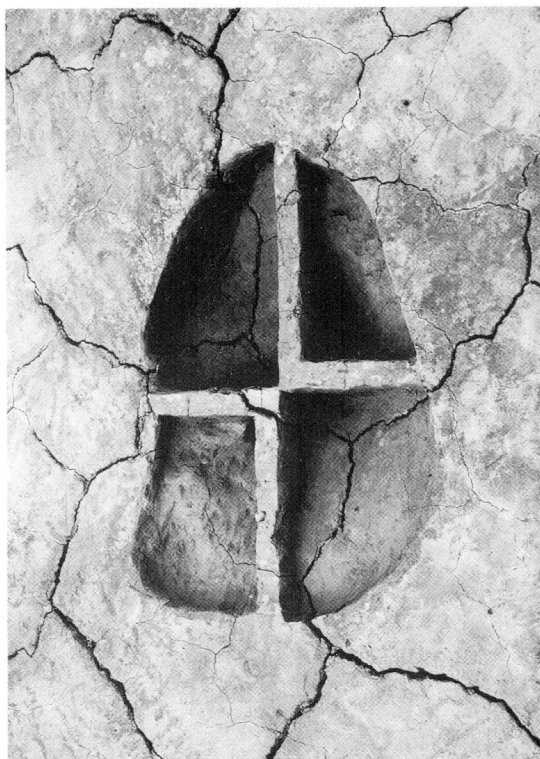
中央図書館新営予定地M-16区の発掘調査



(1) 調査前発掘区全景（東から）



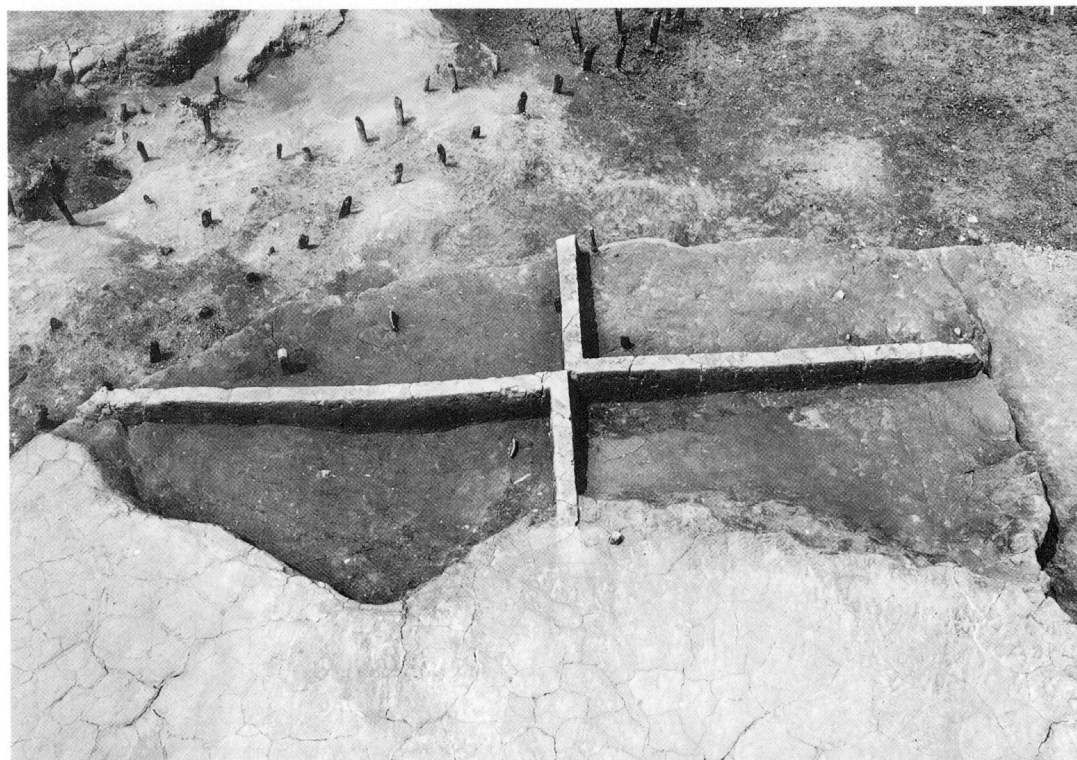
(2) 発掘区全景（西から）



(1) 土壇SK1 (西面から)



(2) 土壇SK2 (西から)



(3) 土壇SK3 (東から)



(1) 土壌SK4 (南から)



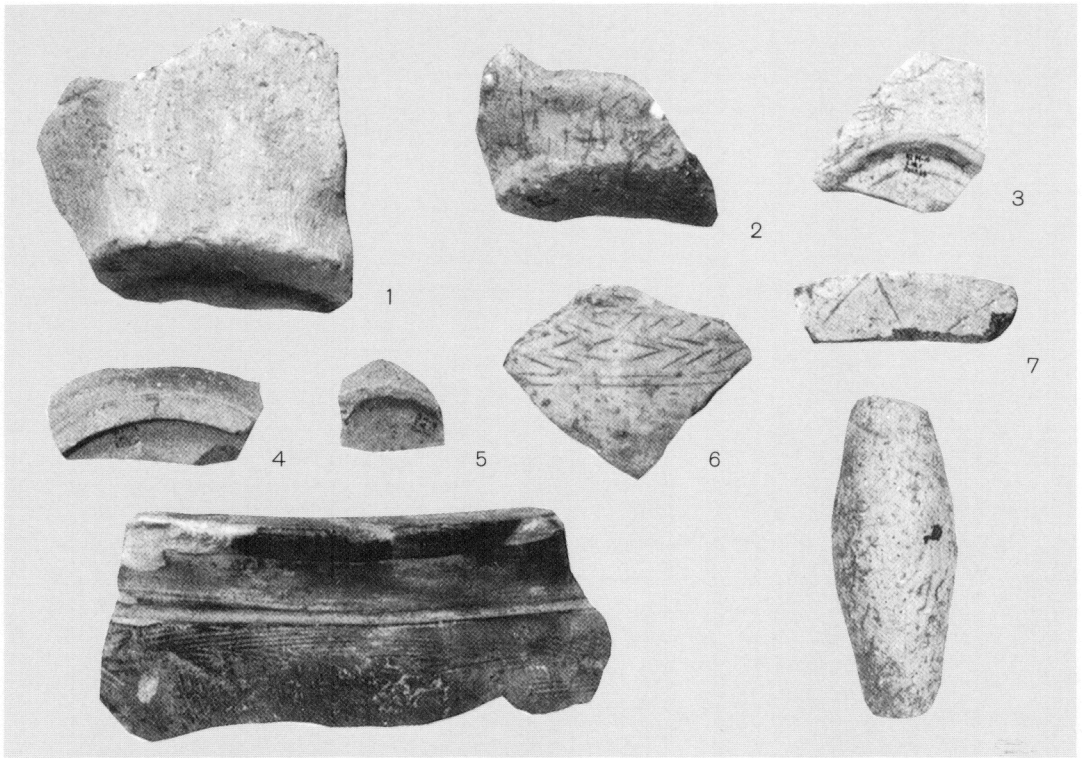
(2) 溝および旧河川跡 (西から)



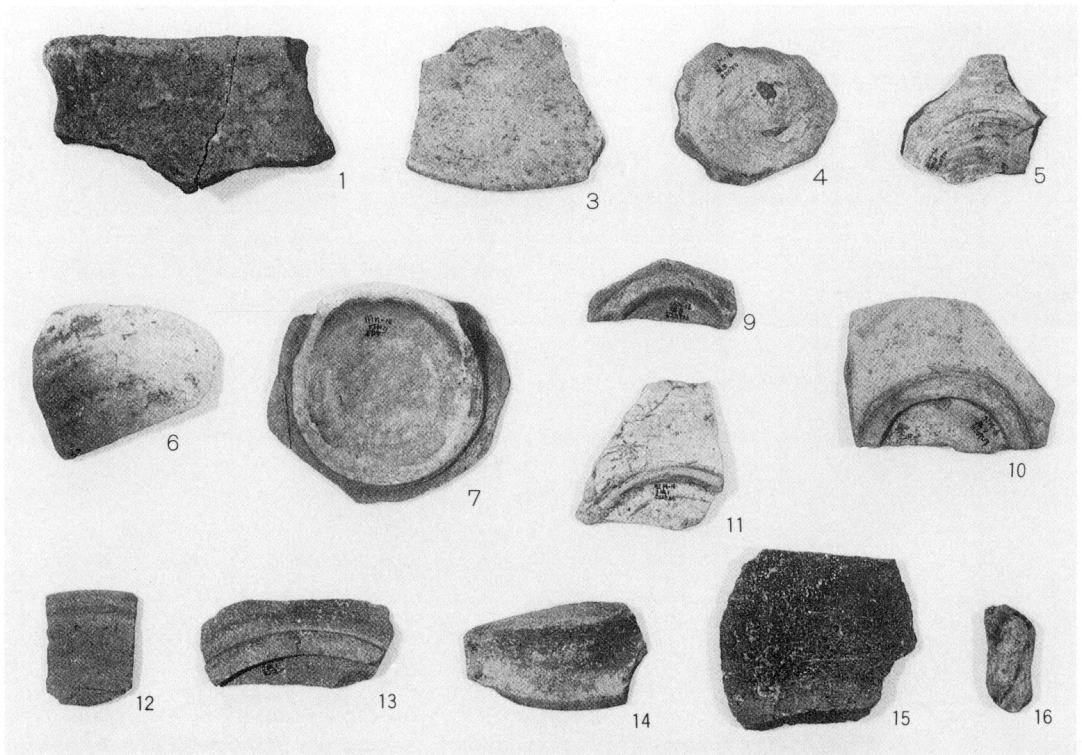
(1) 溝SD 4・5・6 (東から)



(2) 旧河川跡NR土層断面 (南から)



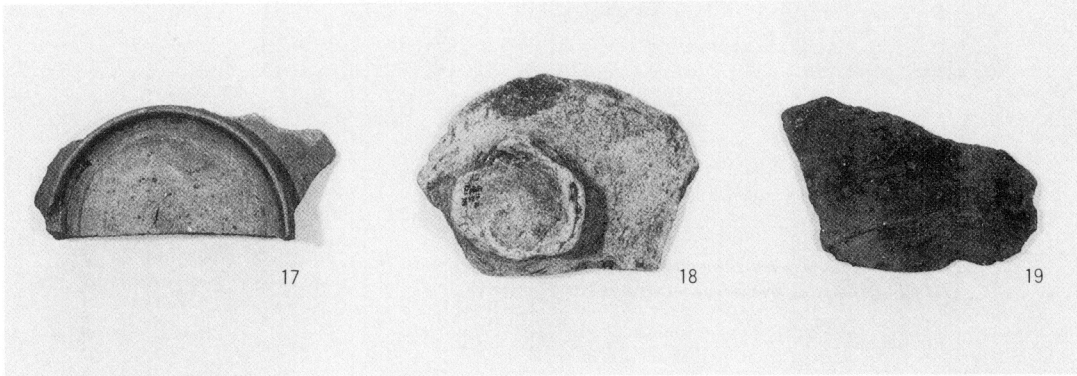
(1) 土壙SK2 (1～5)・SK3 (6～9) 出土遺物



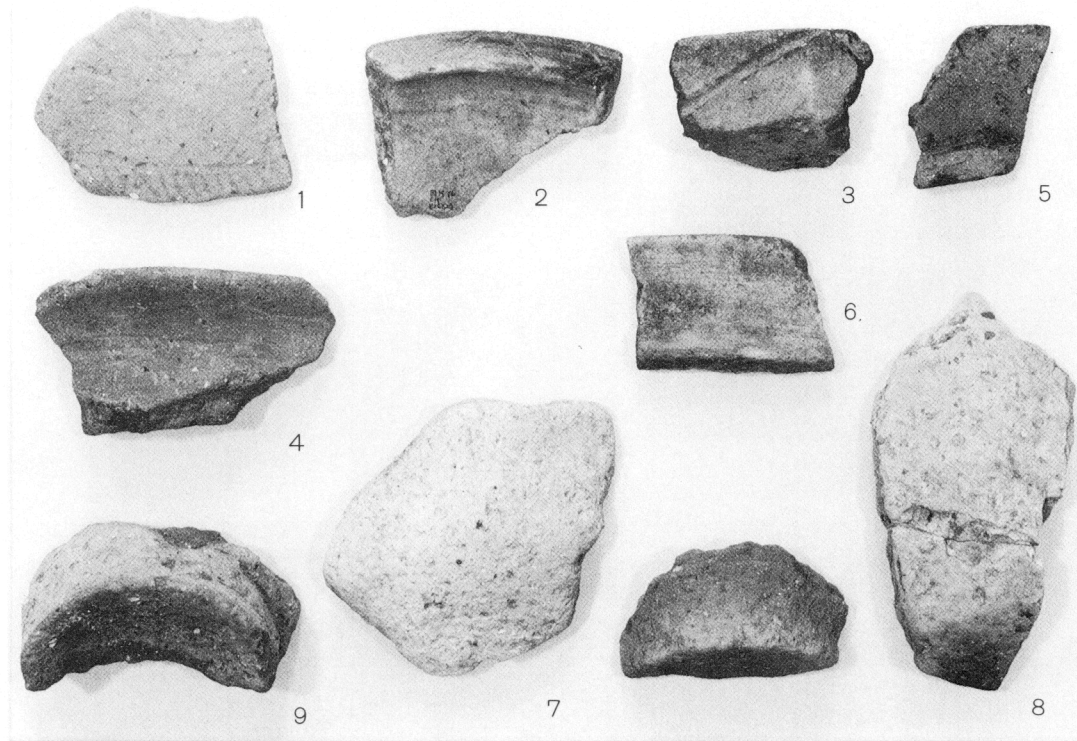
(2) 溝SD3出土遺物



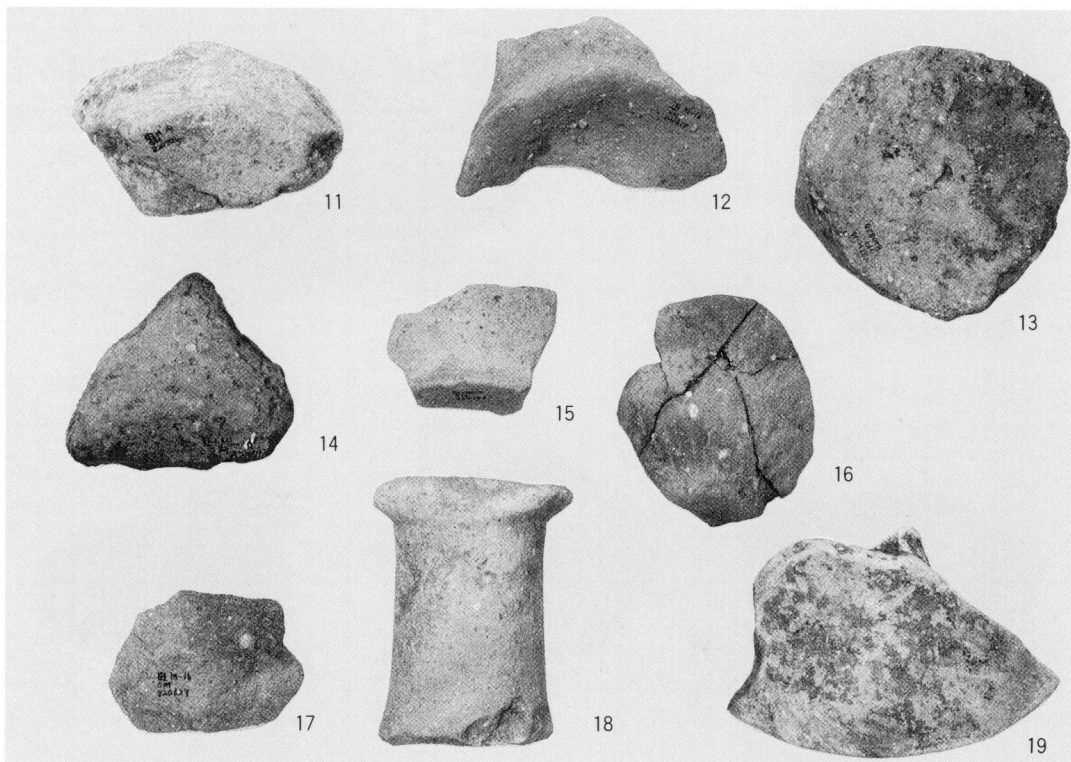
(1) 溝SD3出土遺物



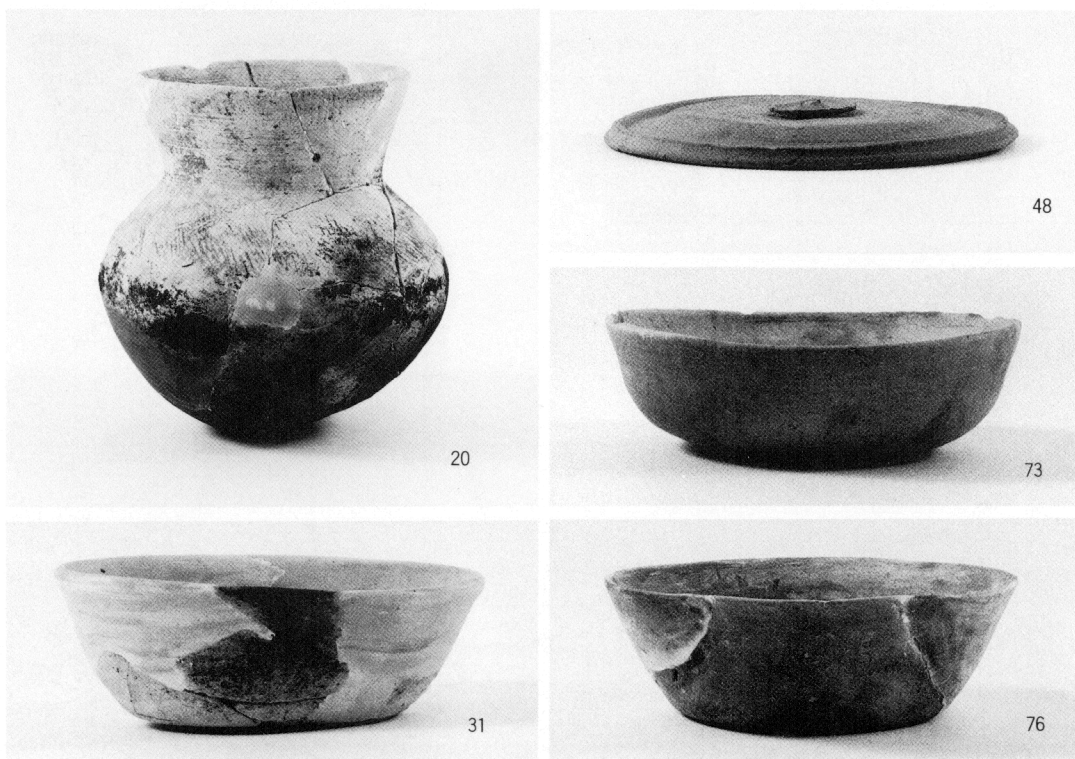
(2) 溝SD4 (17)・SD5 (18・19) 出土遺物



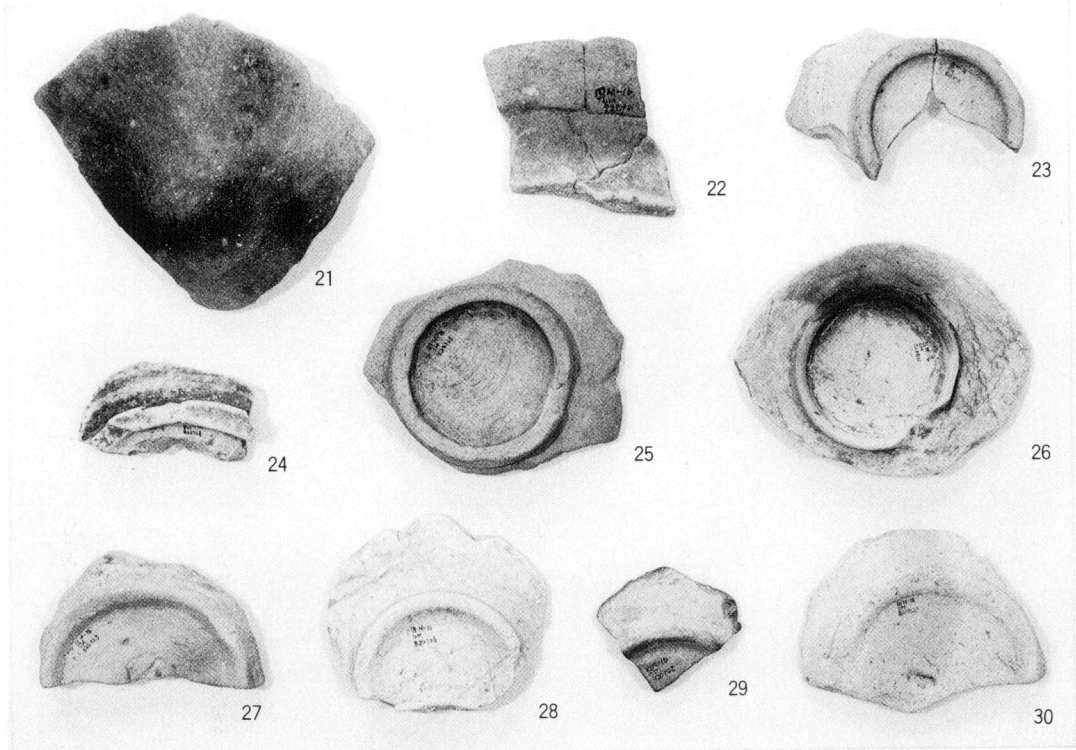
(3) 旧河川跡NR出土遺物 (弥生土器)



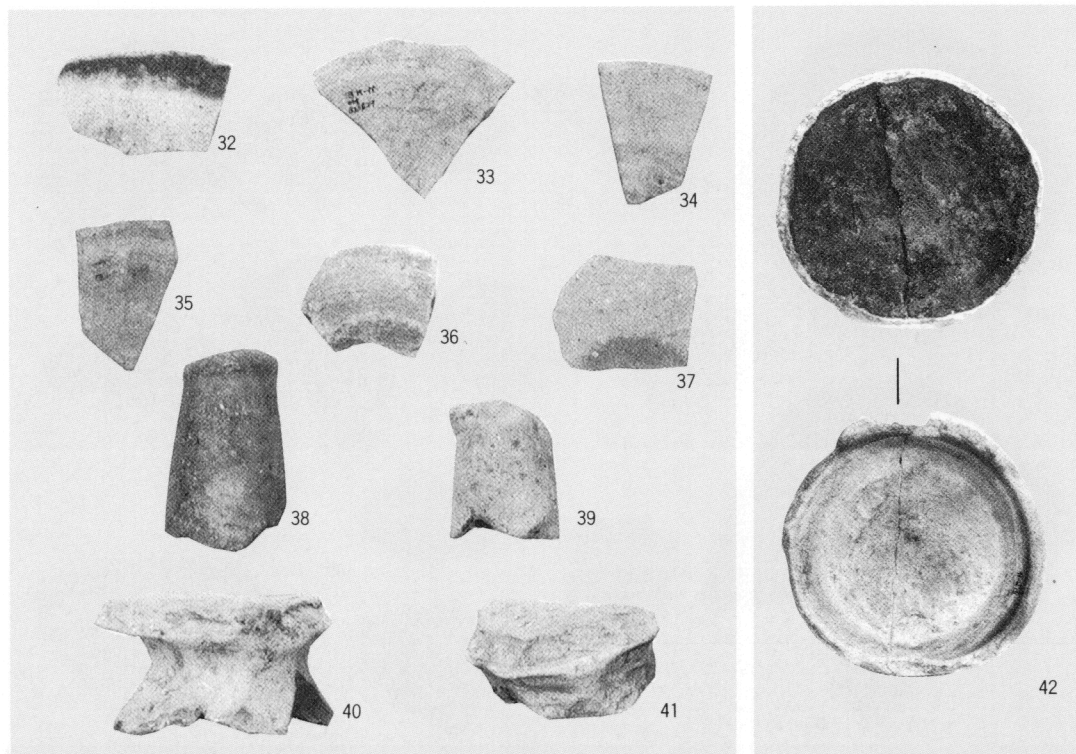
(1) 旧河川跡NR出土遺物 (弥生土器)



(2) 旧河川跡NR出土遺物 (土師器20・31 須恵器48・73・76)

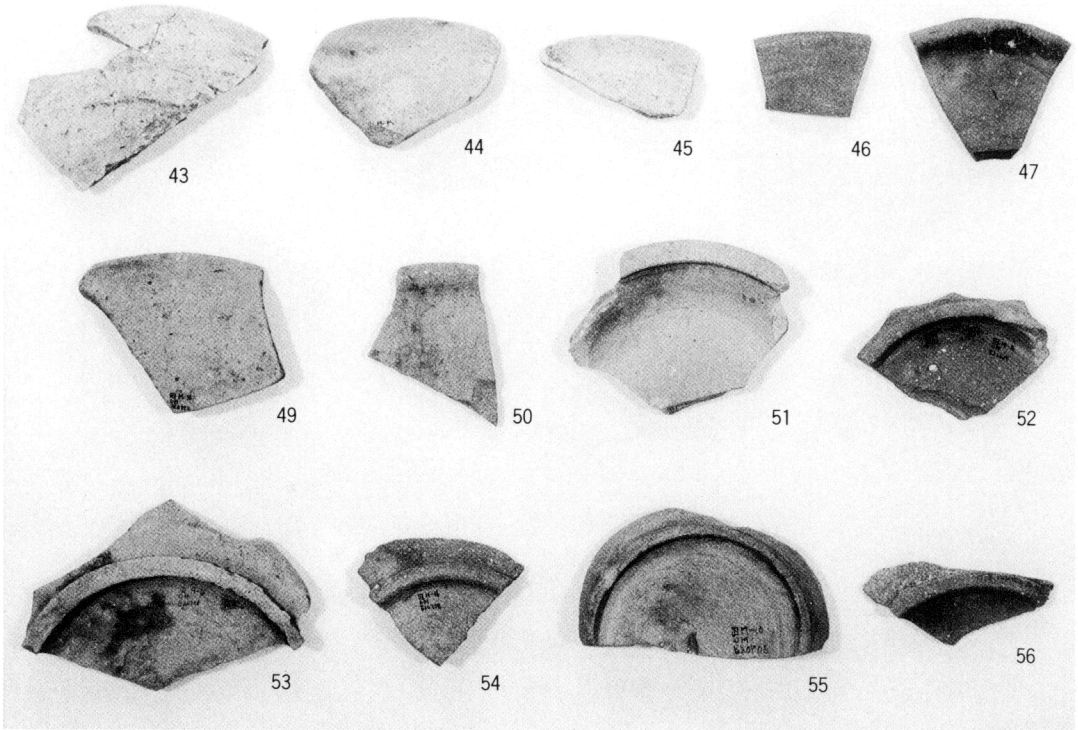


(1) 旧河川跡NR出土遺物 (土師器)

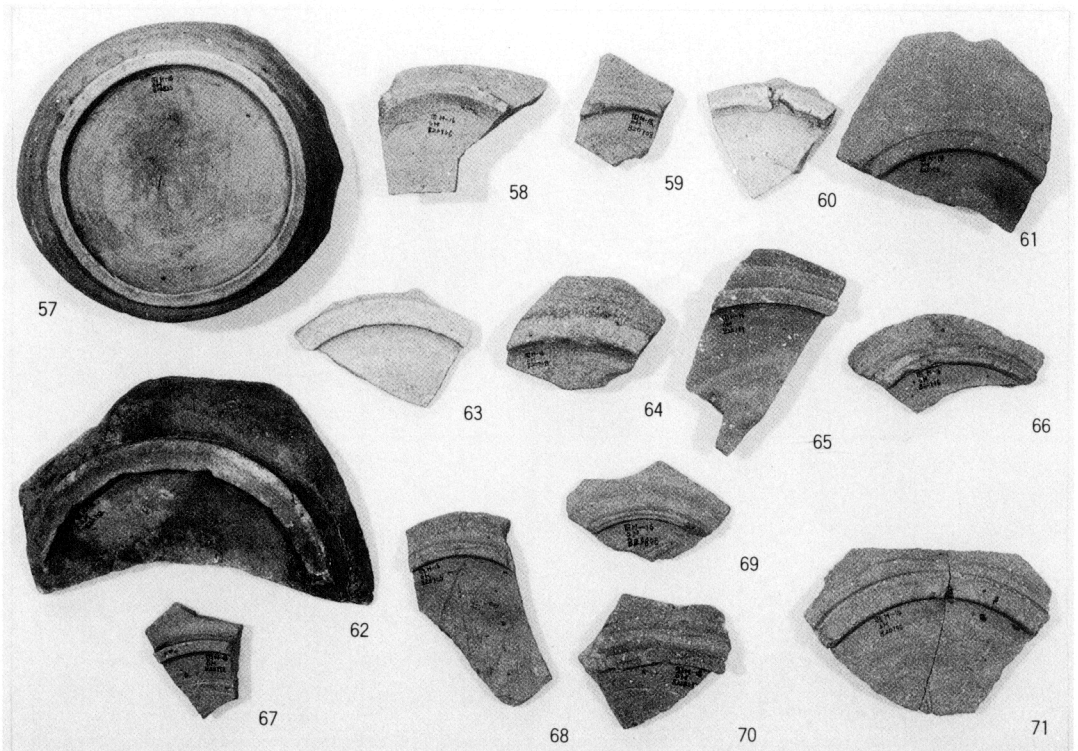


(2) 旧河川跡NR出土遺物 (土師器・黒色土器42)

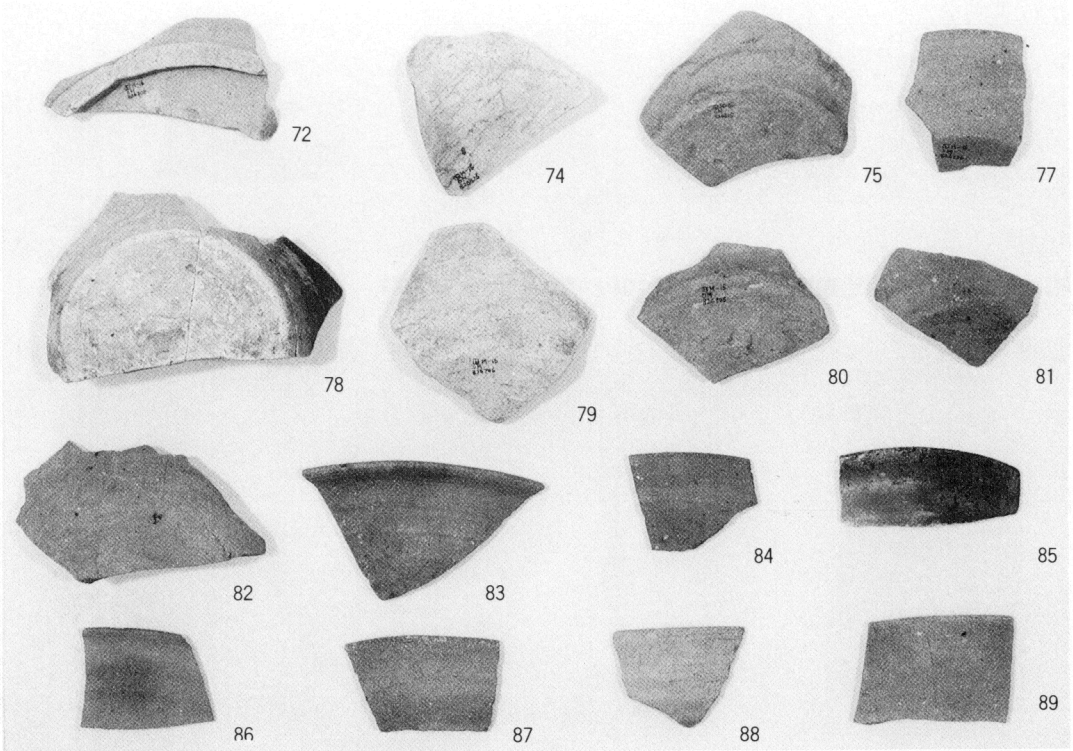




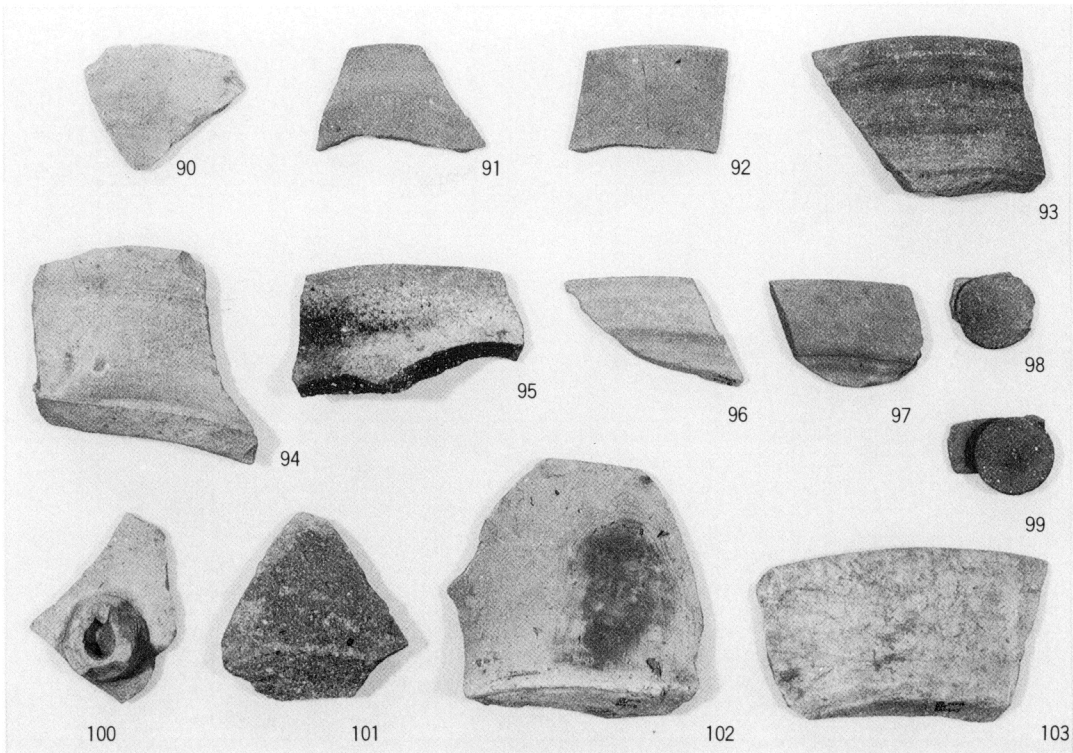
(1) 旧河川跡NR出土遺物 (須恵器)



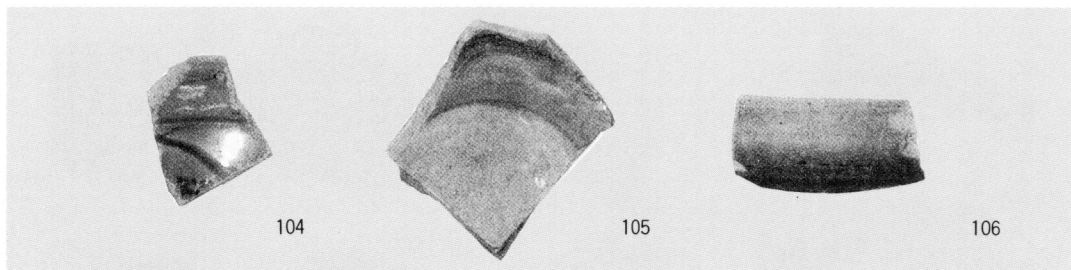
(2) 旧河川跡NR出土遺物 (須恵器)



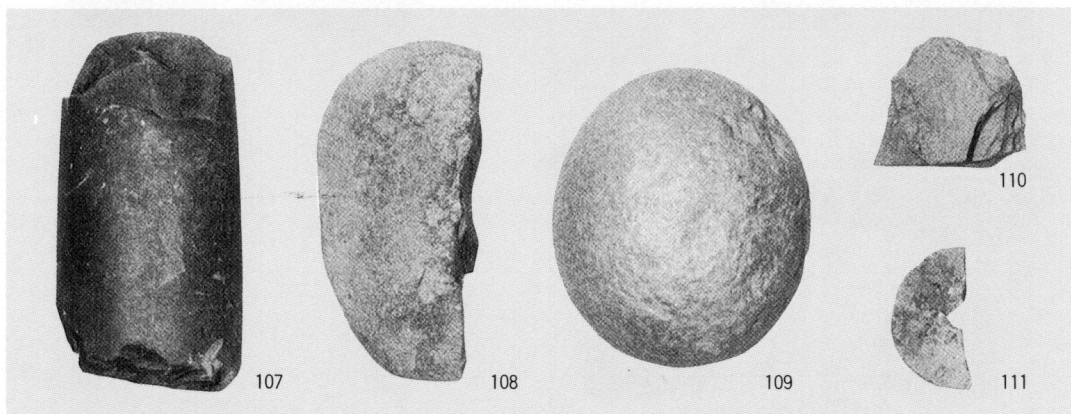
(1) 旧河川跡NR出土遺物 (須恵器)



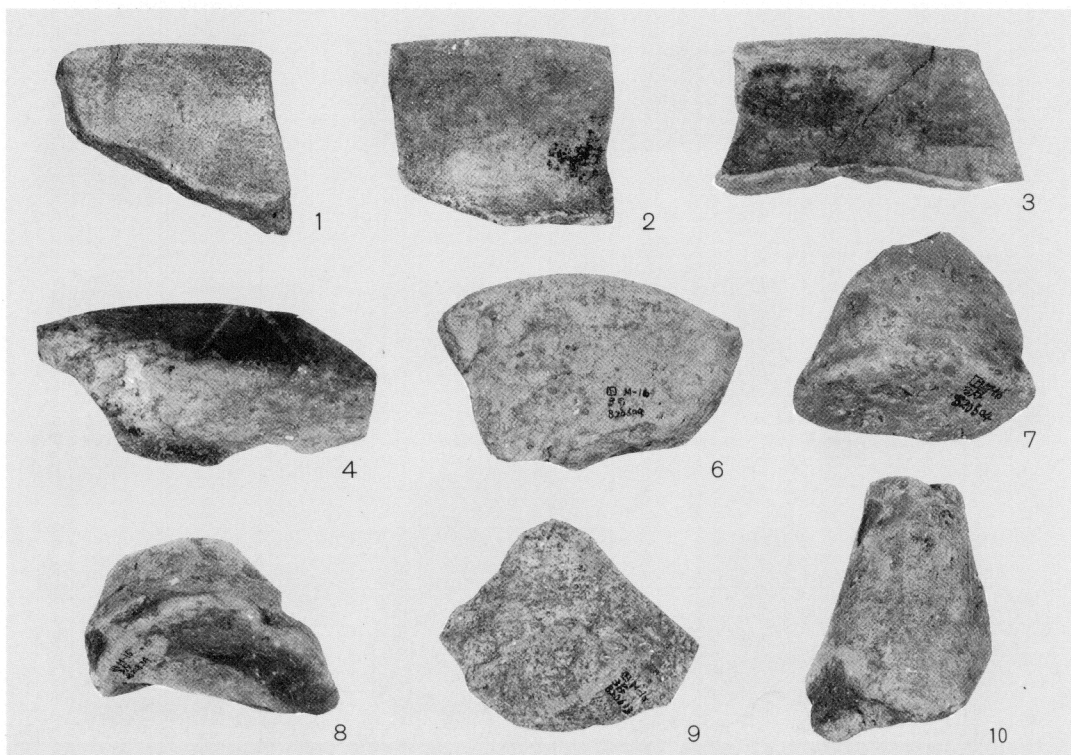
(2) 旧河川跡NR出土遺物 (須恵器)



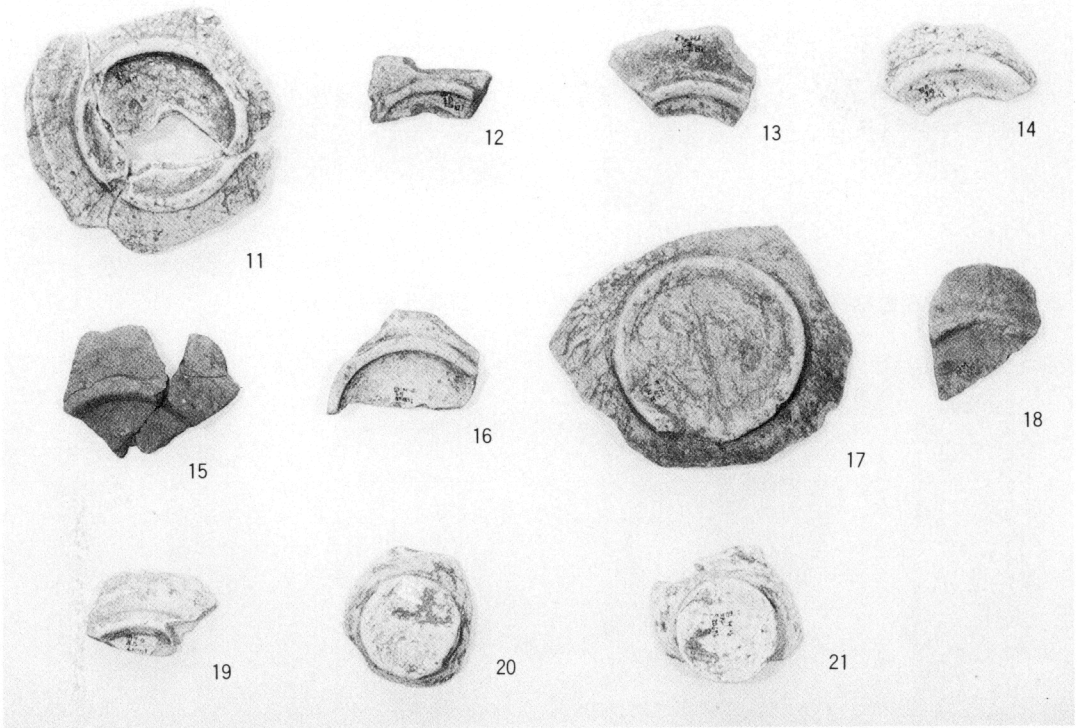
(1) 旧河川跡NR出土遺物 (輸入陶磁器 104・105 瓦質土器 106)



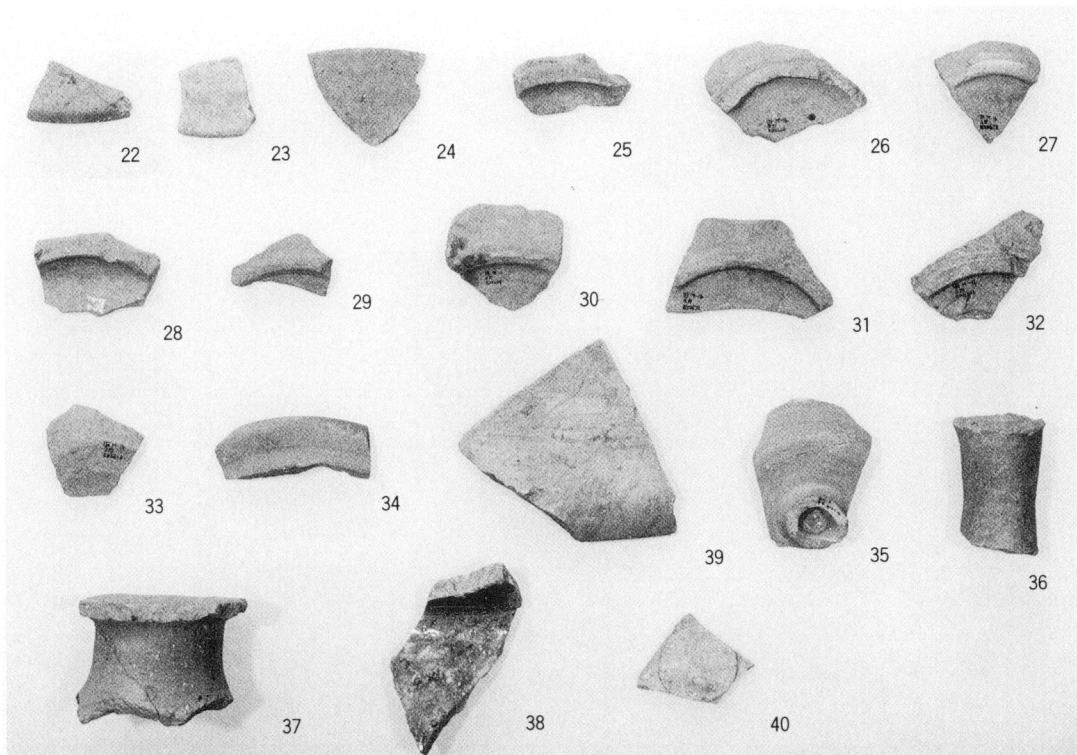
(2) 旧河川跡NR出土遺物 (石器)



(3) 第3層灰褐色粘質土出土遺物 (弥生土器)



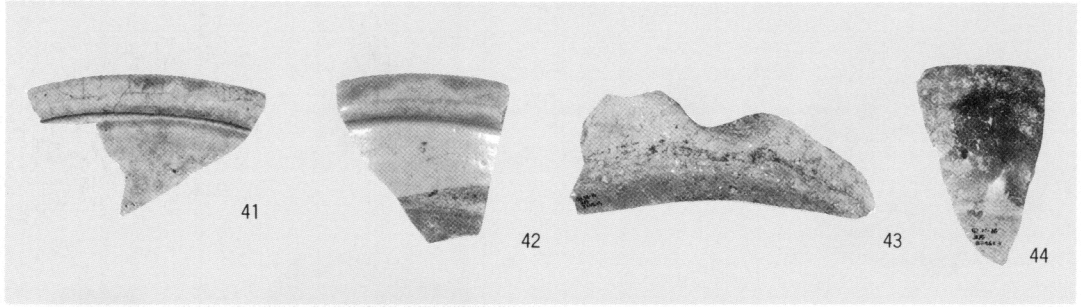
(1) 第3層灰褐色粘質土出土遺物 (土師器)



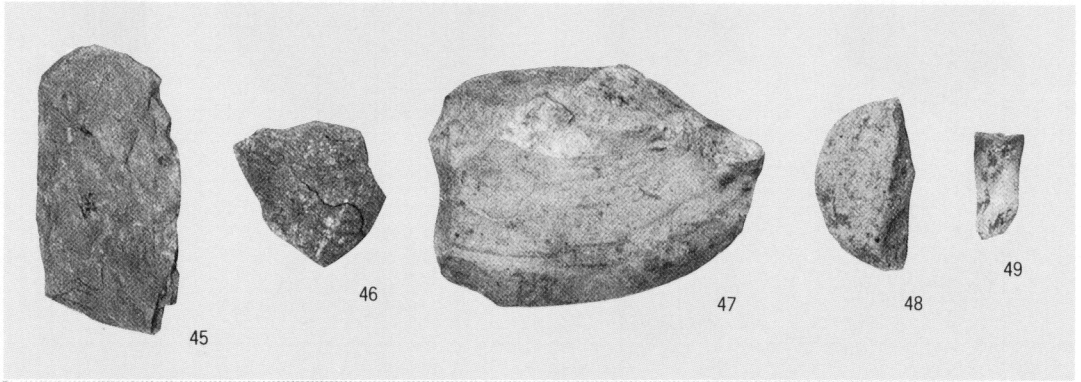
(2) 第3層灰褐色粘質土出土遺物 (須恵器)

PL. 15

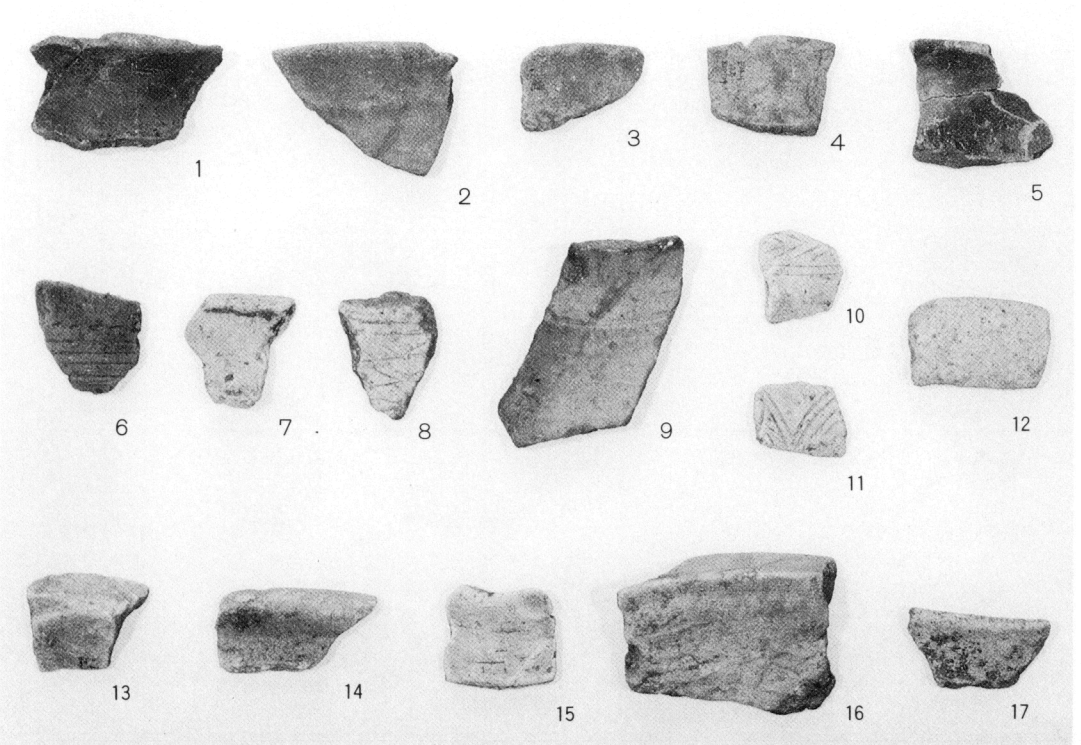
中央図書館増築予定地M-16区  
の発掘調査



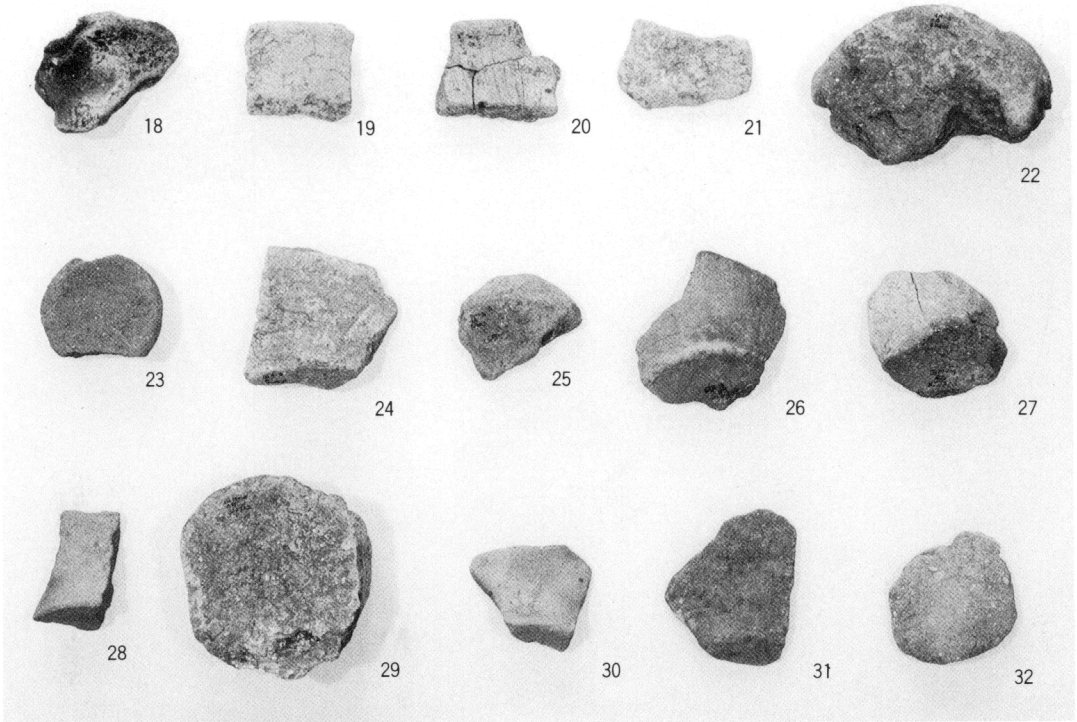
(1) 第3層灰褐色粘質土出土遺物 (輸入陶磁器41・42 瓦質土器43・44)



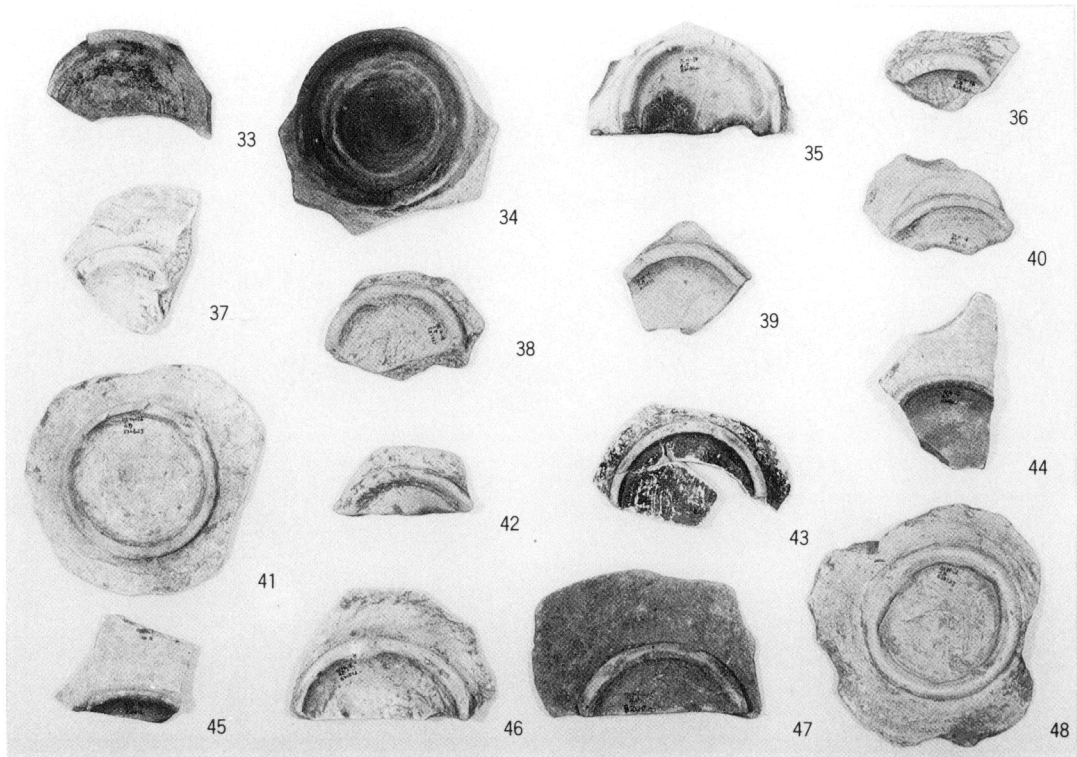
(2) 第3層灰褐色粘質土出土遺物 (石器45~47 土製品48 製塩土器49)



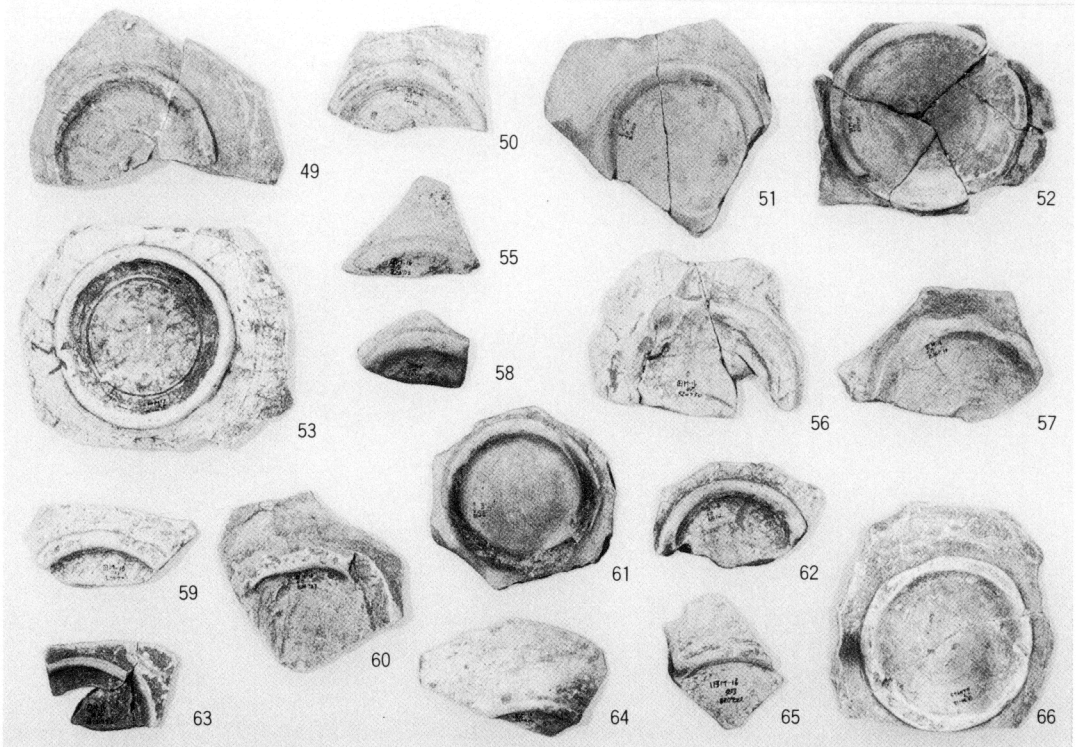
(3) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (弥生土器)



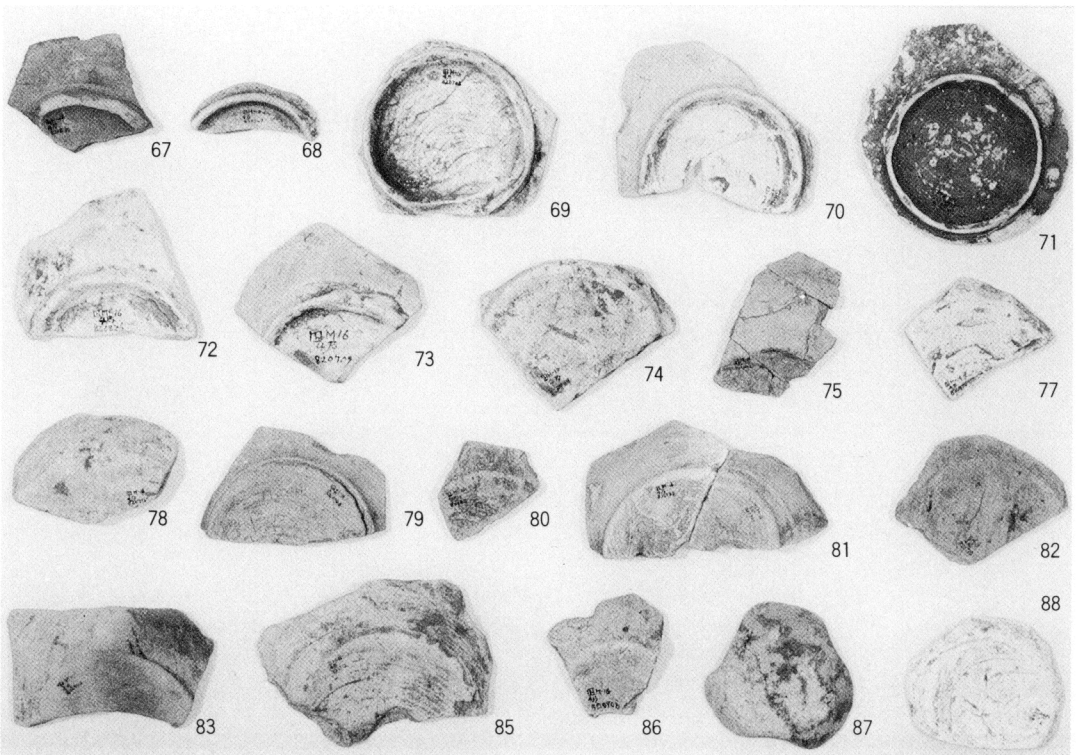
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (弥生土器)



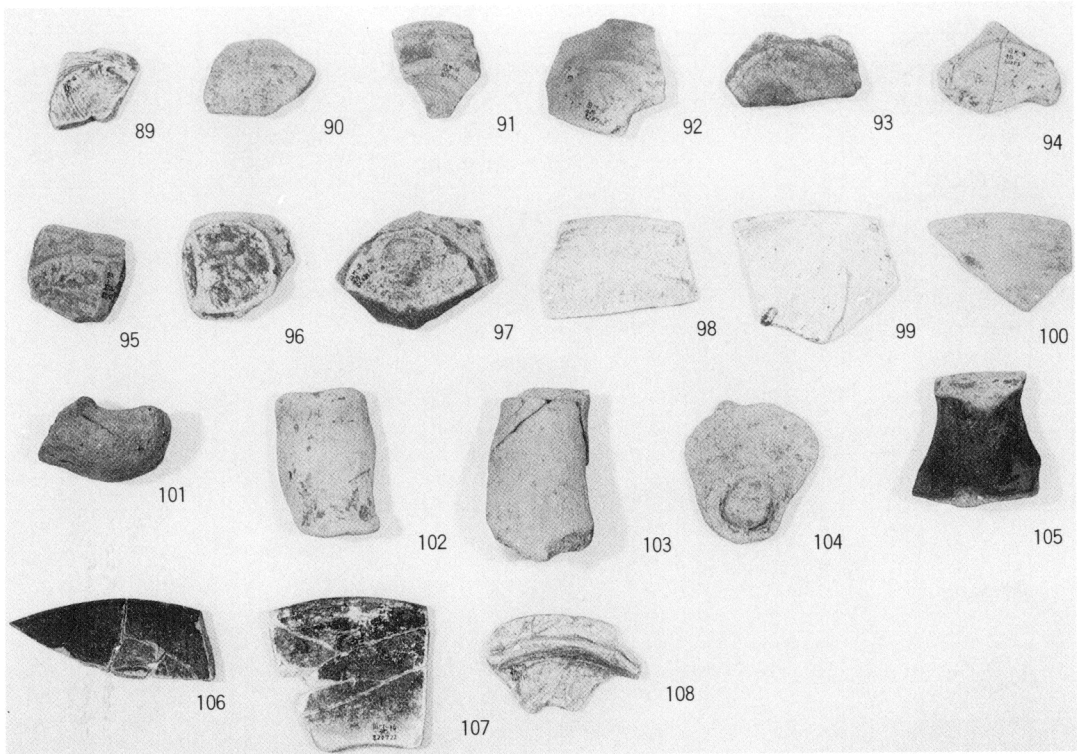
(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (土師器)



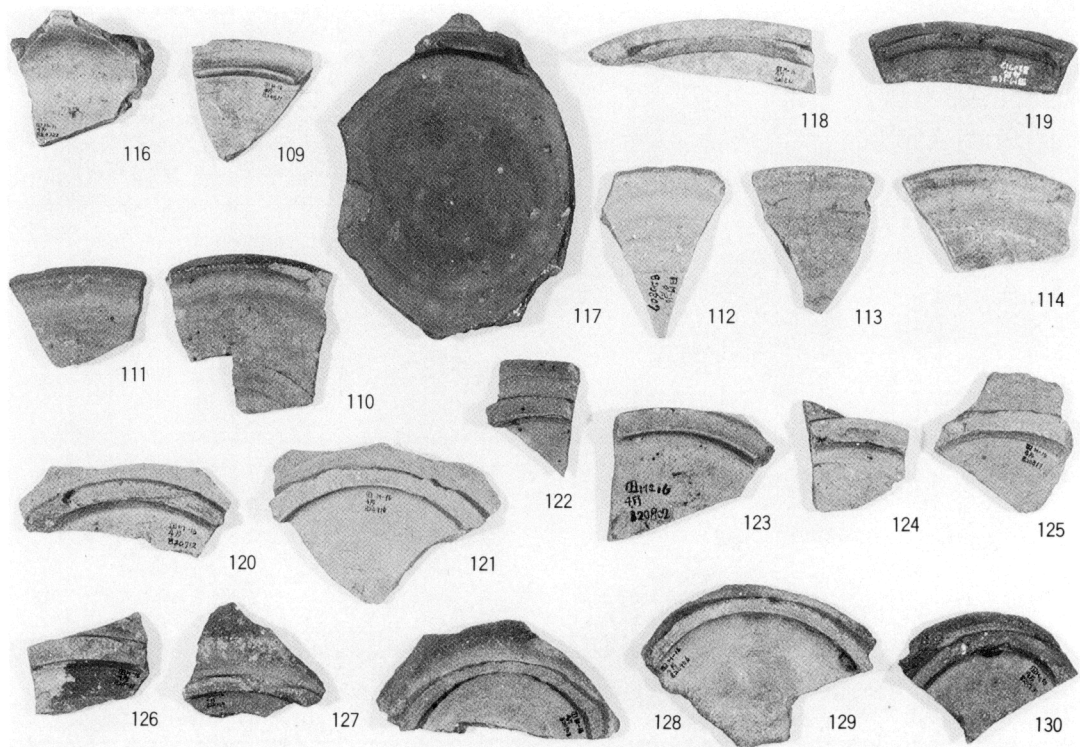
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）



(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物（土師器）



(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (土師器・黒色土器・須恵器模倣土師器)

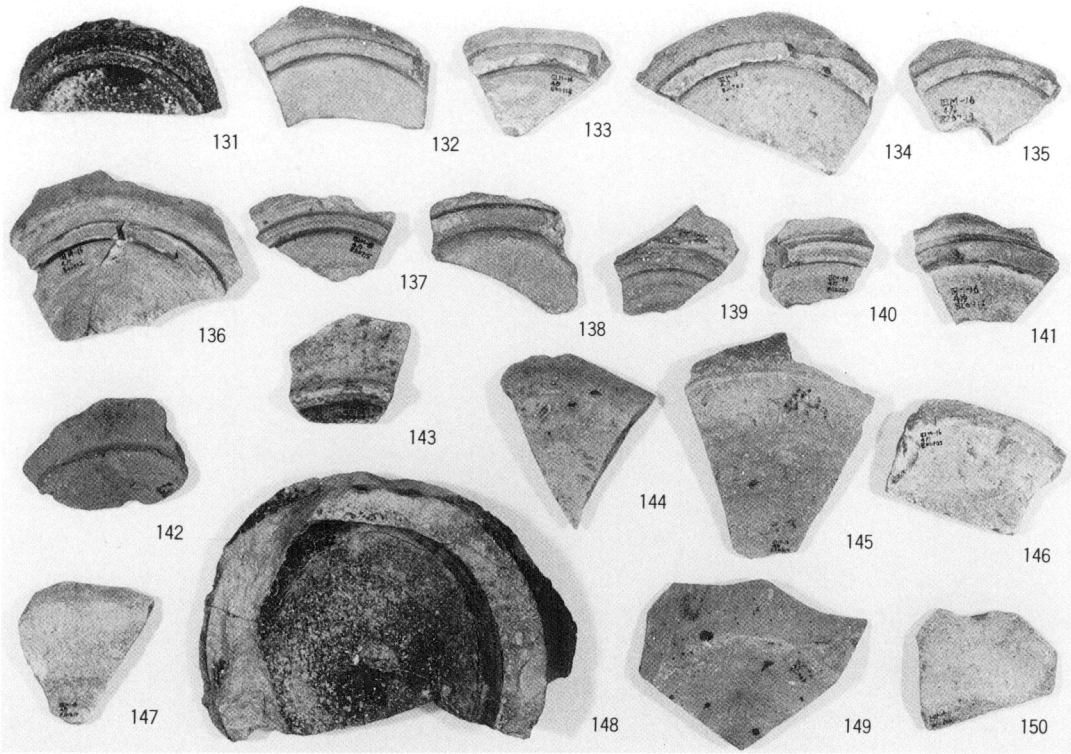


(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (須恵器)

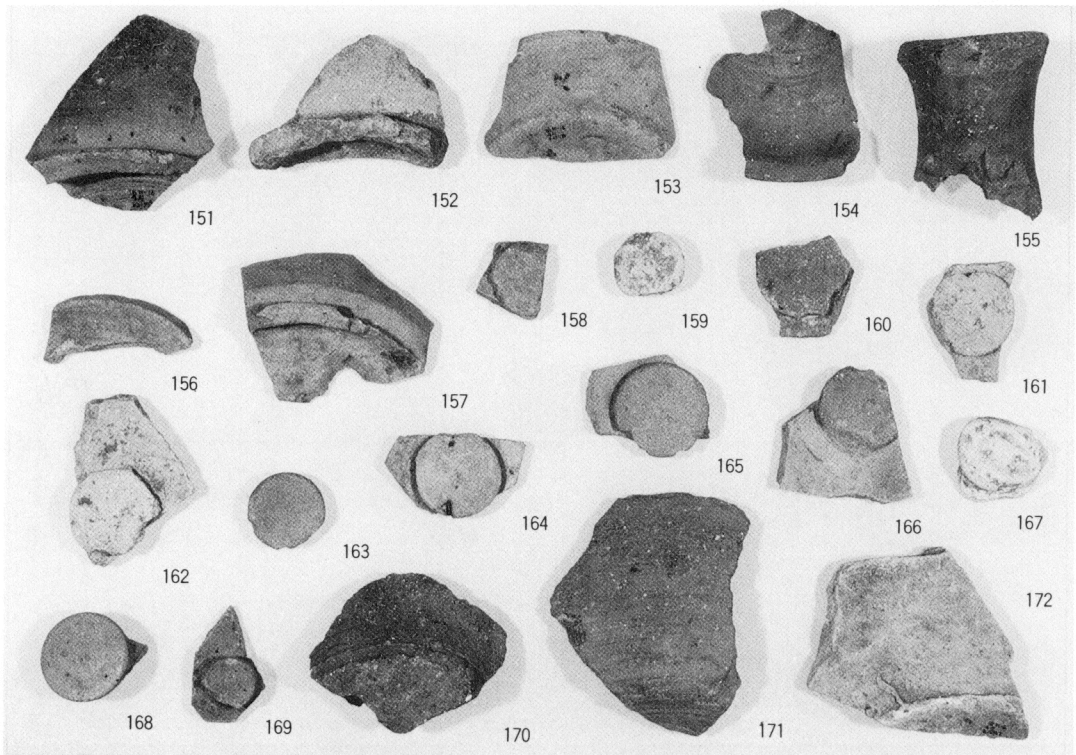


PL. 19

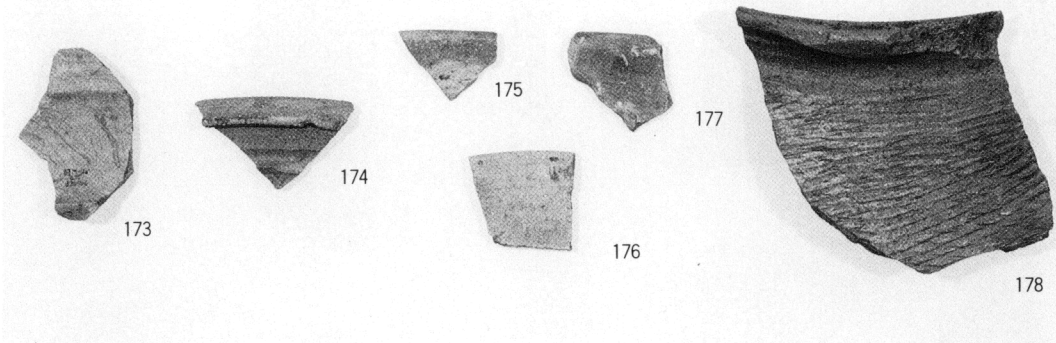
中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査



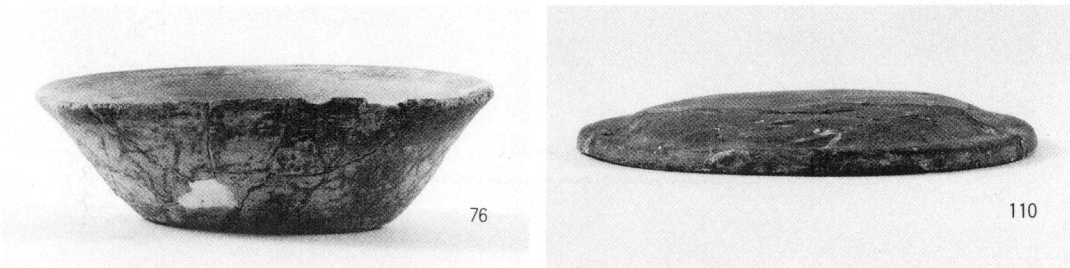
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (須恵器)



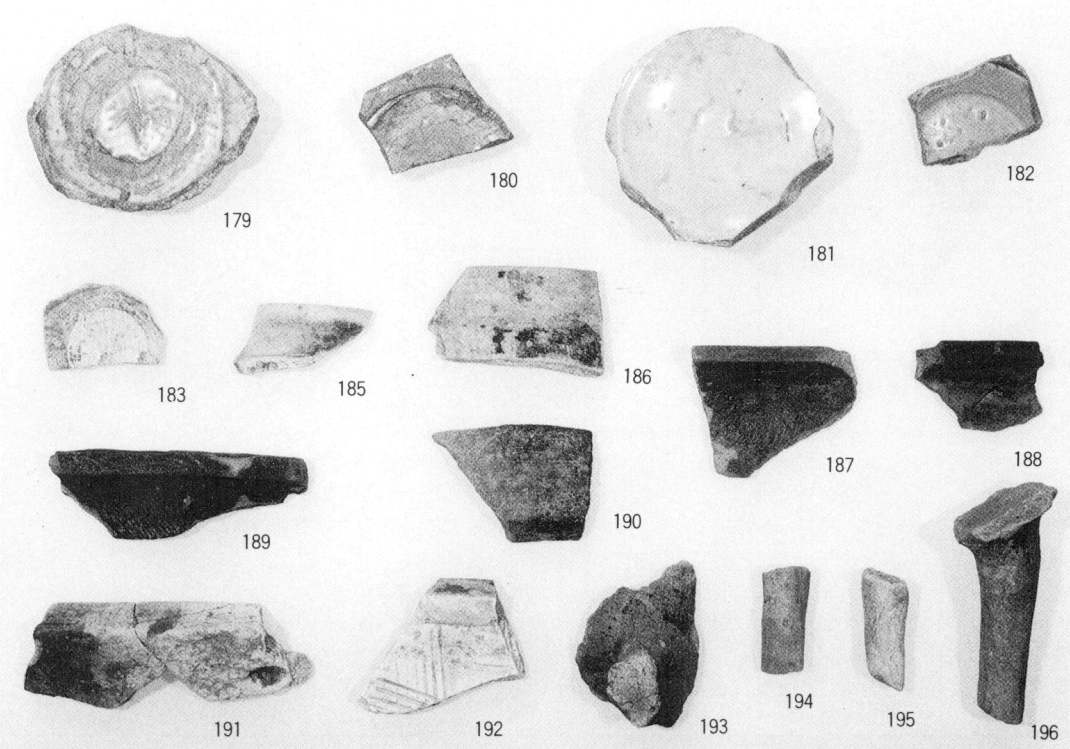
(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (須恵器)



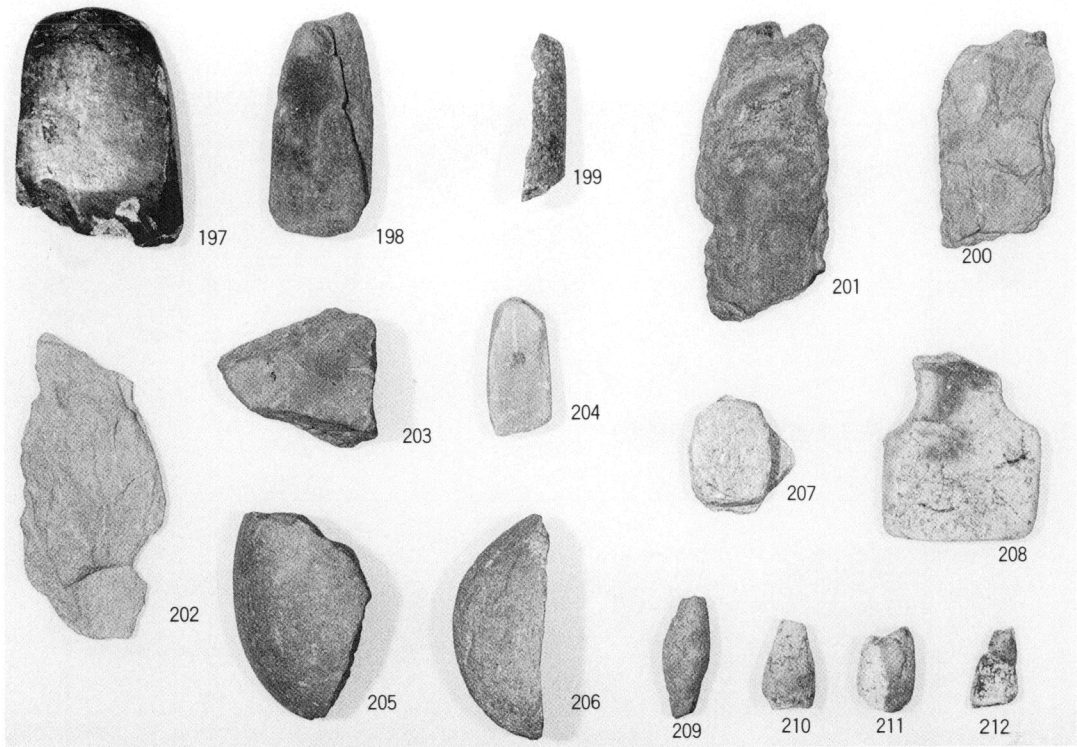
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (須恵器)



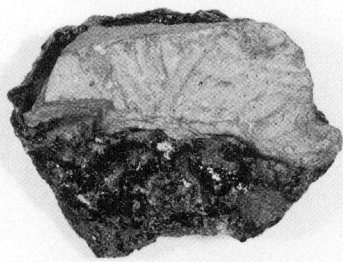
(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (土師器76 須恵器110)



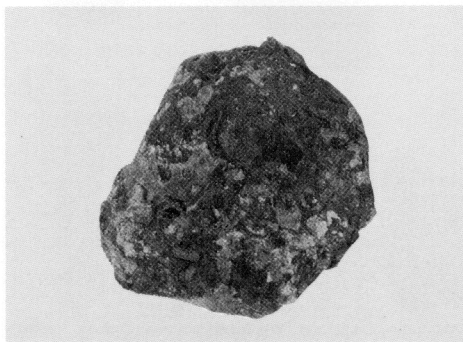
(3) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (輸入陶磁器179~183 瓦質土器185~196)



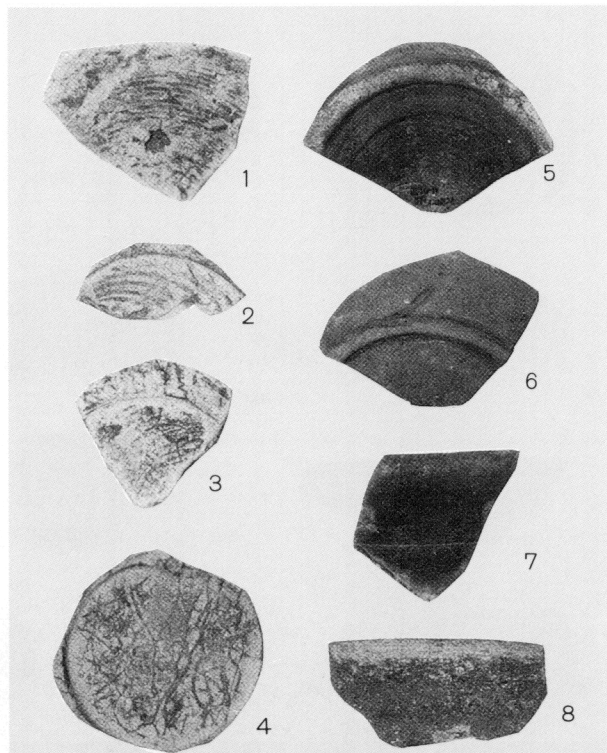
(1) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (石器・石製品・土製品)



(2) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (須恵器 窯跡付着資料)



(3) 第4層黒褐色粘質土出土遺物 (スラグ)



(4) 第5層明灰色砂質土出土遺物 (弥生土器 7 土師器 1~6 須恵器 8)